
上条当麻VSローマ正教&学園都市

マルコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

上条当麻VSローマ正教&学園都市

【Nコード】

N9170L

【作者名】

マルコ

【あらすじ】

第3次世界大戦終了後：世界は再び平和な日々に戻った。

世界中に蔓延る貧困や紛争の数は減りはしないが、

それでも世界は平和だった…

とある少年の活躍によって

戦争の裏で手を引く黒幕『右方のフィアンマ』を倒したことは、

世界ではあまり知られていないだろう

だが…その僅か数年後に又も世界は、

これから起こるであろう戦争について怯えていた。

この戦争で世界を救った彼の名前は有名になるだろう…
先の大戦を止めた、あまり知られていない英雄としてではなく
戦争を起こした極悪人として…

変わる世界（前書き）

とある魔術の禁書目録とone pieceの白ひげの戦争を混ぜたものです

オリキャラは適度に出していきますが、とりあえず一人だけ決まっています。

あとオリジナル設定もあるので苦手な方は、くれぐれも見ないで下さい。

変わる世界

ローマ正教と学園都市が手を組んだ。

それは世界中の魔術師たちが驚愕する出来事だった。

それもそのはず、ローマ正教と学園都市は、数年前に起こった第三次世界大戦で戦った仲だ

それを今になってなぜ手を組むことになったのか…

しかし驚いてはいるものの、彼らはその理由に心当たりがあった。

最近広がり始めた噂ではあるが、近々また戦争が起こると言う噂が広がっていたのだ。

その相手はあまりに強大で戦うには、

世界一の魔術大国であるローマ正教と世界一の科学技術を持つ学園都市が

手を組まなければならないほどである。

それほどの相手が一体どこにあるのか…ロシアかイギリスか…いや違う

その敵はつい最近出来たばかりの組織であるが、だがそのメンツは恐ろしいものである

特にその中でもリーダーは、先の大戦でローマを裏で支配していた『右方のフィアンマ』を倒し

世界を救った影の立役者である。

昔はあまり知られていなかったが、その組織は、やがて世界から恐れられる強大なものとなった…

その組織は、リーダーの名前からこう呼ばれる『上条勢力』と

変わる世界（後書き）

とりあえずここまでで、導入といった感じですよ

待ち構える学園都市（前書き）

続きです、感想のあるかたどうぞ言ってください

待ち構える学園都市

「まったく…折角外で暴れるって聞いてたのに、日本の…しかも東京じゃねえ」

張り詰める空気のなか一人の若い女の声が黙って待ち構える兵士達の沈黙を破った。

その女は、左腕がなく、右目も無かった。

かつて一人の無能力者と戦った時に出来た傷を持つ彼女の名は麦野沈利

学園都市第4位の『原子崩し』の使い手である。

「騒ぐなよ第4位…ただでさえ舐められてるのに…もつと弱く見えんぞ」

「ああ！？…なんだとお！？」

そう彼女に言ったのは、服を着ても分かるほど体中に傷を負った男
学園都市第2位『末元物質』の使い手、垣根帝督だった。

「舐めた口叩くとテメエーから消すぞ…『末元物質』」

「ふっ…別に構わないがまたお前の戦歴に白星を付けることになるぞ…」

と、二人がいがみ合っていると

「ちょっと御二人とも…これから戦争だというのにやめてください」

そう言ったのは、見るからにお淑やかで、綺麗な黒髪を持つ少女、
学園都市第5位である『心理掌握』であった。

「うるせえぞ！第5位っ！人を操るしか能のない奴が！！」

「……言ってくれるじゃないですか…第4位の分際で…」

と、争う3人の会話に入りこんだのは、

「ちょっと第5位さん…止めに入っというのせられてどうすんの？」

この中で一番冷静そうな、とある少年第6位であつた。

「まったく…これから戦争だというのに…頼もしい方々だ…ねえ第7位さん？」

「うおおおお！！！！これから俺達は、とてつもない試練に挑まないとイケない！！」

父さん！母さん！俺は、あなた方に貰った根性でそれを乗り切つて見せるうう！！！！！！」

そんな風に盛り上がる第7位を見た第6位は、

「なあ第7位さんてこの戦争の本当の目的、分かってんのかなぁ…？」

「さあな…実際第7位を説得した奴は、適当に説明したらしいからな」

第2位は、めんどくさそうに答えたがすぐに真剣な顔になって

「なんにせよ…これで俺たちは本当に自由になれるんだ…その為だつたら俺は何でもするさ」

そう言つと第6位があることに気付いた。

「そついや…第3位さんはいないみたいですけど?」

と、質問すると、第5位が

「ああ御坂様ですか…あの方はこの戦争への参加を拒んだらしいですわ…」

第5位は興味がなさそうに答えた。

そんな彼らが待ち構えるのは、東京湾の三日月型の湾等を囲みこむ数十隻の軍艦に

無数の銃砲が立ち並ぶ港の最前列であり。

彼らこそ、この戦争の力ギを握る5人の超能力者である、第2位と

第4位と第5位と

第6位と第7位達であった。

待ち構える学園都市（後書き）

自分の中での本文は最後の数行です。
あとはおまけです。

待ち構えるローマ正教（前書き）

ローマ正教側の話です

待ち構えるローマ正教

超能力者5名を湾頭最前列に置き、その奥の広場には、

これから始まる戦争の重要人物の処刑台が高くそびえ立っていた。

そして、その処刑台を堅く守るは、ローマ正教20億の中の最終兵器

『神の右席』である3人『前方のヴェント』、『後方のアックア』、

『左方のテッラ』

今、上条勢力を除くこの世に存在する最高の戦力が集い、戦争の最終準備を行っていた。

「はあーただ待つのは退屈ね…」

高級そうな椅子に座る、舌にピアスを留め、そこに腰の下まで伸びる細い鎖と小さな十字架を取り付けた全身黄色い服で覆った若い女『前方のヴェント』が退屈そうに言う

「何時やってくるかわからん以上そう簡単に警戒を解くべきではないぞ…ヴェント」

彼女の隣に座る青系の長袖シャツを中心にゴルフウェアを連想させるスポーティな格好の茶髪白人『後方のアックア』真剣な顔で言った、すると

「そうですよ…ヴェント先輩、油断していると死んじゃいますよ」

アックアの隣に座る、他の二人に比べ比較的若く緑色の修道服を着た男『左方のテッラ』が言った。

「新人の分際で私に意見してんじゃねーよ…」

「ひつどいな」それでも選ばれるだけの素質はあるんですよ」

テッラはおちやらけた感じに答えるが、アックアは変わらず真剣な顔で前を見据えて語りだした。

「だが、テッラ言うことも一理ある…そう何度も『神の右席』のメンバーは変わるべきでない『左方』一人だけでも決まったのは奇跡であるからな」

「よくいますねえ」僕の前のテッラを殺したのはあなたらしいじゃないですか…

アックア先輩」

「…奴はやりすぎた、ただそれだけである…が、もしもお前が同じような道を歩むなら…その時はまた手を下さないといけなくなるがな…」

アックアは、目だけをテッラに向けギロリと睨みつけた。するとテッラはゾクツと肩を揺らし苦笑いを浮かべた。

「まっまあ…とりあえず道を外さないようにはしますよ…それにしても結局『右方』の後がまは決まんなかったんですねー」

「仕方あるまい…今のローマ正教に『右方』の資格を持つに相応しい人物は存在しない」

「ム力つく奴だったけど、100年に一人…いや1000年に一人の逸材と言ってもおかしくない奴だったからね」

現在の左方のテッラは、今は亡き『右方のフィアンマ』については詳しくは知らなかったが

隣に居るヴェントがそこまで言うのなら、間違いなく途轍もない化物であつたに違いないと思つた。

その後は特に会話がなかつたが、今度はヴェントの方からアックアに話しかけた。

「にしても…まさかあんたがこちら側に付くとはね…イギリス側は上条勢力に加担してゐるって言つのに」

「…私も話を聞く前はイギリス側…いや上条側に付くと思つていたが…学園都市側の事情を聞けば仕方あるまい……」

「いや、もはや『学園都市』と呼ぶべきではないであるな……」

待ち構えるローマ正教（後書き）

アックアの口癖の『である』は、入れようと思ったんですが、変になりそうだったんで、最小限に抑えました。

ローマ正教と学園都市

ローマ正教と学園都市、二つの勢力が待ち構えているのは、学園都市の外である東京湾にある港という港を片っ端から戦えるように外壁を立てた即席で用意された戦場である。

数千の魔術師と学園都市にある技術を使って何とか簡単には潜入出来ないくらい外壁は立てられたが、その完成度は、よくて7割といったところである。

7割というのは、聞けばなかなかの完成度に聞こえるが、戦場では7割の力しか出せないというこは、その分弱点があることになり、そこを攻められたら7割の完成度などなんの意味もなくなってしまう。

もつと簡単に準備整えることが出来る所もあったが、ここを選ぶだけの理由もあった。一つは、今回処刑される人物を移動させるとなると、その移動最中に攻められ、罠を仕掛けられる可能性もある。

その為、出来るだけ移動をせずに済み、戦いで辺りに被害を出さずに済む場所として此処が選ばれた。

二つ目は、この地形である。神奈川県、千葉県そして東京都に囲まれている東京湾には、海に繋がる入口は一つしかない、その為、敵が攻めてきたら誘いこんでその入り口さえ閉じれば、完璧に袋のねずみとすることが出来るのだ。

今回ここが選ばれることによって、被害出るであろうと思われる神奈川県、千葉県、東京都に住む人々は、避難勧告が出されており、大抵の人々は実家に帰ることが強制的に決まっており、実家に帰ることの出来ない人達は一時的な避難場所として学園都市へと避難していた。

もちろん避難してきたすべての者に住む場所を確保出来るはずもな

く、ほとんどの者達は学校の体育館や病院、それか路上で過ごさなければならぬという状況になっていたが、それも今日で終わりであった。

戦争の状況を伝えるため、避難先である学園都市でもモニターされており、今日起こるであろう戦争を彼らは、ただ黙って見つめていた。

学園都市に住む者なら誰しもが注目する超能力者は最前線に構え、処刑台を守る3人の『神の右席』の他にも選りすぐりの精鋭たちが集められた。

処刑台の前の広場に居るのは、総勢1万にも及ぶローマ正教の魔術師達、そしてそれを補佐する5万の剣や銃で武装された軍隊、その中にいる中学生や高校生にしか見えない子供たちは、学園都市に選ばれた60名の『大能力者』や『風紀委員』の中でも『強能力者』以上選りすぐりの能力者達、合計176名の能力者に『警備員』を始めとする学園都市の最新鋭の装備で身を固める数千名の大人たち

ローマ正教と学園都市、二つの勢力の用意できるだけの戦力を用意し戦争に挑む。

死刑執行まで残り…… 3時間

ローマ正教と学園都市（後書き）

なんか偉そうに最初説明してますが、結局は、ただone pieceを再現したいだけなので、それにあった状況にしようと思っただけです。

自分の中では特に東京湾で戦うことに意味はありません。それと人数も適当です。特に意識しないで頂けたら幸いです

重要人物

数万の軍隊が広場に集まる中、今回の重要人物はまだ処刑台には上がっておらず

処刑台の裏にある護送された大型トラックのコンテナの中で死刑執行を待っていた。

「ワァーなんだかんでもないことになってますね…」

戦場に似合わない女らしい声を出したのは緑色髪と眼鏡をかけた、いかにも気の弱そうな女性『警備員』の鉄装綴里であった。

「もうすぐ戦闘になるんだから、あたり前じゃん」

そう言ったのは、彼女とよくコンビを組む同じく『警備員』の黄泉川愛穂

二人ともこれから始まる戦争に参加するために来た真正正銘の戦士である。

「別にお前まで来る必要はなかったんじゃない…鉄装」

「わっ！私だつて戦えます！それに能力者とはいえ、子供たちに任せて一人だけ安全な所に居るなんて私には出来ません！」

「…ふっ…まっお前のそういうところは立派じゃん」

そう言つて黄泉川は処刑台の後ろで待機しているトラックの方へと歩き出した。

鉄装もそれに続いて走り出した。

「あっあのー！」

「なんじゃん？」

「ほつ本当に戦争は起こるんですか？」

「……………そんなこと私に聞かれたって分かんないじゃん」

黄泉川は少し考えてから何やら複雑そうに答えた。

「まあでも何も起こらないならそれに越したことはないじゃん」

「あのっ！？黄泉川さん一体どこに？」

黄泉川がトラックのコンテナの前に来ると見張りの『警備員』が黄泉川に敬礼してきた。

「黄泉川隊長！なぜこちらに！？」

「奴と話がしたい」

「えっ！？困ります！もうすぐ処刑台に上げるというのにつ！」

「すぐ済むじゃん！いいから開ける！！」

警備員は一瞬困った顔をしたがしぶしぶコンテナの鍵を開けた。

「ちよつと！？黄泉川さん！！」

「お前は此処にいる…鉄装」

そう言い残し黄泉川は暗いコンテナの奥へと進んでいった。

奥には鉄格子がありその奥に一人のボロボロの男が足を鎖に繋がれ、両腕を後ろにして手錠をつけられて座りこんでいた。

「ひどいやられようじゃん…一方通行」
「…よみ…か…わ」

ボロボロの男は、今回の戦争の重要人物でもあり学園都市最強の超能力者である『一方通行』と呼ばれた男であった。嘗ての最強の姿は見る影もなく、見るからに痛々しかった。

今言った言葉でさえ必死に言葉を絞り出したと感ずるほどであった。

「まったく見るに堪えないじゃん…」

「……………ろ…………せ」

「んー？」

重要人物（後書き）

とりあえず一方通行にしてみました

背中刺す刃 (Fallere 825)

広場から離れたところに数機のアンテナを付けた車が止まっており、その中ではとある人物が学園都市を運営する十二人の人物で構成されている委員会『学園都市統括理事会』と話をしていた。

『ローマ正教から正式に承諾をえた』

『よって、お前に全指揮権を与える』

『しくじるなよ』

「分かりました」

『学園都市統括理事会』と話す人物は、金髪でこの戦場には似合わないアロハシャツを着ていた。

彼の名は、土御門元春、学園都市の暗部である『グループ』でリーダーの様な役割を果たしていた人物だ。

『分かっていると思うが…この指揮権は戦争終了までだ』

「ただの使いつパシリですか…」

『お前もはなからそのつもりだったのだろう？』

『その為にこの作戦を考えたのだろう？』

『しかし…お前から話を聞いた時は信じられなかった』

「間違いありませんよ…その為に俺はずっとスパイでいたんですから」

土御門の顔は普段学校で見せるような顔ではなく、裏の世界でしか見せない真剣な顔をしていた。

『しかし…本当に上条当麻は来るんですか？』

「それは…」

『彼は来ますよ…』

土御門の話に割り込んだのは、昔から『学園都市統括理事会』に属する重鎮、親船最中であつた。数いる『学園都市統括理事会』の中では比較的善人で土御門、上条、一方通行とも面識がある人物である。

『彼は間違いなく来ます…それが分かつてこの作戦を立てたでしよう？』

「親船さん…」

『何度も言いますが、私はこの作戦には反対です』

「分かつてますよ」

『あなたは本当にいいのですか？御二方ともあなたの』

「今さら何を言つても仕方ありません…どっちにしろもう止められない」

『その通りだ…何より止まるわけにはいかない』

「そう…学園都市に住むすべての人々の為に…」

『とりあえず、お前に任せる…しくじるなよ』

「分かつてます…」

そこまで言つともモニターはすべて消えて車の中は暗く、静かになった。

「言われなくても分かつてますよ…その為に俺は二人の友達を裏切るんだ…」

土御門は誰に伝えるでもない、ただポツリと呟いた。

~~~~~

「殺せだア？」

「はぁ…はぁ…まだ…まにあう」

処刑台の近くに止まるトラックのコンテナの中で一方通行は最後の望みを伝えた。

「躍起なるなっ！バカが！今さらお前が死んだところで止まりやしないじゃん」

「…クツ…ソが…」

「お前だつて分かってるじゃん…私たちはとんでもない化物を怒らせたじゃん」

そう…何をしてもしまらない

運命の死刑執行まで残り……………2時間30分

## 背中刺す刃 (Faller 825) (後書き)

とりあえず誰にしようか迷ったんですが土御門は、元帥的なポジションで、多分大仏にはなりません

黄泉川はおじいちゃん的なポジションです。ただこのまま行ったら黄泉川がとんでもなく強いことになってしまいます。

まあなるようにします…

## それぞれの覚悟

「黄泉川隊長…時間です」

先ほど扉を開けた見張りの一人が黄泉川に伝えた。

「……分かった」

しびしび立ち上がり鉄格子の前から退くと二人の男が、鉄格子に掛る鍵をはずして一方通行を繋ぐ鎖を掴んだ

「立て！」

一方通行は黙って立ち上がりとはと歩きだした。黄泉川は特に何を言う訳でも、する訳でもなく、ただ黙って見つめていた。

「迷っているようだね…」

処刑台へと歩いて行く一方通行を見ていた黄泉川に話しかけたのは、一方通行に上条当麻とも顔見知りである、カエル顔の医者『冥土返し』の異名を持つ超一流の医者である。

「なんであんたが居るじゃん？」

「これから戦争になるんだろう？ だったら医者の一人や二人や…二、三百人必要だろ？」

「…辛いもの見ることになるじゃん」  
「…君ほどじゃないよ」

二人は黙って処刑台を上がっていく一方通行を見つめていると、

「黄泉川隊長なにしてるぜよ？もうすぐ時間だぜい」

この戦場に似合わないアロハシャツを着た男が近づいてきた。

「土御門…」

「『冥土返し』…あんたも此処から離れた方がいいと思うぜい」

「これから人が傷つくと分かっている何もせずに待つなんて僕には出来なくてね…」

「そうかい…黄泉川隊長もさっさと配置について貰わないと…勝手な行動は困るぜよ」

「それって命令ってことじゃん？」

「ああ…俺の指示に従ってもらうぜい」

「それはつまり全指揮権がお前にきたったことになるじゃん」

「ええ…統括理事会からも許可が下りました」

土御門も処刑台の方へと歩いて行ったが一旦途中で立ち止り。

「悪いが『冥土返し』…俺は、世界にすべてを伝えるぞ」

「…好きにしたまえ」

「黄泉川先生もおかしなことはしないで下さいよ…あなたを傷つけると小萌先生に怒られる」

「…その優しさは一方通行に向けてやるべきじゃん…」

「今さら、何をして遅いぜよ…俺は覚悟できてるぜよ…友を殺すことも、戦うことも」

それだけ伝えて土御門は二人から離れて行った。

「黄泉川さん！！ほらっ！もう行かないと」

眼鏡をかけた『警備員』の同僚、鉄装綴里が黄泉川を呼びに来たので、黄泉川は元いた配置へと足を進めた

## それぞれの覚悟（後書き）

土御門の口癖は、まじめな時はすべて標準語になるわけではないらしい

とりあえず、ぜい、ぜよ、は付け足してみた。  
口癖ってめんどります。

まあ一番面倒なのは黄泉川なんですけど



## 魔術を侮辱した魔術師

処刑台の上に来た一方通行は、これといった抵抗をせずになだ黙って刻一刻と迫る死刑執行を待っていた彼の隣りに立つのは、一本の剣を持った二人の死刑執行人、いつもの一方通行ならただの剣で斬りかかったとしても、傷一つつけることが出来ないだろうが、今の一方通行は、力を使うためのチョーカーを奪われ、今は、学園都市側の用意した物を使ってかろうじて歩くことと会話が出来るようになっていただけである。そうしてしばらくすると一方通行のもとに土御門がやってきた。

「お前ら、少し外せ」

剣を持つ男たちは、コクリと頷き土御門と一方通行から離れた。土御門はマイクのような物を持って広場集まる兵士達に向かって語りだした。

『ローマ政教：学園都市の諸君：君たちに聞いてもらわないといけないことがある』

土御門のセリフに広場とその奥の港の最前列に構える兵士達が振り返り処刑台に注目した。

『今この場にこの処刑の本当の意味が分かる者は、数名しかいないだろう：だが君たちには知る権利がある』

語り始めた土御門を広場の兵士達と共に見ているカエル顔の医者、複雑な顔をして見つめていると、何処からか黄泉川が現れた。

「別にあんたの責任じゃないじゃん」

「……ありがとう……こういう時に女性はやさしいね」

土御門は一方通行の方をいつもと違う真剣な顔を向けた。

『一方通行……お前の母親は誰だ?』

「……母……親?……知るか」

『嘘をつけ!! お前は知っているはずだ!!』

マイク越しの大声だったので聞いていた兵士達の中には思わず耳を塞ぐ者もいた。

声を荒げた土御門は、再び広場のほうを見つめて語りだした。

『まずはローマ正教の諸君しか分からないと思うが……今からおよそ70年前、ある魔術師がいた……』

そいつは、紛れもない天才で今存在する魔術の半分は、そいつからの影響を受けたと言っても過言ではない、だが、奴は魔術師の頂点に立つて置きながら魔術を捨て科学へと走った……その為に魔術界で「世界で最も魔術を侮辱した魔術師」として世界中の魔術師を敵に回す羽目になった……やがてその男は襲い来る魔術師から重傷を負いながらも何とか生き延びた。そして、その男は魔術師たちの目を欺き己を死んだことにした……だがその後に奴を殺そうとした魔術師たちは、その男の家族、親戚、友人を異端者として次々と殺害していった。だがその中で唯一殺されていない、娘がいた。

魔術師達はその娘の存在に気付かなかった。なぜならそいつは父親によって殺されていたからだ……

いや、父によって殺されたことにし存在を隠した……そして娘を一人

日本に送り

その後、自分も日本へと渡り…ある都市を作り、その支配者となった……

娘はその後日本で子供を作り…出産時に命を落とした』

そこまで聞いたローマ正教の魔術師達と学園都市の能力者、『警備員』たちはざわつき出した。

ローマ正教の魔術師達は知っている。その魔術を侮辱した男が誰かを、

学園都市に住む彼らは知っている。誰が学園都市を支配しているかそして今伝えられた、娘が生きていたという真実

『一方通行…お前も分かっているはずだ…お前の母の名は…リリス…『リリス・クロウリー』…！』

ここにきて話を聞いていた彼らの疑惑が確信へと変わった。  
尚も土御門は続ける

「知らんわけじゃないだろう！！お前の祖父は『アレイスター・クロウリー』だ！！！」

ザワツと一斉に広場に衝撃が広がる中、カエル顔の医者目は目を瞑り白衣のポケットの中で静かに拳を握りしめていた。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「あなたに頼みたいことがある」
「ふゝ今度は何かな？」
「もうすぐ娘に子供が生まれる…だが娘は体弱い…出産には耐えられないだろう、その時は子供の方だけでも助けてくれ」
「…君が孫の心配をするのかな？」
「まさか…その子が私のプランに必要なだけさ」
「その為なら…君の娘がどうなってもいいと」
「私が娘の心配をいちいち心配するとても？」
「……思わないだろうね…君は」

数カ月後

「オギヤー！オギヤー！」
「よかった…」
「…かわいい男の子だよ」
「…先生…この子ことを…よろしく…お願いします」
「何を言ってるんだい！？君が育てるんだよ！」
「父さんに…見せてあげて…ずっと…楽しみに…してたから」
「リリース…」
「…そうだっ…この子の…なま…え…は…」
「リリース…！」

魔術を侮辱した魔術師（後書き）

やっぱり「おまえの祖父は」じゃ、あまりかつこがつかない気がするでも、娘がいるって設定らしいので、取り合えず娘を登場させてみた。

もったかつこ良くしなかったんですが…まあこれが限界でしょう

真の自由

土御門の演説を聞いた兵士たちは、しばらくただ啞然としていた。中には「アレクスターの子孫が…」「生きていたのか!」などと騒いでいる者もいたが、それでも土御門の演説は続く

『この事実が分かった頃には、上条当麻はすでにそのことに気づき、お前をアレクスターの抵抗手段として、上条勢力に参加させた。』
「…ち…げエ…」

一方通行の言葉に反応した土御門は持っていたマイクの電源を切り、広場の兵士たちの方を見つめながら話した。

「なんだ? 一方通行…」

「あいつは…そんなことの為に俺を仲間にしたんじゃない」

「……………」

「あいつは…俺を…仲間として…友達として…俺を信頼してあいつの組織に…入れてくれたんだ…」

「…そんなことは分かっている…だがこう言えば辻褄が合うんでな…それにお前は勘違いをしている」

「なに?」

「あいつは確かにお前を仲間として組織に参加させただろう…だが本当の目的は違う」

一方通行は驚いて、広場を見続ける土御門の横顔を見つめた。

「あいつは…お前を守ろうとしたんだ…このことが知られればお前は多くの魔術師から命を狙われることになる。それを恐れたあいつはお前を自分の組織に入れ、手出しを出来ないようにした…上条勢

力と言う名前を利用してな」
「っ！！？」

それだけ言うと再び土御門はマイクの電源を入れて、何事もなかったかのように語り始めた。

『上条当麻のことはよく知っている…あいつは仲間が傷つくことを絶対に許さない…』

だから俺は下手にお前に手を出すわけにはいかなかった…だから俺は上条勢力に入り込み

機会を伺っていた…いずれお前を捕まえるチャンスが来るのをな！

！』

土御門は一步前に出た。

『今ここで一方通行を殺すことでアレイスターの進めている計画に大きな狂いが出る！！』

さらに上条当麻を殺すことでさらなる、これまで以上の大きな亀裂が走ることになる！！』

そして、追い詰められた奴は、自らその身を投じて計画実行にでる！！』

そこをたたくっ！！』

先ほどまでざわついていた兵士たちは黙り、皆息をのんで土御門の話聞いていた。

『その時こそ奴を倒し！！この奴の思い通りに動くこの世界を壊し！！』

俺たちの…真の自由を手に入れる！！諸君ッ！今日始まるこの戦いが終わりではない！！』

この戦いこそが真の自由を手に入れるための始まりだ！！！」
「「「ウオオオオオ！！！！」」」

今まで静まり返っていた兵士達は一斉に叫び出し、その声を東京湾へと響かせた。

兵士の士気を上げた土御門はマイクを切って処刑台から降りようとしたところに一人の男がやってきた。

「土御門殿オオ！！報告しますっ！！！」

死刑執行まで後……………2時間

真の自由（後書き）

まあゴタゴタいつてますが。

ただ戦わせる理由が欲しかっただけなので

ぶっちゃけ矛盾があると思いますが、どうか見逃してください

……あきらかに土御門のキャラが変わってる（ボヤキ）

上条勢力（前書き）

長いです

上条勢力

「土御門殿オオオオ」

一人の男の叫びを聞いて、内容を聞くよりも前に土御門は返した。

「来たかつ!？」

「はい!!横須賀港の部隊及び木更津港にいる部隊を突破し!こちらに向かっています!!」

「なに!?!なぜそこまで侵入を許している!!報告はどうした!!」

「そつそれが!奴ら突然現れて攻撃してきたために部隊は完璧に不意を突かれ総崩れ…」

生き残った者達だけでは追撃は不可能とのこととでっ!!」

「馬鹿な!!結界班や他の見張りの奴らは何してた!!」

「今のところ詳しいことは…ただ気になることが!!」

「!?!今度はなんだ!？」

「はっ!報告では上条当麻らしき人物及びその勢力らしきものは見なかったとのこととで!!」

「!?!どういうことだ…」

土御門が考えをまとめようとしていたが、次に響く声がそれを阻んだ。

「来たぞオオオオ!!!!」

「総員!!戦闘態勢!!!!」

広場の兵士達は一斉に海岸の方を見て、身構えた。報告通り敵はそれぞれ港を突破して来たのだろつ。

「一体何処から…」

土御門は、これが最後であろう、疑問の言葉をこぼした。

だが広場は、それを気にするほどの余裕はなく、それぞれの部隊の報告があちこちから

聞こえ、海の奥に見える数十隻の大艦隊を確認していた。

「来たぞオオ!!」 「魔術船の大艦隊だ!!!!」

「X字の十字架…聖アンデレ十字の旗です!!」

「その隣りには、あれは…インドの、サドウー魔術団!!」

さらに日本の陰陽師らしき船も!!」

「それだけじゃない!! 『明け色の陽射し』のボス、バードウェイ
!!

その奥には!! ロシア正教『殲滅白書』のワシリーサもいます!!
!!

「総勢35隻!! 上条当麻及びその隊長達は見当たりません!! しか
し!

間違いなく上条当麻の傘下の魔術師達です!!」

~~~~~

「闇咲隊長!! 準備を整っています!!」

「よし… 上条殿の合図を待て…」

「了解しました!!」

陰陽師達がのる船を指揮するのは、「闇咲逢魔」かつてとある女性  
を救うために

インデックスに近づいた、日本の魔術師である。

「ふゝ当麻の奴は上手くいったのかな…」

聖アンデレ十字の旗を掲げる船を指揮するのは「テルノア」  
かつて学園都市破壊を目論んだ魔術師である

「ここまででは上手くいったが…あとはどうなるか…」

「なにがあっても戦うしかありません…そうでなくては彼に申し訳がない」

インド「サドゥー魔術団」を指揮するは、「ラクーシャ」、「ハリーシャ」共に

上条当麻に助けてもらった魔術師達だ。

「はあゝい一方通行ちゃん！今度は世界を敵に回しちゃったぞつと！…」

「…はあ…回答—ここまで来てもあなたのお茶らけぶりは変わらないのですね…」

「なによゝサーシャちゃんだって愛しの当麻君に会えるからって張り切ってたくせにっ！」

「グハアツ！！反論—！！なっ何を—！！」

「もゝ照れちゃって！かわいいい！！」

数ある戦艦の中で最も数が多く、最も巨大な戦艦の指揮するのは、  
ロシア正教『殲滅白書』リーダー「ワシリーサ」とその助手「サー

シャ」

~~~~~

全体を見渡せる位置にいる土御門は、
ただその光景を特に慌てた様子もなく見渡していた。

「これほど集まるとは…」

「お前ら…まで…」

あたりが混乱するなか、土御門は冷静を保ち状況把握をしていた。

「土御門様！！攻撃命令を！！」

「待て！！上条当麻はすぐ近くにいます！海上に目を配れ！！」

~~~~~

「ハッハッハッ！！こいつはすげえ！！」

「ゾクゾクしてくるわねえ！さっさと来い！！上条当麻！！」

港の最前線に構えるレベル5の中で最も好戦的な「垣根帝督」と「  
麦野沈理」は、

目の前の敵を見つめて興奮に似た感情を抱いていた。

それぞれが敵の姿を確認している中、初めに土御門がわずかに遅れ

て「神の右席」の3人が

わずかに聞こえる兵士達の騒ぎ声以外の声を聞こえた。

音は、小さかったが確かにブクブクと聞こえてきて、

間違いない音は大きくなってやがてその音に広場の兵士達も気付いた。

「なっなんだ？」「一体何処から？」

兵士達は、音の在りかを探していたが、処刑台で見ていた土御門は誰よりも

早く気付いた。広場の前にある湾内に影があることに、

「まさかつ！」

すべてを悟った土御門と「神の右席」以外にも兵士達の中にも気付いている者もいた。

カエル顔の医者、真剣な顔で語る

「…とんでもない所から現れやしないかい」

それを聞いた同じく気付いた黄泉川は語った。

「どうやら…布陣を間違えたじゃん」

聞こえていた訳ではないが、黄泉川の考えに土御門も納得をしていた。

「くそっ！！そうか…奴ら魔術で海底を進み…結界は『幻想殺し』で！」

次の瞬間、ドパアアアアン！！と湾内の中に一隻の戦艦が浮かび上がり、  
その後が続いて3隻の戦艦も浮かび上がってきた。  
それから、ほんの4、5秒程たつと兵士達の中で一番早く状況を確認したであろう男が  
報告して来た。

「土御門様！！湾内へ侵入されました！10人の隊長達も確認しました！！！」

目の前で見ている土御門にとって、そのようなことは見れば分かることだったが、  
そのことも吹き飛ぶほどの重大なことに土御門は気付いていた。

その重大なことは、目の前に4隻の戦艦が現れたことでも、  
10人の曲者揃いの隊長達を前にしたからではない。  
ただ一人の男が土御門の前に現れたことだった。  
男は、何か特別な格好をしているわけでもない、  
彼が昔よく着ていた学生服を思い出させる黒いズボンに上には、  
昔学生服の下に着ていたような赤にスポーツTシャツ  
のような物をきてその上に黒いコートの様なものを羽織り、  
昔と変わらないツンツン頭をしていた。  
そう、昔と変わらない、ホントに変わらずその男は立っていた。  
これからとんでもない戦いを始める当事者あるにも関わらず、  
ポリポリと頭を掻きながら男は、言葉を放った。

「はあ……いつ以来だ？土御門？」



声をかけられた土御門は警戒を解かないが、男は続ける。

「まったく…俺のダチは無事なんだろうなあ？」

それを聞いて初めに声を出したのは土御門の隣りに座る一方通行だった。

「当麻アアアアアアアアアア！！！！」

その言葉聞いた男は、ただニヤリと笑い、  
安心させるかのようにゆっくりと自信に満ち溢れながら言った。

「ちょっと待ってる……一方通行」

## 上条勢力（後書き）

後ろの艦隊は、とりあえずドラマCD等からのキャラたちや一回しか出番がなかった奴らをメインにしました。

多分まだ書き直します。

まあドラマCDだけの奴らとかは設定がよく分からないので適当に付け足しました。ああ後隊長達の数も適当です

## 行間一（前書き）

過去編的な…

## 行間一

「ちょっと待ちなさいって！」

一人の若い女の声が学園都市最強を呼び止めた。

「うっせエ！そこどけ！！」

彼女の言葉を見殺し、立ち去ろうとする男を今度は別の男が呼び止めた。

「今回はいいって上条も言ってるだろ！」

「うっせエ！！おめエらだって納得できてねエだろ！！」

「そりゃ…あんたの気持ちも分かるけど…」

「あの野郎は…俺達の掟を破った…それが事実かどうかは確かめないで、曖昧なままで終わらせるなんて出来るかっ！？」

叫ぶ学園都市最強の後ろから、上条当麻が声をかける。

「今回のことはいいいんだ、一方通行…なんだか妙に胸騒ぎがする…」

「っ！？あいつは、隊長だってエのにテメエを裏切ったかもしんねえんだぞ！！…俺は納得できねエ！！直接行って確かめる！！」

「ちょっと！待ちなさいって！一方通行！！」

「このまま黙ってられるか…何よりダチの不安取り払ってやるのもダチの役目だろ！」

「待て！戻れ一方通行！！」

## 行間一（後書き）

こうして一方通行は、土御門に会いに行きました。

えっ土御門が何をしたかつて？

まあ、当麻が嫌うことです。

自分の中で描いているのが、誰か助けを求めている人達を見捨てたとか

そんな感じです。

## 上条当麻と一方通行（前書き）

オリジナル設定あり  
嫌いな人を見ないで…

## 上条当麻と一方通行

目の前に現れた友の上条当麻を目の前に一方通行の心情は複雑だった。

助けに来てくれた嬉しさもあったが、何より自分のせいでこんなことになってことに対する罪悪感の方が一方通行の感情のほとんどを支配していた。

「なんでっ…なんで見捨ててくれなかったんだ！？俺の身勝手が招いた結果だろっ！！」

今までにないほどの感情を露わにし一方通行は叫んだ。  
その叫びを聞いた上条当麻は、

「……………いや、俺は行けって言っただぜ」

「何言っただ！？オメエらが止めたのに俺が…」

「俺は行けって言っただ…そうだろ？御坂？」

当麻は、後ろを振り向きもせずに後ろにいる若い女に尋ねた。  
女は、答える。

「ええ…確かにあんたは行けって言っただぜ」

「だそうだ…俺のせいでとんだ苦労かけちゃったな…一方通行」

「っ！？」

「なあに…この世界の奴らじゃ誰でも知ってることだ、

俺の仲間に手を出せばどうなるかな…そうだろっ！！みんな！！！」

ウオオオオオオ！！と4隻の船から凄まじい叫び声が響いた。数は3、4千程の集まりでしかなかったが、その叫び確かにその港を包



み込んだ。

その光景を処刑台下で見ていた『神の右席』達は、

「まったく、とんでもない者を呼び寄せたものですね…」

「何を今さら…」

「ここまで来て後悔している暇はないであろう…テッラ」

だが、そんな叫び声をかき消すかのように、ローマ正教側から先手を打たれた。

突如当麻達の4隻の船を中心にズドドドツつと音を立てながら4本の水の柱が立ち上り、船の上に巨大な球体を作りだした。異常な光景にこの攻撃を知らされていなかったのか、学園都市側の人間達は驚いていた。が、それとは対照的に

「うおーすげーな…インデックスっ！なんなんだコレ？」

落ち着いて、後ろにいる白い修道服を着ている少女に尋ねた。

「…ローマ正教側の魔術だね…4本の水の柱を軸にして、言い伝えにある…」

「あああ！もういいっ！歴史の授業なんて聞いてらんねえよ…」

「なっ！？とうまから聞いてきたんでしょ！？」

「俺が知りたいのは歴史じゃなくて、このこれは単発式か？それともどっかに元になる核があるタイプか？」

「完成するまでは、4本の柱からの力を源としているけど…大まかな分類で言ったら

単発式の魔術だよ」

「それだけわかりや十分だ…」

そうして話しているうちに当麻達の頭上にある水の玉は、当麻達4隻の船を一度に飲み込めるほどにまで大きくなった。タイミングを見計らった土御門は当麻達に睨みつけながら、

「俺が何も用意してないとも思ったか？…やれ！！」

土御門の合図と共に巨大な水の玉が当麻達めがけ落ちてきた。

それに対して当麻がとった方法はただ一つ、その球体向かって右腕を向けた。

たったそれだけの行動しかとらなかった。が次の瞬間、落下を始めた球体が突如、

ブワァン！と跡形もなく消えてなくなった。

「どっとうした！？」「何が起こった！？」

突然のことにローマ正教、それだけでなく学園都市側も驚いていた。半径が何百メートルもある強大な水の球体は本当に跡形もなく消え去った。

その光景を見ていた彼らも、ただ消えたとししか表現できない状況に戸惑っていたが、

「おっおい！あれを見る！！」

そんなことを忘れさせるような光景を彼らは目の当たりにした。球体の上にあったであろう、空が消え去っていた。

いや、空自体は確かに存在していた。ただ、球体が消えた位置からち丁度上の部分にあたる雲が綺麗な円を描いて消え去っていた。

「どうなってる!?!」「なんなんだコレはっ!?!」

皆、この空をただ呆然と見上げていたが、唯一土御門だけは不機嫌そうな顔をした。

「チツ…完成された「幻想殺し」の前では、時間稼ぎにもならんか…」

「たくっ…水の無駄遣いは止そうぜ…水がなくて困っている国がどれだけあるか知ってるのか?」

「…なにをぼんやりしている!!!戦闘中だぞ!!!」

土御門の言葉によつやく彼らは空から目を離し、湾内にいる上条当麻に視線を移した。

「さて…じゃあ、そろそろこっちも行くか…行くぞ!!!みんな!!!」

当麻の言葉に士気の上がった彼ら、「上条勢力」は、それぞれ武器を構え、ウオオオオオと叫び声をあげた。それを見ていた土御門は、全軍に向かって叫んだ。

「勢力で上回ろうが勝ちとタ力をくくるなっ!!!ちよつとでもそのようなこと考えようものなら、そんな淡い幻想…すぐに食いつくされるぞ!!!奴はっ…すべてを打ち消す力を…世界を滅ぼす力を持つてるんだ!!!」

攻め入るは『上条当麻』率いる総勢39隻の戦艦  
迎え撃つは世界最大の魔術大国『ローマ正教』と世界最先端の技術  
を持つ『学園都市』

誰が勝ち

誰が負けても

時代が変わる!!!

## 上条当麻と一方通行（後書き）

こんな感じです。

当麻の力の凄さをなんとか表現したかったけど

俺では無理かな…

自分の想像の1%でも伝えられていれば満足です。

## 決戦の始まり（前書き）

一様第一部にのせたことですが、注意書きです

とある魔術の禁書目録とone pieceの白ひげの戦争を混ぜたものです

オリキャラは適度に出していきますが、とりあえず一人だけ決まっています。

あとオリジナル設定もあるので苦手な方は、くれぐれも見ないで下さい。

## 決戦の始まり

当麻の合図と共に、湾内の船は処刑台の広場めざし進みだした。それに少し遅れ広場に備えられた大砲も次々と火を噴いた。

無数の砲弾が当麻達の乗る船目がけ飛んできて、いくつかの砲弾は確かに船に当たり

ダゴォンッと爆発音と共に煙り出して燃え上がったが、煙が晴れてみると

船には、それほどダメージを与えることが出来なかった。

「特別な加工をしてあるな…沿岸に備えるローマの魔術師に伝えろ！予定通りの作戦で行くとな！！」

「はっ！！」

船の様子を見た土御門は、処刑台の下にいた兵に命令し、作戦実行を待った。

~~~~~

当麻が乗る船の中でも当麻指揮のもと慌ただしくなっていた。

「こっちもバンバン撃ってけよ！！弾の心配すんなよ！！」

「はいっ！！」

「いくら強化してあるからって何発も受けられねえ！落とせるのは全部落とせ！！」

「了解！」

「当麻様！！あれを！」
「どうした！？」

一人の黒い服のシスターが当麻を呼び、広場に並ぶ魔術師達を指さしていた。

魔術師達は、暫く何もせずに立っていたが、何かの準備が整ったのか突然全員揃って

手を海水につけた。すると、手をつけた所から急に凍りだし、信じられないスピードで海面に広がり当麻達4隻の船を氷で取り囲み動きを封じた。

急に止まった船の衝撃に転ぶ者いたが、数いる数人の魔術師の中で、長い髪をポニーテールに括り、Tシャツに片方の裾を根元までぶつた切ったジーンズ、

腰のウエスタンベルトに2メートル以上ある刀をさしているという奇抜なファッションをしている、天草式十字凄教女教皇『神裂火織』は冷静に告げる。

「動きを封じられました」

「ああ……」

「どうするよ？上条……」

質問して来たのは『建宮斎子』昔、天草式で教皇代理を務めた男だ。

「『幻想殺し』で消してもいいが……降りて直接進もう、上手く行けば船よりも早く広場につくし白兵戦の方がやりやすい」

「分かりました」

「了解っ！！」

当麻は船の先頭に行き、慌ただしく作業している仲間達に叫んだ。

「各隊長は船を下りて直接広場を目指せ！！それから何人かは残って大砲で援護だ！！」

「了解！！」

命令を受けた天草式は神裂の近くに集まった

「みんな！行きますよっ！」

「俺達は何処までもついてきますよ！女教皇！！なあそうだろ！？」

「もちろんですよっ！！」

「一緒に戦いましょう！！女教皇！！」

同じく命令を受けた元ローマ正教『アニエーゼ部隊』は隊長『アニエーゼ』サンクティスの元に集まった。

「じゃあみんな…分かってると思いますがくれぐれも死なないように！！」

「私よりあなたの方が心配ですよ、シスターアニエーゼ」

「みんな死んじゃだめですよっ！！」

「行け！！みんな！俺達『上条勢力』に手を出したらどうなるか！見せつけてやれ！！」

当麻のそう言った後、それぞれ部隊が覚悟を決め氷漬けの海に降り立った。

~~~~~

「隊長達が出てきたぞオオ!!」

「『アニューゼ部隊』!に『天草式』!魔術の主力部隊だ!!」

「砲撃を休めるなあ!!」

さまざまな声が交わる中、まだ戦闘状態になってない場所にいた力エル顔の医者に黄泉川は忠告する。

「さつさと下がった方がいいじゃん『冥土返し』」

「なにを生ぬるいこと言ってるんだい?…彼がその気になったらこの世界のどこにいても安全な場所なんてないよ」

~~~~~

「こつちもドンドン撃ってけエ!!」

当麻達の後ろにいた艦隊でも激戦を繰り広げていた。

「湾内に攻撃が集中してる!!この隙に突き進めえ!!!!」

前に構える数隻の船から一斉に当麻達を取り囲む港に向かって砲撃をしたが、その弾は、すべて突如港に現れた子供たちによって、無残に叩き落とされた。

「そうはいかねエか!!」

「『学園都市』の大能力者達だ!!」

手薄になりがちだった港には大能力者である子供達は何十人もズラリと並び、守りを固めた。

「これだけ集まるのは見たことがねエ!!」

「第三次世界大戦も真っ青だなっ!!」

「かまいやしねえ!! 薙ぎ倒して進めエエ!!」

~~~~~

仲間達が進む中、当麻は冷静にこの戦場を見渡そうとした、そこに突如一人の女がビュンと凄い勢いで飛び上がった。その正体に当麻はいち早く気付いた。

「ヴェントか!？」

当麻を見下ろす位置にまで飛んだヴェントは、船の先頭で指揮する当麻に向かって

その手に持っていた鉄線ハンマーを乱暴に振り回した。すると、ビュゴオオオ!!と凄まじい風を切る音と共に目で見ても明らかな攻撃力を持つ風の塊が当麻目掛けて飛んできた。

「『神の右席』のヴェントだアア!!」

誰かそう叫んだ頃には、その風の刃は当麻に向かって飛んできて、あと少しで当麻に当たりそうになった瞬間、突然当麻の前に氷の壁が幾重にも張り巡らされバキンッ!と風を氷で防ぎ、ヴェントの攻

撃から当麻を守った。

その氷を張ったであろう、茶髪にジャージの上に下はジーパンといった服装の不良っぽいイメージを持たせる男は当麻の数歩前に立ちヴェントを睨みつけた。

「いきなり大將が取れる訳ねえだろ…」

## 決戦の始まり（後書き）

o n e p i e c c e の中ではお気に入りのシーンです。  
又、その内隊長達の紹介ものせます。

## 2 番隊隊長（前書き）

浜面をかつこ良くしてみた。

## 2 番隊隊長

戦場のあちこちに向けられるいくつもの視線が今度は『神の右席』であるヴェントの攻撃を防いだ、男へと向けられた。

『上条勢力… 2 番隊隊長「浜面仕上」』へと、

「2 番隊隊長！！浜面仕上！！」

「あの極悪人の異名を持つっ！？」

「数々の極悪非道な事件を起こした為に学園都市を追放された男…」

『上条勢力』の中でもなかなかの有名人であろう浜面の登場に驚いてはいるが、情報操作の影響があまりにも事実とはかけ離れた情報が知れていた。

~~~~~

当麻は、目の前の自分を守り、ボロボロになった氷を右手触り碎くとニヤニヤしながら浜面に語りかけた。

「極悪人か… A T M 強奪ぐらいしか出来ないのに極悪非道扱いなんて…

酷い言われようだな…浜面」

「うるせえ！！」

当麻の冷やかしを適当に流した後、空中でこちらを睨むヴェントをにらみ返し、何処からか札のような紙を取り出し、それを乱暴に握りつぶした。

「四神：「白虎」」

その言葉と同時に握っていた札は消え去り、次の瞬間浜面の体が空にいるヴェント目掛け一気に飛び上がり、ヴェントの目の前、正確にはヴェントより僅かに上に現れた。

（早いっ！）

ヴェントは、自分より上に浜面を見上げ、浜面がサッカーのオーバーヘッドキックの様な態勢になったのを見て、即座に持っていたハンマーを前に出し、防御の構えをとった。

浜面もその動作は見えていたが、気にせずそのまま構えた脚をヴェントに叩き落とした。

「オラアアア！！！！」

ズドオオン！！と激しい音がヴェントの持つハンマーと浜面の蹴りの衝突の
凄まじさを物語った。

「効くわねえー」

「嘘…つけっ！！」

浜面は一気に脚を振りぬぎ、ヴェントはその勢いに耐えられず、地面に向かって吹き飛ばされた。ヴェントはかなり高い所にいたが地面に落ちるまでは1秒も掛からずに地面に戻され、ヴェントの落と

されたところは、小さな隕石でも落ちたような衝撃に襲われた。

「ヴェント様!!」

近くにいた一般兵が、駆け寄ったが

「ごちゃごちゃ騒ぐな…」

ヴェントは何事もなかったかのように立ちあがった。

~~~~~

ヴェントを叩き落とした浜面は、今まだに空中から戦場を見渡していた。

そして、広がる戦場の奥にある処刑台に目をやり、助けるべき仲間の存在を見た後

その隣にいる、この戦争の間接的原因である土御門の姿を発見した。

（あの野郎!!）

浜面は、再び手に札を持ち構える

「四神：「朱雀」!!」

今度は先ほどと違い浜面の手に炎の塊が現れ、それを棒の様に伸ばして、一本の炎の槍を作った。

「くたばりやがれえええ!!!」

凄い勢いで炎の槍は飛ばされ一気に戦場の真上を突き抜け、土御門へと向かった。

しかし、あと少しで当たるといったところで、突如現れた水の塊が現れ炎を水蒸気と共にかき消した。

水蒸気はすぐに晴れて、その水のバリアを張った人物の姿を露わにさせた。その人物は青系の長袖シャツを中心にゴルフウェアを連想させるスポーティな格好の茶髪白人であった。その人物を知る浜面は空中でポツリと呟いた。

「アックアさん…」

~~~~~

自分を攻撃してきた浜面を見つめながら、自分を庇ったアックアに向かつてか、喋り出した。

「浜面：あいつはこちら側に就いてくれるかと思っただが…やはり滝壺をこちらでおさえて置けば良かったか」

「人質を取る趣味はないであるが…」

「ふんっ…入り込む為とはいえ、あいつに陰陽道教えたのは間違いだったな」

「面倒な敵を作ったものであるな…」

「お前に言われたくない……弟子と戦えるか？」

「師弟と言えるほどの間柄ではない…」

「あいつに魔術の基礎を教えたのはお前だろ？…なにせよ知り合

いだろ?」

「だとしても手を抜いてやるのは…あいつと私の『傭兵の流儀』に反するな…」

~~~~~

空中にいた浜面はそのまま氷で動きを止められてる船の前に下りた。そして、船で指揮をとる当麻に向かって、声が届くように叫んだ。

「当麻!! 『神の右席』が出てきたぞ!!」

「ああ見えてた!!」

「とにかく俺はそのまま出るぞ!!」

浜面がそのまま戦場に向かって駆け出したのを見ていた当麻は、ゾクツと左の方から感じる殺気を感じ取った。だが、それは明らかに当麻ではなく目の前の浜面に対するものであること気付き、叫んだ。

「浜面っ!! 左だ!!」

「っ!?!」

言われた通り左を見た浜面は、当麻の感じた殺気のもとを目の当たりにした。

殺気の源は女であったが、その女はただの女ではなかった。

女は右目がなく、その眼窩からは溶接のような青白い光が迸り、千切れた左手の断面からは眩い閃光のアームが飛び出していた。

浜面は思わずその女の名前を叫んだ。

「麦野!!」

「はあああああづううらあああ！！！！」

完璧不意を突かれた浜面は何もすることが出来ず、

ただその女の出した光の塊が迫ってくるのを見ているしかなかった。  
その光の塊が浜面に当たりそうになったが、そこに一人の若い女が  
割って入りこんだ。

そして、その光を片手で薙ぎ払い、軌道を空へと変えた。

「超能力者のくせに無能力者もまともに口説けないの？…まあこいつには無駄だと思うけど」

「レエエルガァン！！！！」

## 2 番隊長長（後書き）

マルコのなポジションで…いい人がいなかったの  
で浜面をなんかかつこ良くしてみた。  
かつこ良すぎるよ…浜面

それと麦野…めんどい

### 3位と4位

「常盤台のレベル5」「超電磁砲」「学園都市第3位」などの異名を持つ女の登場に再び戦場は騒がしくなった。本来なら『学園都市』側について戦うべき彼女が敵になっている、この状況に兵士達はただ驚かされる。

『上条勢力：3番隊隊長「御坂美琴」』彼女の存在は浜面仕上以上の衝撃を与えた。

「『3番隊隊長』御坂美琴!!!」

「学園都市第3位!!!」<sup>レベルガン</sup>超電磁砲』の御坂美琴か!？」

「今回の招集に応じなかったこの為か…」

当の本人はそんなヤジも無視して、浜面に背を向けて喋りかける。

「油断しすぎよ…あんた」

「ワリーな助かった…」

浜面は素直に感謝を述べると、攻撃を弾かれた『原子崩し』麦野沈理の叫び声があたりに響く

「ぎやははははははっ!!!最高ねえ!!!むかつく屑どもを一度に二人も始末できるなんて!!!」

叫ぶ麦野を見ながら当麻は半ば呆れ気味に浜面に話しかける。

「なんだあの第一印象強烈女は?…浜面：お前の愛人か!？」

「なっ!?!ふざけんな!?!んな訳ねえーだろ!?!」

「うわー最悪…あんた滝壺一筋だと思ってたのに…」

御坂は浜面に汚いものでも見るかのような軽蔑な眼差しを向けた。

「ぎやはははは！！さあどっちから殺してほしい！？そっちのバカ面か！？それともその売女かああ！？」

麦野セリフに今度は浜面が御坂に軽蔑の眼差しを向けた。

「お前…売女だったのか？…上条一筋だと思ったのに…」

「なっ！？何言ってるのよ！？あいつが勝手に言ってるだけよ！！」

今にも喧嘩が始まりそうだったので、取り合えず当麻は止めることにした。

「無駄口叩いてないで、ほら二人とも！ご指名だ！どっちか相手してやれ！」

「…じゃ御坂様…頼む！」

「はあ！？なんでよ！？」

「頼むって…俺あいつ苦手なんだよ…」

「私だつてあんなの戦うのは御免よ！！」

「……あつ！ゲコ太！！」

「えっドコ！？」

御坂が余所見をしている隙に浜面は一気に駆け出した。

「あつ！きたなっ！」

「悪い！！後で300円やるから！！」

「安いわっ！！」

戦場に向かう浜面を見た麦野は無い腕に力をためて浜面に向かって放った。

「逃げてんじゃねえぞお！！はまづらあああ！！」

再び放った凄まじい光を放つ攻撃も、間に入った御坂の電撃によってかき消された。

「仕方ないから相手してやるわよっ！！」

「そうか…先に死にたいのはお前かあああ！！！！」



### 3位と4位（後書き）

御坂を3番隊隊長にしたのは、ただ3繋がりにしたかっただけです。  
強い純じやありません。

今度、各隊についての説明でもやろうと思います。

## 隊長紹介（前書き）

前から予告していた隊長紹介です  
これだけです

## 隊長紹介

『上条勢力』：リーダー：上条当麻

一番隊隊長『一方通行』：隊員とくになし

二番隊隊長『浜面仕上』：隊員は特にいないが、戦いが起こる時は  
絹旗やスキルアウトなど人脈が多い

三番隊隊長『御坂美琴』：隊員としては主に「妹達」などいて、  
全十番隊の中で一番の数を誇る

四番隊隊長『土御門元春』（元）

五番隊隊長『神裂火織』：天草式を主体とした部隊

六番隊隊長『ステイル』マグヌス』：隊員は特にいないがイギ  
リス（王室・清教）や

『明け色の陽射し』との  
結びつきが最もある

七番隊隊長『アニエーゼ』サンクティス』：アニエーゼ部隊を主体  
とした部隊

八番隊隊長『シェリー』クロムウェル』：主に事件の調べごとを  
する部隊

とインデックスがいるが  
隊員としてはオルソラ

為、

戦えるのはシェリーだけの

ている

シェリーが隊長となっ

九番隊隊長『風斬氷華』

十番隊隊長『オッレルス』：部隊は特になし、しいて言うならシル  
ビアくらい

特に強い順という訳でもなく、簡単に言々と勢力に入った順  
九は後で登場したときにのせます

## 隊長紹介（後書き）

またちよくちよく改良していきます

学園都市の『超能力者（レベル5）』（前書き）

これは、本編です…

## 学園都市の『超能力者（レベル5）』

3位と4位が激しい戦闘を開始したが、当麻は大した心配はせずに後ろで湾内への侵入を試みる仲間達の艦隊の様子を見ていた。

「…御坂妹」

「はい、なにか？」

呼ばれて近づいて来たのは「妹達」のなかで一番見慣れた？10032号「御坂妹」であつた

「後ろ艦隊と連絡を取りたい」

「待ってください」

そう言うのと御坂妹は暫く黙りこみ、何かを確認したかのように当麻に答えた。

「はい…いけます、この空間でも「ミサカネットワーク」は繋げることが出来ました」

「よし…なら、後ろの艦隊に状況を教えてほしいと言ってくれ」

~~~~~

「当麻様からの連絡です」

そう言ったのは先ほどと同じように「妹達」の別の個体であつた。

約一万ほどこいる「妹達」はこの戦場では大きく二つに分けられている。

一つは戦闘用であり、二つ目は「ミサカネットワーク」を使つての連絡役である。

「状況報告を求めています」

「…クソっ！！正直言つと湾内突破は難しい！！」

港からの砲撃を何とか弾きながら一人の男が言った。

「こつちにも手を貸してくれっ！！能力者達が多すぎる！！」

「了解！！」

たった一つの報告をただけで男は声のする方へと向かった。

~~~~~

「湾内への侵入は難しいそうです…」

「ちっ！もうチヨイ数が欲しいところなんだが…」

湾内の状況を見て素直な感想を述べる当麻の顔も見ずに御坂妹は語りかける。

「あなたがその気になればすべて破壊できるでしょう…」

「さすがにこれだけいるとな…使いたくないな…」

「…強力すぎるのも考えものですね」

「……まったくだ…俺にはすぎた力だ………なんにせよ湾内への助太



刀は無理かな」

二人のそのような会話をしていると

「私が突破口を開く！！！」

一人に隊長が声と共に戦場に降り立った

~~~~~

突然、氷で固められた湾内に石や土、岩で出来た何やら人の形をした人形が現れた

「なんだあれはっ！？」

「ゴーレムだ！！」

「しかしあのでかさは！！」

彼らが驚くのも無理はない、目の前に現れてゴーレムと呼ばれる魔術人形は普通の彼が知る物とはまるで違う物と言うよりは彼らが知る大きさとはまるで違う物であった。

「肩に乗ってる奴を見ろオオ！！」

「8番隊隊長！！シエリー＝クロムウェルだあ！！」

~~~~~

10階だてのビルほどある大きさのゴーレム「エリス」に乗ってシエリーは戦場に赴く。

「おいっ！！シエリー！！無茶すんな！それを使うと！！……」  
「私に命令すんなっ！！」

シエリーは当麻の忠告を無視してゴーレムを操り凄まじい足音と共に戦場の最前線に出ると

「行けエエエ！！エリス！！」

エリスはシエリーの言葉に従うように巨大な腕を振るい一度に大量の魔術師を吹き飛ばした。それを見ながら当麻はため息をつき呟く  
「たくっ！無茶しやがって…アニエーゼ！！援護してやれ！！」

遠くで戦うアニエーゼは目の前の敵を倒すと、当麻を見ずに答える

「了解！！ルチアさんっ！隊を半分率いて援護を！！」  
「分かりました！！」

隣りで戦うルチアは命令に従ってシエリーの援護へと向かった。

「それとこっちも大砲で援護だ！！」  
「了解！！」

~~~~~

~~~~~

「消え失せるオオオオ!!」

エリスは次々に湾内の敵にその剛腕を振るい、吹き飛ばしていった。

「くそっ!! 引けエエ!! 態勢を立て直せ!!」

「動ける物は負傷者に手を貸せエエ!!」

エリスの攻撃に湾内の敵は弱腰に撤退をし始めた。

だが、そこに逃げない一人の超能力者が立っていた。

「うおおおお!!!! すごいっ!! どうすればこんな根性の塊みたいな物が出るんだ!?!」

目の前で暴れる岩の怪物を見ても超能力者は怯えるどころか、興味津津といった感じに見つめていた。

「こんな物まで出してくるとは、さすが上条勢力!! よしっならば俺の究極技をお見舞いしてやる!!」

そう言つて超能力者は右手を振りかぶった。

「喰らえっ! 俺の必殺技すごいパンチを超えた究極の技……  
超スーパーマイラクルすごいパンチ!!!!!!」

叫ぶと同時に振りかぶった右手を前に出した、次の瞬間、ドゴオオオンと言つ音と共にエリスの体がボディーブローを喰らったかのようになり前のめりになった。

その凄まじい威力を表すかのように、攻撃の衝撃が辺りに突風となつて遠くで戦っていたはずの天草式やアニーゼ部隊を襲った。完全に不意を突かれた彼らは吹き飛ばさる者もいる中、なんとか耐えきつた神裂は辺りを見渡す

「なっ何が!？」

辺りの敵味方が吹き飛ぶ状況に困惑していたが

「シェリー!!!!!!」

当麻の声につられシェリーの方を見ると、そこには何をどうすればこのようなダメージ受けるかと思うほどボロボロになっていた。そして、その肩同じくボロボロになったシェリーを見た神裂は思わず叫ぶ

「シェリー!!」

「やばいですよ「女教皇」…あれは強力な分シェリー自身にダメージがいつちまう…」

~~~~~

「うおお！我が究極奥義を喰らってまだ立っていられるとは…すごい根性だ!!」
よしっ もう一発!!」

もう一度攻撃態勢をとる超能力者を見た当麻はすぐに指示を出した。

「ステイル!!!」

「分かっている!!!」

苛立った様に飛び出したのは赤い髪に2メートルはあろう長身の男
ステイルであつた

ステイルは辺りが混乱する中を駆け抜けて攻撃をしようとする超能力者に両手から炎を出し

「燃え尽きる!!」

目の前の第7位の超能力者に投げつけた。

しかし、それは7位に当たることなく突如コントロールを失つたかのように標的からそれ、目の前の超能力者とは別の超能力者へと集まつて行つた。

「なにっ!？」

「まったく危ないな」

その超能力者は何事もなかったかのようにステイルの放つた炎を全身に身に纏うかのように体を包み込んでいた。

「油断しすぎですよ7位さん」

「何ものだい？」

「学園都市第6位『発火能力』の超能力者…ほむら・かげろう焰陽炎と言います」

「ふっ…すばらしい名前だね」

「でしょう?…まるでこの為だけに生まれたみたいだ」

ただそれだけの会話の後、二人の炎がぶつかった。

~~~~~

「シェリー！！今のうちに引けエエ！！」

当麻は必死に叫ぶが、シェリーはその指示に従うことはなかった。

「はあはあ…まだよ」

彼女の作ったゴーレム「エリス」は今までの物とは違い、大きさも数倍になり、その分パワーも上がるがそれには代償があったそれはゴーレムの受けた攻撃を自分自身も受けること…

「せめて…レベル5の一人くらい…」

シェリーは朦朧とする意識の中、港に立つ一人の男を見つけ、最後の力をエリスに注いだ。

「喰らえッエエエエ！！！」

「んっ？」

「エリス」は振り上げた腕を男に向かって叩きつけ、無残なまでに港を粉々に破壊したが

狙った男はその攻撃を嘲笑うかのように、優雅に宙に浮かんだ

「フッフッ…ハッハッハッハッハ！！！！！」

まるでバカにするかのような大声で笑い出した男の背中からは天使

の羽根の様な物が飛び出し、その羽根を雨の様にエリスに向かって降り注ぎ、その岩で出来た体を貫いていった。

超能力者は何事もなかったかのように羽根を使ってゆっくりと地面に着地し、再び笑い出す。

「ハッハッハッ！！おもしれエな！！」

そんな言葉も届かないシェリーは倒れるようにエリスの肩から落ち、ドサリッ！と地面に叩きつけられた、意識が朦朧とする中、羽根の攻撃を受け、ただの岩の塊へと戻ったエリスを焦点の合わない目で見つめながら手を伸ばした。

「……………エリス」

誰にも届かない声でシェリーはただ眩き意識を失った。

学園都市の『超能力者（レベル5）』（後書き）

場面切り替えが早いので分かりずらいところもあると思いますが  
どうか大目に見てください

シェリーがただのかませに…



黄泉川と一方通行（前書き）

俺の中での本編は最後の方

## 黄泉川と一方通行

「シェリー隊長!!」「チクショウ!!…レベル5の奴ら」

「シェリー…」

超能力者（レベル5）の攻撃を受け無残にやられた仲間の姿を見つめる当麻に心配する間も与えずに大砲の砲弾が飛んでくる。

「悲しんでいる暇ないぞ!!上条当麻!!」「撃ちまくれええ!!」

迫りくる砲弾を目の前にし、目の色を変えた当麻は右腕を無造作に横にバツ!と振ると目の前に飛んできていた砲弾がすべて消えてなくなった。

「やはりダメだ!!消えてしまう!!」

「奴は一体何をしたんだ!？」

敵の疑問に答える気のない当麻は、氷漬けになっている湾内で戦う仲間に伝えるように大声で叫ぶ。

「シェリーとエリスが命を懸けて作った突破口だ!!無駄にするな!前に進めエエ!!」

それぞれ悲しむ者や心配する者もいたが当麻の声に後押しされ、皆広場へと突き進む。

~~~~~

「休むなアア！！撃ち続けろオオオ！！」「隊長達を広場に入れるなアア！！」

シェリーによって崩された港の防壁めぐり、より一層戦いが激しくなった。

「早く！！私達も広場に！！」

『天草式』の女教皇神裂が仲間に指示を出していると、突如見慣れた同じ『天草式』の仲間数名が神裂に向かってそれぞれ武器を手に襲ってきた。急なことだったが神裂はそれに対応し、仲間を傷つけずに攻撃を上手く受け流した。

「ぐっ！？」

「何のつもりだっ！？お前ら！？」

建宮斎字は襲いかかった仲間を睨みつける

「すいません『女教皇』…でも…俺…あなたを殺さないと…」

「何を言ってるんだ！？」

「待ちなさい！建宮！！」

そう言つと神裂は持っていた二メートルを超える長さの日本刀「七天七刀」の柄と嶺を使って、襲ってきた仲間達に致命傷にならないように気絶させ、その奥に立つ女に向かって叫ぶ

「あなたの仕業ですね！？『心理掌握』！！！」
「あら…気に入りませんでした？5番隊長さん…」

神裂の睨む先にはこの戦争には似合わない、優雅な顔立ちに綺麗な黒髪を伸ばした女性が立っていた。

「『心理掌握』…の超能力者（レベル5）！？」

「あまり相手にしたくないですが…」

「あら…派手に行きましょうよ…なんと言っても戦争なんですから」

~~~~~

「もつと弾を持って来い！！砲撃を休めるな！！」「敵の砲台を狙えええ！！！」

「これ以上受けたら、港の防壁がもたないっ！！」

港の砲台が騒がしくなる中、それを処刑台から見ていたアックアと土御門が呟く

「やはり、あの程度ではもたないであるな…」

「ちゃんと…手は打つ……テッラ！！」

処刑台の下椅子にいまだ座る最後の『神の右席』の呼ぶと

「はいはい…分かりましたよ」

と、めんどくさそうにテッラは椅子から立ち上がり、戦場を見つめる。

「はあ…ここまで広いとしんどいな…まっやるだけやってみますよ…  
『優先する…砲弾を下位に、防壁を上位に』」

テッラそう言うのと砲撃を受けると崩れたり、ボロボロになって行くはずの防壁が突如まるでバリアを張ったかのように砲弾を弾き返し始めた。

「ほう…これほど広範囲に力を及ぼせるとは…これは前のテッラを超えているかもしれんな」

「急きよ見つけた新人だったが…こいつは当たりクジだぜい」

「さて…そろそろ私も出るか…」

「手を抜くなよ」

「誰に言っている？」

それだけ述べるとアックアは処刑台から飛び降りた。

土御門は腕に付けていた時計ほどの大きさしかない機械に話しかける。

「さて…『オイ！聞こえるか！？…作戦に移るぞ！！』」

~~~~~

「当麻様！！砲弾が！！」

「分かってる！テッラの『光の処刑』だ…」

「っ！？魔術攻撃に切り替えますか？」

「いや…両方だ…両方混ぜていけ！あれは対象を一つにしか絞れない！！」

「了解!!」

かつて実際に『光の処刑』を目の前で見た当麻は一番確実な攻撃を
近くの黒い修道服を着たシスター達に伝えた。

「何を企んでる？土御門…お前がこの程度で終わる訳がないだろう
？」

処刑台に立つ男を見つめ、当麻はポツリと呟く

~~~~~

「すごいパンチ!!」

「グッアア!!!!」

第七位の攻撃を受けとめようとして吹き飛ばされたのは、赤毛がト  
レードマークのシスターアニエーゼ

「アニエーゼ隊長!!」

「っ!!…大丈夫です」

「ふむ…女の子戦う気はあまりなかったが…平和の為には仕方ない  
!!」

「まったく…こんなふざけた奴の上にこんなデタラメな力なんて…」

「よしっもう一発っ!!」

「っ!!?来ますよ!!」

「「「「はい!!」」」」

ドゴォォン！と凄まじい音が第七位のデタラメな力を物語る。

~~~~~

アニエーゼ達から少し離れたところでは

「ウワァア！！」「熱つつつ！！」「近づくな！！レベル5が暴れてるぞ！！！」

湾内の氷を溶かすほどの炎がぶつかっていた。

「はあゝもう止めません？」

「なに？」

「だって俺の炎じゃあなたには届かないし…あんたの炎は俺には効かない、やるだけ無駄だと思っけど…」

「随分と余裕じゃないか？」

「だってこのまま続けるとさゝ」

レベル5の『パイロキネシス発火能力』が自分の立っている所を勢いよく踏んでみると

バリッ！と巨大なゴーレムが乗ってもビクともしなかった氷に簡単に穴が開いた。

「足場が無くなっちゃうよ」と言うよりもうほとんどないけど」

そこで初めてステイルは辺りを見渡してみた。見渡してみると辺り

の氷はほとんど融けて水に戻り
ステイル達がいる所が、まるで孤島のように融けた氷のなかにポツ
リと浮かんでいた。

「悪いけど…こんな力だから水が苦手だね、じゃ！」

そう言っただけでレベル5は勢いよく飛んでどこかに行ってしまった。

~~~~~  
~~~~~

先ほどアックアが飛び降りて行くと入れ替わるようにある人物が処
刑台を訪れていた。

その人物を知る一方通行は、その人物の名を呟く。
アクセラレータ

「黄泉川…」

それにつられ土御門もその人物に気付いた。

「何をしにきたぜよ黄泉川先生…作戦に異論でも？」

「いや…こいつが選んだ道じゃん…同情の余地はないじゃん…」

「なら…」

「うるさい！！ここにいくらいいいじゃん！！…悪党に同情はな
いが…」

黄泉川は一方通行から少し離れた所にドサツと座り込み、腕を組み
ながら語る。

「生徒は…いや、家族は違うじゃん…！！わたしは…どうすりゃ…いいじゃん？」

一方通行は黄泉川の顔を見ないようにしていたが、黄泉川の震える声を聞いて顔を覗くと、そこには彼が初めて見たポロポロと涙を流す黄泉川の顔があつた。

「一方通行！あんたは…なんでそんな生き方しかできないじゃん！」

初めて見る涙を流す黄泉川の顔を見て、かつて黄泉川に言われたことを一方通行は鮮明に思い出した

『どんなに無様だろうが、一円でも一銭でも払い続けるしかないじゃんよ。その積み重ねは必ず君の道を開く』

あの日言われた言葉をその日暗部に落ちることになった運命の日に自分を導こうとしてくれた「先生」としての姿の黄泉川を一方通行は思い出していた。

「黄泉川…」

「…今更妙なことをすればお前でも容赦しないぜよ…黄泉川」

「フンっ…あつたらとづくにやってるじゃん！！」

「土御門様！！報告が！！」

彼らの会話を遮るように人の男がやってきた。

黄泉川と一方通行（後書き）

o n e p i e c c e 本編でも思ったことですが…
俺の中ではおじいちゃんが一番好きで可哀そうでした。
黄泉川にその役を押し付けましたが、
そしたら黄泉川が凄くかわいそうになっちゃった…

兄妹（前書き）

えゝいろんな掲示板では一方通行をやれロリコンだ
アクセロリータだの言ってますが
私は違うと思います。

そんな気持ちを込め19話行きます。（打ち止め登場）

兄妹

「当麻様…今敵の無線を傍受しました」

当麻に近づいて告げたのは「妹達」のミサカ10032号であった

「そうか…内容は？」

「ノイズが酷くてハッキリとは…しかし処刑がどうか…」

「…やっぱり何か企んでるな、部隊を一気に上げて攻めるぞ…！」
「りょうか…っ!？」

当然御坂妹が右手で頭を押さえて、驚き出した。

「!?!とうしたっ!?!」

「そんな…どうして?」

「なんだっ!?!何があった!?!」

「上です!?!」

~~~~~

「土御門様!?!」

「どうした!?!」

「謎の飛行物体がすごいスピードで近づいてきます!?!」

「飛行物体!?!どこの物だ!?!」

「分かりません!?!ただ信じられない速度です!?!」

~~~~~

土御門が報告を受けたの数秒後、遠くの空からビュゴオオオ!!と風を見る音が響き

戦場で戦う者達が見上げる中、凄まじいスピードで戦場の真上を通り抜けた。

その通り抜ける時間もほんの2、3秒しかなかったが、その皆の眼は謎の飛行物体よりもそれから放り出されたように出た無数の黒いものに向けられた。

「なんだっ!?!」「なにか来るぞ!?!」

戦場でも注目が空に向く中、空からからは

「だからパラシュート付けるまで待つてって言ったのに!?!」

「だめよ、あんなので下りたら狙い撃ちにされちゃうでしょ?」

「なんであなたはそんなに冷静なの!?!」ってミサカはミサカは絶叫しながら尋ねてみるううう!?!?!?!」

「ギャーギャー騒ぐな!?!」

「私達の翼で何とか!?!」

「いや無理無理!?!重すぎる!?!」

などと女の声と男の叫び声らしきものが聞こえその集団は、勢いよく氷の張った湾内に飛び込んだかと思うとバチャッアン!と戦いの中で溶かされた水の中に沈んだ。

「一体何が?」「何が落ちてきたんだ!?!」

なぞの物体の落ちた穴に注目が集まっていたが、その穴からは

「うわっ！何！？水！？」

「ここだけ水になってる！！」

「だぁぁ！！助かった！！！」

「ほらっさっさと上がんなさい」

「」「」「なんでもう上がってんの！？」「」「」

水に落ちた若い女達はなにやらギャーギャー騒ぎながら水から上がり、一緒に落ちてきた男達は最低限の会話だけで黙々と氷の上上がった。

戦場が突然の事態に啞然しているなか、一方通行はそのおかしい集団のなかに一人のよく知る少女を見つけ、考えるよりも先に口が動いて叫んだ。

「打ち止め（ラストオーダー）！！！！」

彼の言葉に処刑台の方を振り向いたその少女は一步通行を見つけパツと笑顔になり手を振り出した。

「わぁ！！やっと会えたぁ！！ってミサカはミサカは手を振って喜んでみる！！」

~~~~~

「なんだ！？あいつらは！？」「援軍か！？」

「いや違う新手だつ!!」

「あいつはアリアナ・トムソンだ!!」「あの『追跡封じ』の異名を持つ!!」

「あの鎧の連中は…イギリス清教の『騎士派』の物か!？」

「あの女達は王室派直属の『新たなる光』の奴らだ!」

落ちてきた者達は手を振っている打ち止めの周りにゾロゾロと集り武器を構えた。

「さてと…お姉さんの仕事はここまでと」

オリアナは武器も構えずのんびりと呟いたが、それとは対称に『新たなる光』は自分達の最もよく使用する武器『鋼の手袋』の準備をしながら話した。

「さすが頂上決戦…」

「総力戦ね」

「ハンパないですね…」

「怖いなら逃げていいわよ? レッサー」

~~~~~

落ちてきた敵を確認した土御門は黄泉川に向かって語りかける

「たくつ…またお前の家族だぞ! 黄泉川!」

当の本人は先ほどの悲しみも忘れただ呆然と叫ぶ

「打ち止め！！なんで！？」

そんな疑問にも土御門は答えず、今度は広場に向かって叫んだ。

「なにをボサツとしている！！戦闘中だぞ！！」

土御門の叱咤に静まり返っていた戦場が再び大砲と戦士達の叫び声に包まれた。

~~~~~

「うわっ！！なんか騒がしくなっただってミサカはミサカは…」

「ああもうそれいいから！！」

「ほらっ動いて！！」

慌てる打ち止めを引きずりながら進む『新たな光』に

「じゃ、ここから私は好きにやるからあなた達も頑張りなさい」

オリアナはウィンク一つ決め艶やかな笑顔をしていたがそこに

「こら！！打ち止め！！なんであんたがここに居んのよ！！」

「わぁーお姉さまだ！！ってミサカはミサカ…」

「だからそれやめろ！！」



何時もの口癖も決められないまま、打ち止めはお姉さまこと御坂美琴に腕を掴まれ

「ほら！！当麻のそこ行くわよ！！」

「ええ！？ちよつと待って…」

なんの抵抗も出来ないままビュン！とすごい勢いで飛んでいく御坂に連れてかれてしまった。残された『新たな光』は

「あーあ…行っちゃた」

「どうするの？ベイロープ？」

「女王陛下の言われた通り…戦うだけよ」

「で…オリアナさんはどうするんですか？」

「んっ別に…言っただでしょ？好きにさせてもらっつて」

オリアナは最初は彼女達の顔見て話していたが、不意に御坂の飛んで行った方を見ながら

「まっ…でも好き勝手やる前に…当麻の坊やに挨拶しとこうかしら」

オリアナは今まで以上より艶やかな笑顔を決めながら語る。

~~~~~

「やれやれ…」

自分の前に連れてこられた打ち止め（ラストオーダー）を見つめながら頭を抱える当麻、

そんな当麻をからかうかのようにテヘツと笑顔を浮かべる打ち止め（ラストオーダー）は反省の色はないらしい。

「なんで来ちまったんだよ？…打ち止め（ラストオーダー）」

「理由なんて分かっているくせについてミサカはミサカは笑顔で話しかけてみる！」

「…お前を連れてこなかった俺の気持ちも考えてくれ…お前に死なれたな一方通行に顔向けできねエだろ」

「ふーんっだ！そんなありきたりなセリフで帰るほど私の決心は弱くないもんってミサカはミサカは胸を張ってみる！！」

「…はあ…死んでも知らねえからな」

「ベーツだミサカは簡単に死なないもんってミサカはミサカは断言してこの場から離れてみたり！！」

その短い会話だけして打ち止めは当麻のいる船の先頭から飛び降りて戦場へと行ってしまった。

「ちょっと！いいの！？ほつといて！？」

「来ちまったもんは仕方ねえだろ…」

慌てる御坂に若干諦め気味に語る当麻を見て御坂はそれ以上何も言わなかった。

「まったく…とんだお転婆ねっ！」

「ああ…昔のお前そっくりだ…」

「なっ！？私あんなじゃなかったわよ！！」

「そうだな…素直な分、まだ可愛げがある」

「どついう意味よっ！？」

御坂が敵意むき出しにしていると、打ち止め（ラストオーダー）と入れ替わるように一人の女が船の先頭へとやってきた。

「随分女扱いがうまくなったじゃない…当麻ちゃん」

「オリアナ…どういうつもりだ？お前」

「別に…ただエリザード女王陛下から依頼があったから、私はそれを果たしただけ」

「女王陛下から？」

「ええ騎士派の連中を数十名と『新たなる光』をここに運ぶようにって言われたわけ」

「まったく…これからどうすんだ？」

「さあねッ！私の仕事はここまで…なんなら雇ってみる？」

ふざけた感じに喋っているが彼女の言う通り、彼女は依頼を果たすだけで特別誰かに取り入ることはしない。依頼とそれに見合った代金を払えばただそれでいいのだ。

~~~~~

砲弾や魔術が飛び交う中、打ち止め（ラストオーダー）は突き進むたった一人助けたい人の為に

「油断するなああ！！」「情報では奴はレベル4だ！！」

「子供と言っても容赦するな！！」

戦場でさまざま兵士の敵意が向けられるが打ち止め（ラストオーダー）は止まらずにその身から電気を出し、向かってくる敵にぶつけた。

普通の敵ならばこれで十分倒すもしくは戦意を削ぐくらいのことは出来るが、流石わ世界から集められた超精鋭達、当たった電撃で気絶する者はいても

それだけで打ち止め（ラストオーダー）を恐れる者はいなかった。

「落ち着いて取り囲めエエ！！」

「倒せん敵ではない！！」

幾多もの攻撃を何とか交わして、打ち止め（ラストオーダー）は我武者羅に前に進む

~~~~~

必死に広場に近づいてくる打ち止めを処刑台で見つめる一方通行はただ唇を噛み締めていた。いつもは守る側にいる自分が、今回は助けられる側へと変わってしまった自分の力の無さを感じながら一方通行は叫ぶ。

「っ！来るな！！ラストオーダー打ち止め！！！！」

一方通行の声が届いたのか打ち止め（ラストオーダー）はチラッと一方通行の方を見たが

すぐに目の前に襲いかかる敵へと視線を変えた。

打ち止め（ラストオーダー）に声が届いたことが分かった一方通行

は続けて叫ぶ

「分かってるだろっ！！コレは俺が仕出かしたヘマだっ！！お前に立ち入られる筋合いはねエ！！
おめエみたいな弱虫に助けに来るなんて俺が許すと思うかアア！！
こんな屈辱はねエ！！！帰れエ！！打ち止め（ラストオーダー）な
ぜ来たアア！！！！？」

一方通行は必死に叫んだ、今の彼にとって説得して彼女の安全な場所に行かせるぐらいしか出来ることがなかった。

（頼む打ち止め（ラストオーダー）…お前まで道連れにならないでくれ……！！）

コレは俺の失態なんだ……！！！！）

もはや一方通行は打ち止めを見ていなかった、ただ自分の失態を悔いて下を向くしか出来なかった。

だがそんな一方通行の思いを無視するかの様に打ち止め（ラストオーダー）も同じく叫ぶ。

「私は絶対に帰らないっ！！だって…だって私は妹だからああ！！！！」

「っ！？」

「家族を助けるのに理由なんていらないっ！！！！ってミサカはミサカは当たり前前のことを叫んでみる……！！」

「っこの…バカがあ……！！」

一方通行の願いをかき消すかのように突如人間の4、5倍はあろうゴーレムが港から勢いよく打ち止めに突進してきた。

目の前に迫るゴーレムを見ても打ち止め（ラストオーダー）は臆す

ることなく、ポケットからコインの様な物を取り出してそれを両手で包み、手に電撃を溜めて

「ハアアアアア！！！」

聞いたことのないような叫び声を上げながら、そのコインを学園都市第3位の「御坂美琴」が放つ『超電磁砲』のように撃ちこみゴーレムを粉々にした。

「いつ今のは！？」「電撃か！？」

「いや！威力はまだ本家に及ばないが…今のはレールガンだつ！！」

兵士達の声やゴーレムが崩れる騒がしいなか、先ほどの叫び声よりも大きく打ち止め（ラストオーダー）は叫ぶ

「あなたがなんと言おうとも私は絶対に帰らない！！死んでも絶対に助けてみせるっ！！！！！！」

~~~~~

打ち止め（ラストオーダー）の決心はその湾内全体を包み込み、他の仲間達もその声につられるかのように戦場を突き進む。

改めて打ち止め（ラストオーダー）の本心を知った当麻はうすら笑いを浮かべながら目の前の女性に依頼をすることにした

「オリアナ、追加注文だ！…あのお転婆を死なせないでやってくれ」  
「了」解「」

答えるオリアナも当麻と同じく今までの艶やかなものとは明らかに  
違う笑顔を浮かべて答えた。

## 兄妹（後書き）

こんな感じに私は一方通行と打ち止めは兄妹的な関係だと思っています  
というよりは思いたいです。

きっと一方通行もただ手のかかってお転婆な妹的存在が可愛いくて  
仕方無だけ……

ってあれっこれシスコンじゃね？

それとミサカはミサカはってめんどいから、多分次回から使いませ  
ん



## 打ち止めVS神の右席（前書き）

アクセス解析を見るとかなりの人が見ていることが分かり  
それがこれを書く原動力なってます。

今回もそれを励みに書きました。  
では第20話いきます

## 打ち止めVS神の右席

「一方通行の処刑時刻が早まる!？」

「ええ、たまたま盗聴しただけだから詳しくは分からなかったけど…何かの準備が出来たって」

「そうか…分かった」

「じゃあ、私も行くわね」

オリアナは伝える事を伝えると船の先頭から下りて依頼を果たしに戦場へと消えた。

「もともと敵だ…処刑時間を守る必要はないしな、だがなんの準備が出来たんだ？」

当麻は処刑台に立つ、司令官である土御門を睨みながら呟く

「すっかり敵に作戦を聞かれるなんてヘマ…お前がする訳ないよな?…土御門」

~~~~~

次々を襲いかかる敵を何とか退け打ち止めは処刑台を目指した。

一度に複数で攻撃をかけられることもあったが、先ほどのゴーレムの破壊が

戦場に広がる上条勢力達に味方と認識させた。

その為、一人では倒せない敵も突然、隣りから援護されるなどど

うにか倒すことが出来た。が、そんな中

「ここはガキの来る所じゃないわよ」

少し離れた所から黄色い服に鉄線ハンマーを持ち舌に長いチェーンをつけた女の声が

戦場の響く誰の声よりもハッキリと打ち止めの耳に届き叫んでもいないのに聞こえるその声が
その女の恐ろしさを物語った。

「『神の右席』のヴェントだ!!」

打ち止めがその女正体を誰かの声で知ったところには、すでにヴェントは鉄線ハンマーを振り回し攻撃をしかけようとしていた。

狙いは目の前にいる打ち止めであったが、打ち止めは何も出来ず驚いていた。

そこに突如打ち止めの前に一人の女が現れ、手に持った単語帳の様な物から紙を無造作に破ると

氷の槍が形作りヴェントに向かって飛んでいき、ヴェントのハンマーの軌道をずらした。

逸れた攻撃は打ち止めから離れた所の氷の地面にあたり、その攻撃の恐ろしさが分かるように抉った跡が残った。

「オリアナ!!」

「新しいご主人からの依頼よ!ほら早く行きなさい!」

「ありがとうっ!!」

打ち止めはヴェントから少し離れたところを通って遠回りしたが、実際にはその必要はなかった。

なぜなら、ヴェントの標的はすでに目の前の「運び屋」へと変わっ

ていたからである。

「『追跡封じ』のオリアナ……」

「『神の右席』ヴェント……こりやいつもの代金の10倍は貰わないとね……」

「あら……その程度でいいの？」

「ええ……なんだったら9倍でもいいわよ」

~~~~~  
~~~~~

助けてくれたオリアナを気にしながらも打ち止めは走り続けた。

しかし、そんな気遣いもさせる間も与えずに打ち止めはその身に感じる殺気に思わず前を見つめた。

そこには全長5mを超す巨大な金属棍棒^{メイス}を片手に持つ茶髪白人が立っていた。

「アックア様!!」

「貴様らは下がっている」

傍らにいた一人の兵士が男の名を呼んだ

「アックア……『神の右席』!!」

打ち止めが近づくにつれ、その殺気は打ち止めを刺すように襲いかかった。

その殺気元である男自身もメイスを構えた

「さあ神々よ…あの若き命の運命…ここまでであるか…あるいは、この我がメイスからどう逃す……………！！！！！」

打ち止めは一度もその男に会ったことはなかったがその名知っていた。

昔、一度当麻が昔話をした時にその名が出ていた。だが今一番初めに思い出した事は

その時に当麻が言った「もう2度とあいつとは戦いたくない」と語ったことだった。

（そんな強い人と戦ってる場合じゃない！）

心の中でそう誓った打ち止めは必死に目の前の男を振り切ることを考えていた。

だが、一体敵がどのような能力を持っているか知らずに迂闊に背を向ける訳にはいかない。

今になって当麻からこの男の事をもっと聞いておけばよかったと後悔していたが、

相手の能力が分からないのはお互い様であり、打ち止め自信隠している「ある奥の手」があった。

「いきなり使うことになると思わなかったけど…ハアア！」

何の躊躇もなく打ち止めは奥の手を使った。

打ち止めの掛け声と共に打ち止めの姿は影も形もなくなった。

「消えた！！」「何処へ行った！！！」

兵士達が慌てて渡りを見渡していると

アックアが一瞬にして消え去り、打ち止めが消えた所から数十メートル離れたパツと現れたかと思うと、

その持っていたメイスを乱暴に振った、すると、消えたはずの打ち止めがドバツ！と吹き飛ばされた様に現れた。

「ガアアアア！！」

インサイドエレクトロ
「……『体内電気』か」

「っ！？」

「自分の体内の電気信号を能力で強化し、身体能力を急激に上昇させる技……」

打ち止めは膝をつき、呼吸を整える時間を稼ごうと相手を睨みつけながら話しかける

「しっ…知ってたの？」

「単純な能力の情報なら知らされているのであるからな…だが」

アックアが話を続ける中、チャンスと言わんばかりに打ち止めは先ほどと同じ様に一瞬で消え去ったが、

「思ったより速いであるな」

「なっ！？」

打ち止めの力をあざけ笑うかのように、打ち止めの前に現れその暴力的なまでの強大な力を振るった。

ドガアアアン！とアックアのメイスが氷の地面を抉り、間一髪避けた打ち止めはその余波で吹き飛ばされた。

「はあ…はあ…」

「どうした？もう終わりか？」

「くう！」

「来ないならコチラから行くぞ！！」

アックアの攻撃は実に単純でただメイスを敵目掛けたただ振るうだけだが、その攻撃ですら今の打ち止めにとつては一撃かわすだけでも全力で避けなければならぬ。しかし、それだけであつた、打ち止めはただ避けるだけでまったく反撃できず
必死にメイスの軌道を読むことしかできなかった。

「どうしたっ！？その程度か！？」

先ほどまで冷静であつたアックアが突如叫びだした。まるで打ち止めを挑発するかのように

「それでは処刑台は遠のく一方だぞ！！」

そんなアックアの言葉もともに聞けずに避けるのに必死になつて
いると

その無防備になつた足が氷によつて足を滑らせてしまった。

バランスを崩した打ち止めにアックアはその巨大なメイスを振り上げそれを何の迷いもなく振り下ろした

「オッレルス！フォローしてやれ！！！」

遠くから当麻の声が響いたかと思うと、

「了解！」

一人の男が打ち止めの前に現れ、2本の剣を交差させドゴオオオン！！とアックアの恐ろしい一撃を受けとめた。

「っ！？誰？」

「俺に任せて早く行きな!!」
「あっありがとう!!」

打ち止めは御礼だけを述べてその場から全力で離脱した。
突如現れた男と睨みあいになったアックアはゆっくりとのべる。

「10番隊長…オッレルス」
「はじめまして…アックア、俺をご存知で？」
「知らん方がおかしいであろう………」

~~~~~

「打ち止めは大丈夫のようですね」

後ろにいる御坂妹がそう呟き

「ああ…一先ずは大丈夫だろ…それよりも後ろ様子は？」  
「大丈夫です間もなく突破します」  
「そうか…ならあいつらに伝えてくれ」  
「何をですか？」

~~~~~

「ドンドン攻め込めエエ!!」

「敵は引き始めたぞオオ!!」

能力者で固められた港は、攻め込む上条勢力に劣勢にしいられていた。

「イカンツ！引くぞ湾内ラインを固めろオオ!!」

「一先ず引くぞオオ!!!!」

~~~~~

「土御門様!!このままでは、大きく攻め込まれます!!」

一人の兵士が土御門に元に報告してきたが、報告を受けた土御門は対して慌てた様子を見せず

「問題ない…よし！作戦に移るぞ!!隊長達に報告しろ!!」

「ハッ!!」

~~~~~

湾内の外で攻め込む勢力では一番の数を誇る『殲滅白書』のリーダー「ワシリーサ」を始め、『妹達』から各部隊の隊長達は当麻の伝言を受け取っていた。

「はいはい！当麻ちゃんはなんてっ！？」

「みなさんにお問い合わせがあるとのことですよ」

「……………か……………せめ……………との……………ことです」

「…了解した、では私達は右側から」

そう答えたのは陰陽師達がいる船を指揮する「闇咲逢魔」であった。

「じゃあ私達は左を」

「我々も左から」

「じゃあ私達は右に行くわ」

ワシリーサ、テルノア、ラクーシャ、ハリーシャ達もそれぞれ当麻の指示を聞きそれぞれの進路を決めた。

打ち止めVS神の右席（後書き）

一間ずここまでです。

オッレスルの口癖がよく分からず少し戸惑いました。

鷹の目のあのセリフは凄く気に入っていたのでアックアにその役を与えました。

ドラゴン（前書き）

オリジナル設定が入ってくるので
嫌いな方は見ないでください

では21話行きます。

ドラゴン

「土御門様！！後方の艦隊に動きが！！」

後ろからの報告に前を向きながらも耳を傾け、大して慌てた様子もなく土御門は答える。

「ああ…左右に分かれたな」

「この手際の良さ、勘付いたじゃん…上条」

その隣にいる黄泉川も先ほどと変わらず処刑台に座り、指示を出す当麻を睨む。

「おい！湾内の兵士達に撤退を命じろ！！それと広場には敵を上げるなよ！！」

~~~~~

後方の艦隊が当麻からの何らかの指示を受け、動き始める中、突如、敵が撤退を始め広場へと戻って行ったが、簡単に広場に上げてくれるわけでもなく

撤退しながらではあるがその攻撃は決して休むものではなかった。様々な人たちから助けてもらい進んできた打ち止めであったが、そう何度も助けてもらえる訳ではない。今、打ち止めは自分の力だけで処刑台を目指していた。

先ほどとは違って撤退をしている敵を追い抜くことは簡単で隙を見

つけ一気に広場に行こうとしたが

「はいはい…そこまで」

緑色の修道服を着た男が、打ち止めの前に現れ持っていたギロチンの様な物で打ち止めに斬りかかった。

見た目は鋭い刃物であったが斬られた打ち止め自身は何やら固い物で殴られた様な感触だけを受け

そのまま10メートルほど吹き飛ばし湾内へと逆戻りさせた。

完璧に不意をつかれ、氷に叩きつけられること覚悟していた打ち止めであったが

その吹き飛ばされた身をドスンッ！と打ち止めと氷の間に入ったオリアナが受けとめた。

「っ！オリアナ！どうして!？」

「敵が撤退する同時にヴェントの奴もいなくなっちゃたのよ…それより」

「うん、あいつは？」

二人は数十メートルほど離れたところにいる一人の男と見つめた。

「ヴェント、アックアに並ぶ『神の右席』…『左方のテッラ』よ」

「また『神の右席』…」

「手強いけど、急ぎましょう！あいつら処刑時間も無視して始めるつもりよ」

「なっ！？そんな!」

「もともと処刑時間を守る義務なんて向こうにはないからね…」

「お話は終わりましたか？お二方…」

離れた所に立つ男は面倒くさそうに尋ね、

「まったく、女、子供とは戦いたくないんだけどね、変に殺すと前のテッラ見たいに殺されそうで…」

言っていること真逆の行動を取るようにテッラはギロチンを構えたが

「じゃあ、男ならいいのか？」

テッラが答える前に男はテッラの横から蹴りかかり、テッラは持っていたギロチンでその蹴りを受けとめてその蹴りを払うと、男から離れるように間合いを取った。

「はまづら!!」

打ち止めは当麻、美琴と同じ知り合いである『2番隊隊長』の名前を叫んだ

「どうした！？もう体力切れかつ！？打ち止め!!」

浜面に続くように神裂やステイルその他隊長達も次々と打ち止めの横を通り過ぎて、広場を目指した。

「隊長達ね！？これは百人力だわっ！」

ほほ笑むオリアナに支えられ、打ち止めは立ちあがった。

浜面は振り向かず、他の隊長達と共に走り出す。

「『神の右席』一人に止められてんじゃねえ！！一緒に来い！兵達が退いてる今がチャンスだ!!」

「はあはあ…分かった!!」

近くまで迫る隊長達を前にギロチンを振り回しながらテッラは笑う。

「コレは手強いねえー」

~~~~~

他の隊長達と離れた所で「魔神になりそこねた男」と「聖人」の戦いが続いていた。

オッレルスは手に持つ二本の剣でアックアの振るうメイスの攻撃を何度も受け止めていた。

「当麻言った通り、異常な強さだね…『後方のアックア』」

「何の変哲もない剣で我がメイスを受けとめる貴殿も十分異常である」

オッレルスがアックアのメイスを振り払うと、オッレルスとアックアは互いに距離を取った。

「……………勝負は預けようか…オッレルス」

「その方が互いに利点がありそうだな」

~~~~~



「何としても持ちこたえろオオ!!」

「奴らを広場に上げるなアア!!」

広場近くの港まで迫った上条勢力を止めようと港での攻防が続く  
か、

「何を企んでる？土御門」

「当麻様」

「どうしたっ!？」

「後方の部隊のほとんどは湾内に侵入できました…」

「そうか……んっ？待て!」

当麻は一瞬考え込み

「どうして広場に入り込んだ!？」

「えっ!?!いえ…ただ後方の湾内は手薄でそのまま湾内を進み主力  
部隊と合流しよう」と

「手薄?」

「ええ、外側に配置された軍艦を潰した為に…」

「なら…全員湾内に?」

「いえ…すべてと言う訳ではないですが、ほとんどの部隊は」  
「……………誘い込んだのか……………やられたっ!!」

御坂妹がえっ!?!と呟く前に当麻は後方に向かって叫ぶ

「みんな湾内から出るオオ!!」

~~~~~  
~~~~~

「やはり気付いたか…だが遅い！包囲壁を作動しろ！！」

土御門の合図と共に砲台の並ぶ港が突如突き上がり湾内に面する港を綺麗に囲んだ

「なんだ！？」「囲まれた！！」

湾内に入り込んだ部隊が戸惑うなか、船の先頭で御坂妹と当麻は辺りを見渡しながら

「これが狙いだったんですか！？」

「違うつ！もつと悪い！！」

敵の作戦を察知した当麻は羽織っていたコートを乱暴に脱ぎ去り、右腕を前に差し出した。

「みんな！！俺の直線上に入るな！！」

その叫び聞いた浜面は当麻の構えを見て、当麻が何をしようとしているのか悟り

誰よりも早く皆に指示を出した。

「やべえ！みんな逃げろオオオ！！当麻が暴れるぞオオオ！！！！」

浜面の叫びとともに皆が当麻の一直線上から立ち去って行った

「えっ何！？」

「いいから！！あんたも早く来なさいっ！！」

御坂は事態を飲み込めていない打ち止めの手を取り皆と同じように  
その場から立ち去った

~~~~~

「いくぞ！『ドラゴン』！！」

そう言った瞬間、当麻の右腕から不気味な黒い塊が吹き出し、当麻
の右腕を覆い尽くし
その塊を竜の頭部のように形作った。

イマジンブレイカー バージョン ドラゴン ストライク
「幻想殺し…Ver『竜王の顎』！！」

2、3メートルはあろう巨大な漆黒の竜の頭部を前に向け、当麻は
照準を目の前の包囲壁へと向けた。

「『ドラゴン プレス
竜王の殺息』！！！！」

当麻の叫びと共に当麻の右手を覆う竜はその禍々しい口を開き、
次の瞬間、辺りが眩い光に覆われて、その口から巨大な光線が放た
れた。

光は誰もいない包囲壁までの道のりを一直線に通り抜けた。
その光は見ただけで包囲壁を突き破ると味方も敵さえもそう感じた
が光は包囲壁に当たる前に、軌道が逸れた、というよりは逸らされ
た。

「なっ!？」

「バカなッ!!^{ドラゴン}竜王の殺息がつ!？」^{プレス}

「どうしてっ!？」

「あれを見ろっ!」

攻撃を放った当麻よりもその仲間達の方がこの現象に驚いていたが、誰かが包囲壁に立つ3人を指さした。

「『神の右席』だああ!！」

~~~~~

包囲壁に立ち両手を前に構える『神の右席』達はそれぞれ手を下ろして喋り出す。

「いやーやつぱり化け物ですねー上条当麻は…本当にドラゴンの一撃を再現できるなんて」

「これで終わりではないであろうが…そう何度も防げるものではないであるな…」

「さっさと作戦に移った方が良さそうね…」

ヴェントは振り返り処刑台を見ると、司令官である土御門が叫んだ。

「そのまま作戦を実行する!!やれっ!!ヴェント!!!!」

## ドラゴン（後書き）

竜王の顎ドラゴンストライクの説明をどうすればいいかじっくり考えましたが正直ちゃんと想像通り伝えられたか不安です。それと当麻の能力はその内説明するつもりです。

「幻想殺し（イマジンプレイカー）」（前書き）

ラストへの構想も立てつつ、何とか自分のイメージするものを伝えようと

思いますが、これがまた難しい、やはり小説家の人は凄いですね  
そんなこんなで22話行きます。

「幻想殺し（イマジンプレイカー）」

処刑台、包囲壁それぞれが慌ただしくなくなるなか、土御門は指示を出していた

「いいか！！合図と共に砲台は上条当麻に一斉攻撃だ！！」

「りよっ了解！！しかし土御門様！」

「なんだっ！？」

「あっあなたも見ていたでしょう！？今更砲撃なんて奴には！」

「心配いらん…次は…必ず当たる」

~~~~~

「クソっ！！なんだこの壁は！？」「めちゃくちゃ堅え！！」

包囲壁に囲まれた湾内では立ちはだかる壁を壊そうと皆が躍起になっていた。

「みんなっ！下がちなさい！！」

「女教皇！！」

天草式リーダーの神裂は持っていた2メートルを以上ある刀を振りかぶり包囲壁に斬りかかった。しかし、包囲壁はガキンツ！！と刀との鈍いぶつかる音が響くだけであった。

「女教皇でも切れないなんて！！」

「ただの鉄じゃねえ!!」

「壊すのは無理だ!! 飛び越えよう!!」

誰かがそう言って何人かが包囲壁の上を見つめた、すると、包囲壁の向こう側から包囲壁を飛び越える一つの影があつた。

包囲壁を越えて湾内の真上に飛んだ影の正体を知った誰かが叫んだ。

「見る!! ヴェントだ!!」

その言葉につられて湾内にいる者達が一斉にヴェントを見上げた。その様子を見て誰よりも先に敵の罠に気付いた当麻が湾内の仲間達に向かって叫ぶ。

「クソっ!! みんな!! ヴェントを見るなアア!!!!」

当麻の忠告もむなしく湾内にいる仲間達は空高く飛ぶヴェントを見つめ武器を構えた。

（クソっ! 間に合うか!?!）

当麻が右手をヴェントに向けると、それを狙ったかのように当麻を港の砲撃が一斉に襲いかかってきた。

迫りくる砲撃を目の前にし当麻はただ苦笑いを浮かべる。

「やってくれるじゃねえか…土御門!!」

次の瞬間、無数の砲撃が当麻の立つ船の先頭で爆発した。

~~~~~



~~~~~

「当たったのか!？」「今度は消されなかったぞ!!」

暫く爆煙が当麻の立つ船を囲んだが爆煙がだんだんと晴れていくと、そこにはボロボロになった船の先頭に立つ、爆風や爆炎によって傷ついた当麻の姿があった。

「当麻!!」「当麻さん!!」

仲間達の声が届いたのか倒れそうになった当麻はなんとか持ち堪えたが、

片膝をついてしまいそのダメージは隠すことが出来なかった。

「当麻様!!」

「どうして消さなかったかったんですか!？」

「……………違う」

他の仲間達が困惑する中、当麻の次の敵の狙いに気付いたインデックスが船の先頭から離れた所で呟いた。

「消せなかったんだよ…私達を守るために」

「えっ!？」

「あれっ!!」

インデックスは先ほど空に舞い上がり、今は再び包囲壁の上にと戻ったヴェントを指さした。ヴェントは自分の左腕に付けている十字架のプレスレットを乱暴に取ると、それを握りしめた。握りしめら

れた十字架は簡単に碎けて、跡形も無くなってしまった。

「本物には遠く及ばないけど…これでもなかなか用意出来ない物なのに…もう使い物にならないわね」

あからさまに何かをした言っているヴェントに皆が困惑したが
一人の黒服のシスターがあっ！と気付く

「もしかして…『天罰術式』！？」
「違うよ」

答えたのはインデックスであつた。

「もし、本物の『天罰術式』なら最初のヴェントの攻撃をしてきた時点で私たちのほとんどは戦闘不能になつてたハズだもん…あれはかなり本物に近いレプリカ…」

本物みたいに時間差でも通用するとか、映像や写真で直接見なくても発動するなんて効果はなくて、ただ純粹に敵意を向けた者に発動するんだと思う」

「じゃあ当麻様は…」

「ここは戦場だしね…おまけに相手は敵の大將みたいなものだから敵意を向けるなつて方が無理な話だよ…当麻はそれに気付いてあれの破壊に専念したんだよ…」

「私達を守るために…」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「多少『幻想殺し』でダメージを減らしたようだな…カミヤン」

ゴハァッ！と咳と共に少し血を吐く当麻に嫌味を言うかのよう  
に昔のあだ名を言う

土御門に口を拭って余裕たっぷりと聞いたげな顔を当麻は浮かべた。

「随分…チマチマした作戦だな」

「その作戦に引つ掛かるお前もお前だ…完成した『幻想殺し』の真  
の能力…魔術、物体…いや存在そのものの破壊…その力の唯一の弱点  
「照準を一つにしか絞れない」

それを知った時に、この作戦が頭に浮かんだ…簡単に想像出来たぞ、  
自分か仲間かどちらかを選ばなくちゃいけなくなった時、お前は迷  
わず仲間を取るとな」

「ふっ…そうかよ」

「だが…本当にバカだなお前は」

土御門は半ば呆れたように言った。

「…そもそもこんな戦争やるだけ無駄だ…お前が勝つに決まってい  
る…お前の力に勝つ力など…この世に存在しないんだからな、

先ほど弱点と言ったが実際には弱点と言うよりはただの欠点だ…そ  
れも些細な…お前の力ならいくらでも補える。それをお前自身がダ  
メにしている…本来は目に見えずに軌道の読めない攻撃にワザワザ  
竜の形を与えて視覚化し避けやすくし、その気なれば一瞬でこの場  
の兵士達を消し去ることが出来るというのに仲間に頼り、拳句の果  
てにその仲間に脚を引つ張られダメージを負う…哀れだな」

「随分と饒舌じゃねえか…そんなに嬉しいか？」

「そんな感情を持ちはしない…ただ、あるとしたら作戦が成功した  
安心感だな」

「そうかよ…」

「そう言えば…もう一つ弱点があったな…普通ならその弱点はつけないが…「ダメージなどで集中出来ないと『幻想殺し』を制御できなくなる」…これもまた、お前の甘さから生まれた弱点だな」

~~~~~

「当麻っ!」「クソっ!俺達が足手まといになるなんて!!」

湾内の仲間達が自分の力の無さに嘆いていると、それを振り払うかのように当麻は叫ぶ

「くだらねえ心配してんじゃねえ!!今は仲間を助けることを考える!!!!」

当麻のセリフに忘れかけていた本来の目的を思いだし、当麻を心配する気持ちを押し殺して、皆包囲壁を見つめた。

「なにしろ…ここに居たら、当麻にもっと迷惑かけちまう…この包囲壁を何とかしねェと!!」

~~~~~

包囲壁の前で足止めをくらっている打ち止めは隣りのオリアナに心配そうに尋ねた。

「すごいボロボロだけど…大丈夫なのかな？」

「あの程度で死ぬんじゃないわよ！！取り合えずこの壁を何とかしないと」

オリアナが見つめる包囲壁は他の仲間達の攻撃を受けていたにも関わらず、

ドンッと立ちつくす巨大な壁を見つめた。

「早くしないと、奴らは処刑を早めるつもりらしいからね…いつ処刑を始めてもおかしくないわ」

「そんな！？だったら余計急がないとっ！！」

「そう簡単に壊せる物じゃないでしょ…これを飛び越える方が現実的だけど」

オリアナの言葉に打ち止めは少し間黙り、何かを決意したかのように再びオリアナに告げる。

「オリアナ…お願いがあるんだけど」

~~~~~

「敵は包囲壁を壊せん！！すぐに処刑に移るぞ！！」

土御門は処刑台の上から広場に向かい叫んだ。

本来、当麻がその気になれば例えダメージを負っていても包囲壁を一瞬で破壊することは出来る。だが、ダメージからくる痛みなどで

『幻想殺し』の調節を上手く出来ない以上

包囲壁に立つ兵士たちを殺す危険を冒してまで攻撃はしてこない、上条当麻という人間を理解している土御門はこのことをよく分かっていた。

兵士達の視線が一方通行に向くなか、突然、一人の少女が包囲壁の上を飛び越え広場に入り込みドォン！！と地面に降りた。

ラストオーダー
「打ち止め！！！」

誰よりも早く彼女の正体を言ったのは一方通行であった。

打ち止めが顔を上げると目の前には処刑台を堅く守る、20億の中の最終兵器

『神の右席』の3人が堂々と立ち並んでいた。

しかし、彼らの力を嫌というほど知っているはずの打ち止めは3人を前にしても臆することなく睨みつけた。

「いやーまさかここまで来るなんて……」

「我々を前にしてまだそんな目をしてられるとは……恐ろしいものであるな」

「あんたにはこのステージはまだ早すぎよ……」

~~~~~

「今飛び越えたのは誰だ！？」

湾内ではいち早く広場に行った、者が誰か知ろつと声が飛び交っていた

「打ち止めだ！！あいつたった一人広場に行きやがった！！」

誰かの言葉が当麻の耳に入り、当麻は一気に顔が強張って

「たくっ…あの無鉄砲さ…兄貴そつくりだ！！」

当麻はどこか笑いながらそう言うその後ろから駆け寄るインデックスに向かって叫ぶ

「インデックス！！俺達も一気にいくぞ！！切り札だっ！！全員準備しろっ！！」

「幻想殺し（イマジンブレイカー）」（後書き）

今回はここまでです。

次回は9番隊隊長を登場させます。



## 9 番隊隊長（前書き）

前々から考えていた話なのですが、実際に書いてみると難しかったです。

伝わるの良いという思いとともに23話行きます

## 9 番隊隊長

『神の右席』を目の前にした打ち止めは手に握っていた8枚のコインをバツ！と宙に投げてそのコインに自身の力を加えることで音速ほどの速度のレールガンを打ち出した。『神の右席』は仁王立ちのまま、ヴェントはハンマーでコインを弾きテッラは小麦粉の盾で防ぎ、アックアは片手でそれを弾いた。

それぞれが攻撃を弾くのを見ながら打ち止めは『インサイドエレクトロ体内電気』を発動させ3人を振り切ろうとした。だが、

「遅すぎよ……」

振り切ったはずのヴェントが前に現れ、驚く間もなくハンマーで殴りつけられた。

「ガアアアッ！！」

ハンマーを直撃した打ち止めはそのままアックアの前へと差し出されるような形でアックアの前に吹き飛ばされた。

「私が殺<sup>や</sup>ろう…ヴェント」

「はっ！女、子供は殺したくないんじゃないか？」

「確かに殺したくないが…ここまで自らの意思で来たのだ死ぬ覚悟ぐらいは出来ているであろう…だが、せめて苦しむ間も与えずに殺してやろう…少なくともヴェントお前よりは上手くやれる」

「まっ好きにきなさい」

ヴェントはもう興味がなくなのか大した反抗もせずアックアに獲物を譲った。

アックアは目の前に倒れる少女に向かってメイスを振り上げ、その凶悪な力で振り下ろした。だが、その攻撃が打ち止めに当たる前にアックアを一人の男が蹴り飛ばした。

「はまづらっ!!」

「無茶すぎだ!! バカっ!!」

アックアは突然の攻撃にも関わらず、大して驚いた様子もなくゆつくりと立ち上がった。

「2番隊隊長…浜面仕上」

「後方の…アックア」

~~~~~

「やっとまとものが来たか…」

浜面の登場にヴェントは興味を示し、ハンマーを構えたが、それを邪魔するかのようによろめく光と共に雷がヴェントに向かってきた。

「お姉さま!!」

「まったく…無茶する所は私に似たのかしらね…」

突然の乱入にもヴェントは驚くどころか笑顔を浮かべた。

「3番隊隊長…御坂美琴ね…あんたもなかなか楽しませてくれそうね…」

それとは対照的に広場の兵士達は慌ていた。

「二人の隊長の侵入を許した!!」「壁を越えてくる奴らも出てくるぞ!!」

「包囲壁の上にも気を配れエ!」

~~~~~

「落ち着けエエ!!一度に大勢が来ることはない!!」

慌ただしくなる広場に的確な指示を出していた土御門だが、そこに一人、兵士が報告して来た。

「土御門様!!湾内の連中に動きが!!」

「どうしたっ!？」

「それが全員船に向かっています!!」

~~~~~

「みんな急いで船に乗れええ!!」

「当麻の命令だ!急げええ!!」

湾内では生き残った上条勢力が当麻が指揮していた船に次々に乗りこんできた。

「早くしろ!!」

「乗れない奴らはしがみ付け!!!」

包囲壁を越えようとしていた隊長達や後ろから来た援軍が当麻の船に乗り込もうとしているのを見て湾内を見つめる兵士達は困惑していた。

「何をする気だ!!」「追い詰められて自棄になったのか!? 奴らはっ!!?」

突然の行動に辺りがざわつく中、船の先頭に立つ当麻は薄らと笑みを浮かべ処刑台にいる土御門に語る。

「おい土御門…いつ俺が隊長達が揃ったって言った?」
「っ!?!」

土御門は辺りを見渡した、確かにこの戦争で上条勢力の隊長達は次々と姿を現し、用意した精鋭中の精鋭の兵達と渡り合ってきた、10人の隊長のうち、土御門を除く8人の隊長達を

「気をつける!! まだどこかに隊長が隠れてるぞ!!」

土御門が慌てて広場に叫ぶが

「遅えよ…行けるなっ!? インデックス! 妹達!」

「大丈夫!」

「何時でも行けます…」

「行け! 風斬っ!!」

~~~~~  
~~~~~

当麻の掛け声と共に船の後ろにいた、見る者はみな立体映像と錯覚してしまう少女

『9番隊隊長』：風斬氷華は突如その姿を巨大な光の塊へと変えた。神々しいまでの巨大な光の塊は、先ほどの当麻の『ドラゴン竜王の顎ストライク』と対称的なイメージをその場に者達に与え、皆の眼を引きつけた。やがて光は形が整っていき、その姿を人の形へと変わった。

「なっなんなんだ！？あれはっ！？」「何かの兵器か！？」

「なんだあの姿は：まるであれは：『天使』」

包囲壁の上や広場に立つ者は皆突然現れた得体の知れない、物に注目していた。

しかし、その正体を知る土御門はただ顔を強張らせていた。

「『ヒューズ・カザキリ』か！こんな物まで！？」

「奥の手があるのはお前だけじゃねえんだよ：やれ！！」

風斬はその巨大になったその背中から無数の光を出し束ねて翼の様な形になった。

「G y y y y G A A A A A A ! ! ! !」

人には聞き取れない声の様な物を出しながら風斬は光の翼を一つにして包囲壁に向かって発射した。光は止められることなく、包囲壁に当たり当麻達と処刑台を結ぶ一直線上の壁を粉々にした。

~~~~~

「逃げるオオ！！！」「包囲壁から離れる！！！」

広場で戦っていると突如ドガアアン！！と包囲壁が湾内側から打たれた何かに破壊され  
浜面、御坂、打ち止めは破壊された包囲壁から広場を見つめた。

「風斬か！？当麻のやつ…使ったのか！？」

「何あれ！？」

「氷華よ…あれは…」

「えっ！？だつてあれ！」

「あの時のとは違うわ…あれの劣化版よ…前にみたいな特殊な力はないけど…前よりも安定して力もある、あんた達にも負担が掛からない」

~~~~~

「うオオオ！！！！」

「よっしやああ！！」

「やったぞおお！！」

壁の破壊が上条勢力達を騒がせたが、インデックスは同じような歡

喜を上げずに心配そうな顔で当麻に話しかけた。

「とうま！これ以上は氷華が！！」

「分かつてる！！大変なのは分かるが風斬！！頼む！！」

現れた『天使』はどこか疲れたような表情を感じさせたが、『天使』は光り輝く腕で船の後ろを掴むと

「みんな！！振り落とされんなよ！！」

当麻の指示に従い船に乗る者すべてが近くにあつた物にしがみ付き、これから起こるであろうことに備えた。船を掴んだ天使は先ほど開けた包囲壁の穴目掛け、船を押し込むような形で船を前に飛ばした。船は凄まじい勢いで氷を張った湾内を押し進み『天使』の開けた穴を挟み開けながら広場へと入り込んだ。

~~~~~

ドゴゴオオン！！と広場に船が入り込むのを確認すると当麻は前を見つめたままインデックスに話しかけた。

「インデックス…お前は風斬のところに」

「なっ！？…私だって戦えるよ！」

「いいから行ってやれ！あいつはもう戦えない…」

「…分かった」

インデックスは少し迷ったような顔をしたが、当麻の後ろ姿にそれ





## 9 番隊長（後書き）

風斬のことは前々から考えていたのですが  
天使の説明は難しいです。

やっぱり、鎌池さんはすごいですね

あまり付け足しても変になりそうだったのだから  
ここはさっぱりと行きました。

次回をもっとズッシリと行きたいです。

## 広場での決戦（前書き）

アクセス解析を見るとホントに多くの人が私の作品を見てくださっているのがよく分かり、ホントに嬉しいです。粗末な作品ですが、ラストへの構想も進んでいます。

そんな訳で24話行きます！

## 広場での決戦

「みんなっ！！俺の前に出んなよ！！」

仲間に最小限の忠告だけして当麻は再び剣を構えた。

「また来るぞ！！」「逃げろ！！」

先ほどの攻撃で弱気になった兵達は弱腰になり逃げだす者もいたが、

「まったく…どこに逃げるって言うんだ…」

緑色の修道服を着た男、『左方のテッラ』が一気に当麻に接近した。

「優先する。——ギロチンを上位に、剣を下位に」

そう言うとテッラのギロチンが当麻を襲った。迫りくるギロチンに当麻はただ剣を向け、それを受け止めた。ガキンッ！と鈍いぶつかり音が響いた後テッラの小麦粉のギロチンは粉々に砕け散った。

「あらら〜やっぱりダメか…その剣に魔術は効かないな」

当麻はそのままテッラに向かって剣を振り下ろそうと構え、テッラもそれに備え構えていると、突如、横から電撃が飛んできてテッラを吹き飛ばした。

「当麻…先に」

「ああ…」

当麻はテッラとの間に割り込んだ少女の言葉に従って先に進み、電撃に吹き飛ばされた

テッラは電撃を飛ばした人物を見つめ、呟く。

「『<sup>レベルガン</sup>超電磁砲』…御坂美琴」

~~~~~

「みんな当麻に道を作れ!!」

当麻が戦場に出たことでより一層戦いが激しくなった。

敵も味方も次々と倒れて行く中、打ち止めは『神の右席』との戦いでボロボロになった体を動かし処刑台に向かって駆け出した。

「行かせないよ!…」

走る打ち止めを巨大な炎が襲いかかった。

「だアアっ!! あつつっ!!!!」

「まったく…なんか大変なことになってきたね」

炎を纏った男が打ち止めの前に姿を現し、その男を見た兵士が彼の名を叫んだ。

「焰だああ!」「レベル5か!？」

一人のレベル5の登場と同時に他のレベル5達も次々に戦場に現れ

た。

~~~~~

「まったく！！面白いことになってんじゃねえか！」

「たくっ！包囲壁のせいで余計な体力使っちゃたわ」

弱腰な兵士達と対称に楽しそうに戦場に現れたのは『学園都市』の超能力者達であつた。

「援軍だ！！」「レベル5だぁ！！」

『神の右席』『学園都市のレベル5』の登場に弱腰だった兵士達は活気づき再び上条勢力に向かって来た。

「いちいちレベルに踊らされるな！！落ち着いて打って取れ！！」

強力な敵の出現に動揺する味方達に当麻が叫んだ。

先ほどレベル5の攻撃を受けた打ち止めはよろよろ立ち上がり、痛む体を無理やり動かして処刑台に向かった。戦場は混乱しているせいか打ち止めは一般兵からの攻撃は受けなかった。だが、一般兵にだけであつた、ただの一般兵ではない一人の女が突如横から打ち止めを蹴り飛ばした。

「だアアア！！」

「まったく、あんたの面を見るとムカついてくるわ……」

女は右目はなくその眼窩からは溶接のような青白い光が迸り、千切れた左手の断面からは眩い閃光のアームが飛び出していた。そのような状態でも堂々と立ちつくす女の正体は、『学園都市』第4位の麦野沈利、彼女は最早人間とは思えない状態であつたが、その顔は不気味にニヤケていた。

「まっ遣伝子レベルで同じだから仕方ないか…」

麦野は左手から鉛筆ほどの太さのビームを一直線に飛ばして、立とうとする打ち止めの右肩を貫いた。

「ガアアッ！」

「…特別な個体とは言え所詮はレベル4か…」

体中に走る痛みがピークに来たのか打ち止めは先ほどの様に叫びもせず、

打ち止めはバタリと倒れた。

「じゃあ…おしまいっ」と

麦野の左手の眩い閃光のアームの光が大きくなり、打ち止めを飲み込もうとした瞬間、

「麦野オオオオオ！」

男の叫び声と麦野は横からとび蹴りをくらい吹き飛ばされた。

「グアッ！！っ！？はまづらああ！！！！！」

蹴った人物を見て先ほどのニヤケ顔とは違い、湧き出る憎悪をその

顔の前面に出して叫んだ。

「テメエの相手は俺だー!!」

「はっ！相変わらずカッコつけるねえ…はまづらああああ!!」

~~~~~

近くで浜面と麦野が戦っているのを見た打ち止めは再びなぜ生きていられるのかと思うほどの傷ついた体を起こした。先ほど貫かれた右肩に手を当てると、そこは確かに貫かれていたが一瞬にそれも高速であつたため傷口は焼けて、血は出ていなかった。それだけを確認して、打ち止めは恐らく最後であろう力を振り絞って『体内電気』を発動させ、走り出したがその最後の力で進んだ道も無残に目の前に現れた女に阻まれてしまった。

「だから無駄だつて…」

打ち止めの目の前に現れたヴェントはハンマーを打ち止め目掛け振るい、打ち止めはなんとかハンマーの軌道を逸らそうとしたが、最早電気、磁力を操れるだけの力もなく

抵抗も出来ずにハンマーが直撃した。吹き飛んだ打ち止めは完璧に気を失いそうになったが、そこに吹き飛ばされた打ち止めを受け止める人物が現れた。

「あ…ああ…あ…」

ラスト オーダー

「しっかりしろ！打ち止め!!」

打ち止めを受け止めたの当麻であった。当麻はただ優しく傷ついた打ち止めをこれ以上傷つけないように抱きかかえた。そこに打ち止めを吹き飛ばした張本人ヴェントが呆れた様に喋りだした。

「上条当麻の采配も焼きが回ったわね…あんたともあるう男が…そんな無謀なだけの
ゴミクズに先陣を切らすなんて」

呆れ顔のヴェントを睨みつけていると、後ろから当麻の後を追ってきたシスター達がやって来た。

「当麻様…!!」

「ああ!!これはヒドイ!!」

シスター達は当麻が抱きかかえる少女を見つめ、驚いていた。

「手当を頼む…こいつはよくやった」

「はい!」

当麻から丁寧に打ち止めを受け取ったシスターは手当の為、出来るだけ戦場の後ろへと移動しようとしたら

「そんなの!いらない!!」

突如、打ち止めが起きてシスター達の手の中で暴れ始めた。

「じっ!ジツとしなさい!!」

「そうよ!!死んじゃうわよ!!」

シスター達は打ち止めを羽交い絞めにしていたが、それでも打ち止

めはシスター達を押し退けようとした。

「そんな暇ない！！早く助けないと！！」

「そんな体でどうするの！？」

「無茶でもなんでもやらなきゃ…あの人は私のたった一人の家族なんだから！！！！絶対に助け…る」

そこまで言って打ち止めは意識を失った。

「おい…何とか命を繋いでやってくれ」

「はいっ！出来る限りのことはします！！」

「…………ほざくだけの威勢の塊…若く無様…だけどそんなバカは嫌いじゃない」

打ち止めをシスターに任せ、当麻は打ち止めよりボロボロではない体を動かし前に進んだ。

~~~~~

「ぐあー！！」

「パリー！パリー！パリー！！その程度かよ！上条勢力2番隊隊長『浜面仕上』！！！！」

『超能力者』麦野の攻撃をなんとか受け流しながら浜面は必死にレベル5の相手をしていた。

「たくっ！相変わらず「主人公を追いつくホラーキャラ」みたいだ

な」

「なんか言ったかアア!!」

麦野の左手の閃光が浜面を襲った。浜面は即座に反応し文字の書かれた札を取り出した。

「四神：青龍」

浜面が札を握りつぶすと突如、水がドバツ!と現れ浜面の前に現れた。

水の盾は麦野の「原子崩し」を受け止めたが、ビームは次第に水の盾を抉って浜面に迫って来た。それを見た浜面はまた別の札を出して目の前の水の盾に乱暴に突っ込んだ。

「四神：白虎!!」

浜面の言葉と共に水はバキツバキツ!と音を立て氷へと変わり、その強度上げた。

「はっ!大層な曲芸だな!!はまづらああ!!」

今の威力では氷を砕けないと悟った麦野は即座にビームの威力を上げて一気に氷を砕いた。氷を砕くと、そこには再び札を握りしめ両手を合わせる浜面の姿があった

「四神：玄武!!」

次の瞬間バゴツ!と麦野足元が崩れた。そして、辺りの地面がまるで壁のようにバランスを崩した麦野の周りを囲み、麦野に迫って来た。

「こんなもんでどうにか出来ると思ってんのかアアア!!!」

麦野はその超能力を乱暴に振り回して、辺りの壁を容赦なく破壊した。

「はっ！つまんねえ事ばっかしやがって!!」

すべての壁を壊した後すぐに麦野は先ほど浜面が立っていた所を見たが、そこにはすでに浜面の姿はなかった。

「曲芸もバカに出来ねエだろ？」

後ろからの声にバツと振り返ると、そこには右手を振りかぶる浜面の姿があった。

「チイイ！」

「遅エエッ!!!」

浜面の右手が容赦なく麦野の顔目掛け放たれ、麦野がそのまま殴り飛ばした。

魔術を使ったのであろうか、麦野は殴りられた所から5、6メートルほど吹き飛ばされてそこで意識を失ったようになくなった。

「学習能力のねえ奴だ…」

~~~~~  
~~~~~

辺りが様々な戦いが続く中、当麻はヴェントとやり合っていた。  
ヴェントはハンマーを使って当麻に攻撃を仕掛けた。当麻は持っていた剣でそれを受け止めるとヴェントが放った風の攻撃を受け止め、消し飛ばした。

だが、その風を消し飛ばした瞬間、そこから再び爆発が起こり爆風が当麻に襲いかかり、

当麻の周りを爆煙が包み込んだ。

「その程度でやられる訳ないでしょ？」

ヴェントはつまらなそうに言った。暫くして煙が晴れると、先ほどと違い、左腕が竜の鱗の様な物で覆われた当麻の姿が現れた。

「『イマジンブレイカー バージョン ドラゴン シールド  
幻想殺し』…Ver『竜王の鱗』」

左腕で一気に残っていた煙を振り払うと、ヴェントに向かって剣を振り下ろした。

ヴェントはそれをハンマーで受け止めると、辺りがその衝撃波で地面が円形に沈んだ。

「オリアナが昔使った手だな…消えたら発動する魔術か」

「ええ…でもそんな必要なかったわね…私とワザワザ罅迫り合いをしたところを見ると…土御門の言う通り…本気で私達を殺さない気ね？」

「………だったらなんだ？」

「昔と変わらず、甘いわ」

「…余裕って言うんだよ…覚えとけ！」

~~~~~  
~~~~~

浜面は倒した麦野を横目に処刑台に座る一人の人物を見つめ呟いた。

「待つてろよ……………一方通行……………四神…白虎!!」  
アクセラレータ

浜面は魔術を使い凄まじい速度で一気に処刑台に近づいたが、処刑台にあと一歩という所でドゴォン!と突然横から殴りつけられた。  
浜面は殴った人物を見つめ呟く。

「チツ!?!……………黄泉川!!」

浜面を殴り付けた人物はさっきまで『神の右席』が座っていたイスにドッシリと座り込み叫んだ。

「たくつ!…ガキ共がつ!!…ここを通りたきゃ私を倒していくじやん!!」

## 広場での決戦（後書き）

此処までです。

とりあえず、黄泉川をかつこ良くしてみた。

麦野と浜面の戦いはもつと長くやろうかとも思いましたが、グダグダになりそうだったのでサッと終わらせました。

まあまた書き直す思います。

## 最強の警備員（前書き）

今回のところはone pieceの中でも特に気に入っている所です。

頭ではまともでもなかなかうまく表現できない、やっぱり小説は奥が深い

それでは25話いきます



## 最強の警備員

「隊長！！」「黄泉川隊長！！」

学園都市『警備員』たちであろう者達が一斉に黄泉川を見つめた。なかには待ってましたと言わんばかりの笑みを浮かべる者もいた。

「黄泉川っ！」

「久しぶりじゃん浜面…随分と大物になったようじゃん」

黄泉川は座っていたイスから立ち上がり、戦場へと舞い降りた。普段のジャージ姿ではなく、

『警備員』として出勤する時の防具で身を固めており、浜面にとっては馴染みの格好なのだが、浜面は『駆動鎧』と言った特別な装備をせずに彼を殴った事に驚いていた。

（白虎の速度について来るなんて…相変わらずとんでもねえ奴だ）

「ホント好き勝手やってくれたじゃん…浜面」

黄泉川は腰の両側あたりにつけてあった棒を持ち、それを振るとジヤキン！という金属音とともに両手に持っていた棒が伸び『警備員』がよく使う警棒になった。

「ガキをいたぶる趣味はないけど…悪さをしたガキにはゲンコツが必要じゃん」

そう言つと黄泉川の目の色が変わり、今まで浜面が見たことのなかった本気で戦う黄泉川の顔になった。それと同時に浜面はその場の空気が変わったような感覚になった。

浜面がジリジリと間合いを取っていると、

「浜面！ビビってる場合じゃないだろ！！」

後ろから数名の『天草式』を従えた建宮斎字が浜面の横を通り過ぎ黄泉川へと向かって行った。

「能力者でもない奴になにビビってる！？」

「待て！！建宮！！」

建宮はかまわず黄泉川に近づくと持っていたフランベルジェで斬りかかった。

黄泉川は警棒でそれを受け止めると、フランベルジェを横に流して警棒を建宮の顔面目掛け容赦なく振るった。

「うおっと！！」

警棒は建宮の顔面スレスレを通り過ぎた。建宮が急な反撃に驚いていると、黄泉川の蹴りが建宮の足に当たって建宮を転ばせた。転んだ建宮に黄泉川が右手の警棒を振り下ろそうとすると

「教皇代理！！」

黄泉川の後ろから小柄な少年が短剣で斬りかかり、黄泉川はそれを左手の警棒で受け、振り下ろそうとしていた右手の警棒の軌道を変え、少年の腕に叩きこんだ。

ゴキッ！と骨と鉄が当たる嫌な音がし、少年は倒れこんだ。

「うああああ！！」

倒れたままの建宮が少年の名を叫んだ。

「香焼!!」

「この!!」

仲間がやられたのを見た、斧を持った大柄な男が斧を振りかぶった。

「やめろ!!牛深!!」

牛深と呼ばれた男は建宮の言葉を聞かず、一気に斧を振り下ろした。  
黄泉川は警棒をクロスさせ簡単に斧を受け止めた。

「安心するじゃん…子供を殺したりしないじゃん」

黄泉川は斧を振り払うとそのまま2本の警棒を男のわき腹に叩きこんだ。

「があっ!!」

「牛深っ!!」

仲間が一気に2人やられて立つことを忘れてしまった建宮に黄泉川は再び警棒を振り下ろした。しかし、建宮に振り下ろされた警棒は突如横から現れた一本の刀で受け止められた。

「女教皇!!」

「建宮早く立ちなさい!それから五和と二人の手当を!」

「はいっ!すみません!!」

建宮は素早く立って牛深の元に行き、五和は香焼に手を貸し二人を後ろに下がらせた。

建宮を助けた『天草式』のリーダー神裂火織と黄泉川は互いに睨みあっていたが先に声を出したのは黄泉川の方だった。

「『5番隊隊長』神裂火織じゃん」

「…何者ですか？あなたは…」

「ああ？別にただの『警備員』をやってる先生じゃん」

「…仲間を殺さなかったことには御礼を言っておきましょう」

「はあ？」

「その気になれば簡単に殺せたでしょう？」

「……………買いかぶりすぎじゃん」

それだけ言って二人は何の合図もなしに警棒と刀を振るった。

神裂は聖人の力を使って凄まじい威力の剣を振るったが、

黄泉川はそれらをすべて二本の警棒で受け止め、さらには反撃もしてきた。それらの反撃をかわしながら、神裂は顔に出さずに驚いていた。

（ただの人間が受け止めるなんて…）

いつ処刑が始まるか分からない中、時間をかけていられないので神裂は聖人として力を本気で使い斬りかかったが、黄泉川は受け切れないと判断し警棒でうまく刀を受け流した。

（力だけじゃない！技もある！…こんなただの人間に使いたくなかったですが…時間が無い一氣に勝負を）

神裂は自身の切り札である抜刀術、ゆいせん唯閃を使う事を決め、刀を鞘に収め力を蓄えた。

（これだけの戦いになって置きながら、今更殺さないなんて甘いこ

とは言えない…殺す気で…)

「居合抜きじゃん」

「っ!？」

黄泉川は神裂の構えから悟ったのか神裂の奥義を見事に言い当てた。相手が何をするのか分かっていながら黄泉川は剣の間合いから出るでず、それどころか一気に近づき、神裂の鞘に収めた刀の柄を警棒の先で抑え込んだ。

「なっ!？」

「こうすりゃ打てないじゃん」

黄泉川は刀を押さえる手とは反対の手にある警棒を振り下ろした。そこに火で出来た槍が黄泉川目掛け飛んできた。それに気付いた黄泉川は警棒を止めて、神裂から一気にバツと後ろに飛んで距離を取った。

「危なかったな神裂」

「浜面仕上…助かりました」

「気つけるよ…あいつはレベル3、いや4くらいだったら銃も使わずに倒すことが出来る奴だ」

「でも信じられません、あのスピードにパワー…本当に人間ですか!？」

「もちろん、ただの人間があんな動き出来る訳がねえ…『パワードスーツ駆動鎧』  
を使って無い所をみるとおそらくは『ハードテーパーング発条包帯』だな」

「発条包帯?」

「『駆動鎧』の身体強化の部分だけ取り外したみたいなもんだ、別名、超音波伸縮性の軍用特殊テーパーング…そいつを使えばあれくらいの動きは出来る」

「だけど…それだけで」

「ああ…だがあいつは特別なことをしてる訳じゃねえ…警棒の使ったあの動きも『警備員』なら誰でも最初に習う基礎中の基礎だ」

「基礎で…あれですか」

「だがよく分かったろ？あいつの強さは…」

「ええ…これと言った派手さはないですが…剣の受け止め方から受け流し方まで手本にしてもいいくらいです」

「どんな基礎でもやり手よっては印象が大きく変わる…あれ以上の事はあいつはしてこねえぞ、あいつからしたらする必要もねえからな」

「唯一の弱点の「ただの人間であること」も学園都市の技術で補強されては…」

「正直俺はレベル5よりあいつの方がずっとおそろしいぜ…」

浜面はズボンのポケットから札を取り出して、目の前の敵を見つめた

「あいつは学園都市に存在する『アンチスキル警備員』の中じゃ…間違いなく最強だ」

~~~~~

上条当麻が戦場に出たことで、広場先ほどの湾内以上に戦闘が激しくなっていた。

数だけなら学園都市とローマ正教側に利があつたが、包囲壁によって兵達は散り散りになり、広場に集まるのが難しくなっていた為、兵士達は連携が取れず不利な戦いを強いられていた。処刑台の上からそれをただ黙って見ながら、一方通行の頭の中はなぜか古い記憶を呼び覚ましていた。

ある日一人の少年が一方通行に喧嘩を売り、その少年は腕を腕を折るようになった。

その後にはその両親がやって来て少年と同じ結果になり、さらにそれを助けようとした者達も、と言った感じにその人数はドンドン増えていった。それによって、彼は『絶対能力者』を目指す様になった。だが、その心の内は決して不純な物はなく。ただ、誰かから認められたいそんな願いを持っていただけであつた。しかし、そんな彼の心とは裏腹に絶対能力者を目指せば目指すほど、彼は恐れられ、嫌われてきた。街を歩くだけで、無能力者だけでなく能力者にさえ彼は恐れられた。

彼とすれ違った者は彼が去つた後に呟く。

「ふゝこええー」「まったくこんなとこ歩くなツちゅーの」

彼と目の合った者は彼から視線を外し呟く。

「やべっ！目があつた！」「バカ野郎！殺されるぞ！」

彼に挑んだ能力者は敗れた後に彼に向かって叫ぶ。

「この…化物！…！」

いつだって彼の前に広がっていたのは彼を恐れる目と憎む目しかなかった。

しかし、今の彼の目の前にあるものは違った。
叫び声や悲鳴が響く中、誰か男の声が聞こえた。

「必ず助けるから諦めんな!!」

広場で激しい戦闘を繰り広げる中、誰か女の声が聞こえた。

「私達がついてます!!頑張つて!!」

処刑台の前で戦う無能力者の不良少年は叫ぶ。

「待つてろよ!!すぐ助けてやる!!」

敵に電撃を浴びせながら、とある少女が叫ぶ。

「そんなしけた顔してないで!!位らしく構えてなさい!!」

~~~~~

戦場で戦っていた黄泉川はふと処刑台に目をやると処刑台に座り、  
顔を下に向けプルプルと小刻みに震える一方通行の姿があった。



「アクセラレータ一方通行？」

黄泉川の視線に気付き隣りにいた土御門も震える一方通行に気付いた。

「どうした？……アクセラレータ一方通行……」

「……チクショウツ！……俺はこんな……時に」

一方通行が顔を上げるとその顔は涙で溢れており、震える体によって目に溜まる前に涙はポタポタと落ちて行っった。

「ダチ親友が……妹が……仲間達が……血を流して倒れて行くっていうのに！……俺は……俺は……嬉しくて涙が止まらねエ……すべて受け入れるつもりだった！振り下ろされる刃も仲間の手も……」

「……ただ今……俺は生きたい！……今になって命が惜しい！！」

一方通行の願いを土御門はただ黙って横で聞いていた。

遠くに離れていたが黄泉川は一方通行の心の叫びを聞いた黄泉川は何も出来ない悔しさか怒りのせいか警棒を握るその手がより一層強くなった。

## 最強の警備員（後書き）

と言う訳で、とりあえず黄泉川を淒くしてみた。

かなり無理ありますが、ここからはあまり黄泉川出さないの  
どうか許して下さい。

そして、お気に入りのシーンを一方通行に置き換えてみた。

実際に一方通行がこうなったらきつとこんな感じに泣くんじゃない  
かとも考えながら、書いていくと最後の方はスラスラと書くことが  
出来ました。

「聖人」と「無能力者」(前書き)

今回はいつもより短めです。

少し物足りなく感じるかもしれませんが、

26話行きます。

「聖人」と「無能力者」

「黄泉川！お前だつてこんな処刑なつとく出来ねえだろ！！」

「……………もう…決まったことじゃん」

「…そうかよ！…お前はいつもメチャクチャやるし、人の話も聞かねえバカだと思ったけど！家族を見捨てる奴だと…思わなかった！」

浜面はそう叫びながら火の槍を黄泉川に向かって投げつけた。  
迫る火の槍を目の前にしながら黄泉川は構えると、突如黄泉川の周りを水の塊が囲んだ。

「2対1は分が悪いであろう」

黄泉川を守った水を出したであろう男がゆっくりと黄泉川の隣りに現れた。

「ああ…あんたか」

「どちらが相手でもいいが…もしも特に異議がないなら男の方は私が相手をしよう」

「別に…好きにすりゃいいじゃん」

アックアに呼ばれた男の方である浜面は黄泉川、神裂から少しずつ離れて行った。

他の戦いからの影響がある程度ない所まで来ると二人は睨みあったまま動かなくなった。

「久しぶりであるな……仕上」

「アックアさん……なんで、なんでこんな事に手を貸すんですか?…」

「…前にも言ったであろう、正義と言う物は…人それぞれ違つと」

「っ!?!これがあなたの正義ですか!?!」

「貴様の方こそ…それでいいのか?かつてお前を街から追い出し今の様な立場に追いやつた男を…野放しにしておく…それがお前の正義か?」

「…別に俺はアレイスターの為に戦っているわけじゃねえ…俺は…こんな無能力者の俺を必要としてくれる仲間の為に戦う!」  
「なるほど…貴様らしい答えだ」

浜面は今までの札とは違う黒い札を出し、それを破ると浜面の前に3メートルを超す大剣が現れた。

浜面はそれを両手で掴みアックアに向けて構えた。

「『アスカロン』か…使えるようになったか…」

「あなたから貰つたこの力…今は仲間の為に使う!」

~~~~~

「周りが気になつてるようね…」

「ああ?」

ヴェントの攻撃を防ぎながら当麻はヴェントを睨みつけた。

「心配なんかしてねえよ…皆、お前らみたいなボンクラじゃねえんだよ」

「美しい信頼なこと…」

「柄にもねえこと言ってるじゃねえ…っ！？ガッ！ゴフッ！！」

ヴェントとの会話のさ中、当麻は突然口から血を吐いた。

慌てて当麻はヴェントを振り払い、後ろに飛んだところで膝をついて一気に血を吐いた。

「ゴハアッ！！アハッ！！！！」

「やっぱりその体じゃ、使いこなせないようね…」

ヴェントは血を吐く当麻にかまわずに突っ込んできた。当麻は剣を構えたがヴェントはハンマーでそれを横に払い、ハンマーを持つ手と逆の手を当麻の腹に叩きこんだ。

「グウッ！！」

「ただの人間の体であんなバカでかい力を使おうとするからよ」

~~~~~

「当麻！！（一番恐れていたことが！！）」

血を吐いた当麻を見た御坂は慌てて当麻の元へと行こうとしたが、相手をしていたテッラがそれを許さなかった。

「敵に背中向けていいの？」

テッラが右手を振ると、ビュゴォオン！とギロチンが御坂の背中に

襲いかかった。

「ガアアア！！！！」

「勝敗は一瞬の隙だね」

~~~~~

「当麻アツ！！御坂アツ！！」

「人の心配をしている場合か？」

アツクアは巨大なメイスで浜面の右耳にしてあった十字架のピアス
を突いて粉々に破壊した。

「！？しまった！！」

「自らの弱点をむき出しにしたまま、そのような油断が出来るとは
な……誰がそれを与えたか忘れた訳ではないであろう？」

「クソッ！！」

「……これで魔術は使えまい」

~~~~~

「当麻様！！」

「御坂隊長！！」

大将と主力の一人がやられ広場では仲間達が混乱し始めた。

「浜面隊長も危ないぞ!!」

「『聖母のピアス』を壊された!!あれじゃ魔術を使ねエ!!」

~~~~~

「当麻アツ!!」

「ようやく崩れ始めたか…上条勢力」

土御門は処刑台の上から広場の様子を見て叫んだ。

「よしっ!処刑の準備をしろ!!」

「はっ!!」

土御門の言葉に従い、二人の男が処刑台に上がって来た。

「聖人」と「無能力者」（後書き）

アックアと浜面の戦いも書こうかと思いましたが、なかなか納得いくものが書けず、今回は省きました。

でも浜面がアスカロンを使う所は考えていたので、

やはり、これだけで終わりしたくないので、またいずれ書こうと思います。

でも読み返してみると当麻より浜面の出番が多くなっていることに気づいて

誰を主人公にしたかったのか分からなくなってきました。

勝手にしゃがれ（前書き）

今回は普通の長さですが、

なぜかいつもみたいに文章が浮かんでこなかったです。

スランプかな？ まあプロでもなんでもないんですが…

そんなこんなで27話行きます。

ちなみタイトルは one piece のまんまです

勝手にしゃがれ

「終わりだ」

アックアは全長5メートルを超すメイスを浜面に向かって振り下ろした。

「クソがアア!!」

浜面はアスカロンに札を張り付けてメイスを受け止めた。

メイスとアスカロンがぶつかりと爆発と共に辺り一帯を煙が包み込んだ。

アックアは素早く煙から出て様子を伺った。やがて煙が晴れると中から膝をつき、手を口にあてた浜面仕上の姿があった。

「ゴフツ!!アフツ!!」

苦しそうな咳と共に口から出した血が浜面の膝と手を真っ赤に染めた

「僅かながら寿命を延ばしただであるな」

「はあ...はあ...」

アックアは浜面の前に立ち、メイスの先を浜面の首元に持つて行った。

「浜面仕上!!」

襲いかかる敵を倒しながら神裂火織は浜面の姿を確認し、助けに行

けないことを悟ると
仲間達に向かって叫んだ。

「天草式!!」

「ハッ!」

神裂の言葉に従って天草式のメンバーが浜面の前に現れ、アックアに武器を構えた。
膝について動けなくなっていた浜面を誰かが後ろに引っ張っていった。

「大丈夫ですか?」

「建宮に…五和か?」

「後は頼むぞ五和」

「はいっ!」

建宮は五和に浜面の事を任せると、アックアの前に立つ仲間の元に走って行った。

「クソッ!」

「ああ!動かないで下さい!取り合えず傷を直します!」

無理やり動かそうとする浜面を五和が押さえつけたが、浜面は構わず立ち上がった。

「そんなのは後でいい!!それより『聖母のピアス』と同じものを!!」

「あつ!あんな国宝級の霊装をポンポン作れる訳ないでしょう!」

「なんでもいいから魔術を使えるようにしろ!!当麻が危ねえ!!」

「っ!?!分かってますよ……取り合えず傷を治すから動かないで

下さい!!」

~~~~~

「怪我人をこっちに!!」

「医療班!! 急げ!!」

戦局が傾くなか、戦場から少しだけ外れた所では次々に運ばれてくる怪我人にシスター達が手を焼いていた。

「うつ……ここは？」

「ああ!! まだ動かないで!!」

打ち止めが目を開け起き上がろうとすると、通りかかったシスターがそれを止めた。

「私……そうだっ!! 処刑は!？」

「まだ大丈夫です!! 治療が終わってないんだから安静に!!」

シスターの忠告も聞かず、再び戦場に戻ろうとする打ち止めをシスターが3人がかりで押さえつけた。

「見つけたっ!! 打ち止め!!」

名前を呼ばれて打ち止めはようやく暴れること止めて、後ろ振り返った。

「まったく！私の忠告も聞かないからよ！！」

「オリアナ…」

「この子は任せて…あなた達は他の怪我人を…」

オリアナの言葉に従いシスターはコクリと頷いてその場から離れた。

「取り合えずは無事で良かったわ…あなたに死なれたら当麻の坊やに会わせる顔がないから…」

「ダメ…行かなきゃっ！！」

「こらっ！待ちなさい！！」

「放してっ！！」

「今のおんたに何が出来るのっ！？」

オリアナは打ち止めの肩を掴み、そのまま地面に叩きつけ打ち止めに跨り押さえつけた。

「あんたが出ればまた当麻や美琴、浜面がおんたに気を配らなきゃいけない！！」

今のおんたじゃただの足手まといよ！！」

「でも…私は……」

「いいっ！？どれだけカツコつけて命を懸けようと！！力がなきゃ何も救えない！！」

…戦場じゃ！おんたみたいなガキの命はゴミみたいに散って行くんだよっ！！」

「うっ…うっ…うううううっ！！」

打ち止めは暴れることを止めて呻くように泣き声を上げた。

御坂美琴のクローンと生まれたからの数年間で初めて味わった挫折に打ち止めはただ子供のように泣くことしかできなかった。

「あんたはここに居なさい…」

泣く打ち止めの頬に手をあて、それだけを言うとオリアナは立ち上がった。

「ふう……どうやら、ここが私の死に場所みたいね…」

オリアナが覚悟を決め戦場に向かおうとすると、突然打ち止めがオリアナの足を掴んだ。

「オリアナ……最後のお願ひ聞いて…」

~~~~~

「こつのオオオ……!!」

「ウオツと……!!」

振りかかる電撃を間一髪避けたテッラは御坂から距離を取った。

「いやゝ今のは危なかったねエ」

「ちっ!」

「どうしたのゝ?早くしないと当麻君が危ないよ」

「っ!?!この……!!」

普段の御坂なら無視できたであろうテッラの挑発的な言動に御坂は反応してしまった。が、

「つまんねえ挑発に乗んな！！御坂！！」

突然彼女のよく知る声が耳に入り、思わず御坂は振り向いた。

「当麻！！」

声の主である当麻はヴェントの拳を腹で受け止めたまま、御坂の方を睨んでいた。

「くだらねえ心配してんじゃねえよ…こんなんじゃ俺が…やられると思ってるのか？」

当麻は剣を握りなおしヴェントを睨みつけた、するとヴェントは何かを感じ取ったのかその場からすごい勢いで離れて行った。

「上条当麻を打ちとれ！！」「手負いだ！！今なら倒せる！！」

ヴェントと入れ替わるように数十人の魔術師達が当麻に向かって行った。

「邪魔だ！！」

ビュン！と当麻が持っていた剣を振ると、バゴォー！！と凄まじい衝撃波が生まれ襲いかかった魔術師達を一人残らず吹き飛ばした。

「なっ！なんて奴だ…」「本当に化け物か！？」

当麻の一撃は襲いかかった魔術師達だけでなく、その奥にいた兵士

達の心にも凄まじい影響を与えた。

「はあ…はあ…お前に勝ったんだ…この程度で音を上上げる訳には
いかねえよな…そうだろ？一方通行…」
アクセラレータ

~~~~~

「はあっ！？あんた本気で言ってるの！？」

「…おっ…お願い…」

「そんな確かにすぐに戦うまで回復できるけど、あれは体の芯から  
治す物じゃない！あれはただのドーピングよ！」

打ち止めはボロボロな手でオリアナの足を掴んだまま放さず、焦点  
の合っていない目で見つめ、血で滲んだ口でひたすら頼み込んでいた。

「お願い…もう私が戦うには…それしか」

「だからっ！！何度言えば分かるの！？あんたの命、一つ懸けた所  
でただの足手まといにしか…」

「それでも！！」

打ち止めは言葉を遮りながら顔を上げ、オリアナの顔を見つめて声  
を出し続けた。

「例え足手まといでも…みんなの邪魔になっても…何も出来  
ないからって何もしないで、そのまま生き残っても…私は…私は後  
で死にたくなるっ！！」

「っ！？」

「お願い！！今私に戦う力を頂戴つ！！」

打ち止めはそこまで言うとかリアナの足を放し、少し起き上げていた体をバタリと倒した。心の底からの叫びを聞いたリアナはイライラしたような顔になり

「だゝかゝらゝ！あんたに死なれたら当麻に合わせる顔がないって言うてんでしょうが！！」

オリアナはまるで悪戯をした子供叱る母親のように叫び、右手で髪をワシヤワシヤをかき、怒った様な呆れた様ななんとも言えない表情をしながら打ち止めを見下ろした。

「あゝそう……そうか……そうね……なるほど、そんなに死にたいのね……あゝそう分かったわ………勝手しやがれエエエ!!!」

オリアナは単語帳を取り出し、数枚破り捨てると、それを倒れる打ち止めの背中に叩きこむような形で紙を押しつけた。すると淡い螢の様な光が打ち止めを包み込んでいった。

暫くして、光が消えると先ほど変わらずボロボロの打ち止めの姿があるだけだったが、

突然打ち止めはズズッと起き上がった。そして、焦点の合っていない  
 かった目を処刑台に  
 向けながら息を大きく吸った。

「ウフアアアアアアアアアツアアアアアアアアアアアアアアア！」

!!

少女から想像も出来ない叫びは戦場の様々な爆音や叫び声に遮られ、広場に響くことはなかったが、広場の奥にある処刑台にいる一人の

男には確かに届いていた。

彼は処刑台から少女の姿を確認し、無意識に彼女の名前を呟いていた。

「打ち止め……」

## 勝手にしゃがれ（後書き）

なんだか、書いていてもうまくまとまらない感じがします。

でもこれは、書き直しも出来るので、またその内書きなおそうと思います。

ちなみに打ち止めが復活するパターンは最初は何パターンか考えてあって

魔術で無理やり回復させるやり方や体晶を使うパターンや  
魔道書を取り入れるなど、考えたのですがうまくまとまらなかった  
ので

普通の魔術パターンにしました。

ただ書いてるうちにオリアナの言葉使いやポジショニングがよく分  
かんなくなってきました。

まあでも素人の書いたものなのでご両所下さい。

## 希望の橋（前書き）

このラストについていろいろと考えました。自分オリジナルのハッピーエンドを作るか、原作同様のバットエンドにするか、いろいろ迷いましたが、迷いすぎてなかなか仕上がらなくなってきたので私はもう原作どおりにすると来しました。

最初はバット ハッピー両方描こうかと思いましたが、それをやると多分話を考えずらくなると思ったので、それは止めてラストは一つに絞ることにしました。おかげで、要約吹っ切れて話を進められます。

そんな訳で28話行きます。

## 希望の橋

処刑台では一方通行の両隣りに剣を構えた男達が処刑命令を黙々と待ち続けた。

「急がないとっ！もう処刑を始める気だ！！」

走り出す打ち止めに続くようにオリアナが隣りにつきながら、打ち止めに忠告してきた。

「いいっ！？次倒れたらもう立ち上がれないと思いなさい！！」

「大丈夫っ！！もう倒れない！！」

「そう願うわ！！…ほらっ！邪魔よ！！！！」

襲いかかって来た敵にオリアナは『速記原典』を一枚破ると凄まじい爆風が敵を吹き飛ばした。

~~~~~

「恐ろしい執念だな…お前の妹は…」

すべてを見渡せる処刑台の上から、先ほどまで虫の息だった打ち止めがドンドン近づいてくるのを見て一滴の汗が土御門の頬をつたっていた。

「だが、今更何をしても遅い……………見ろ！上条当麻！！これで最後

だ！……やれっ！！」

土御門の言葉と共に二人の男は剣を振り上げ、名前を呼ばれた当麻もそれに反応するようにすぐさま剣を構えた。

「無駄だ……俺がそれを止められないとでも……ゴフッ！！（しまった！！）」

当麻の体に一瞬走った痛みが思考能力を奪い、一方通行を救うための力を使わせることを妨げた。

「終わりだ！！」

剣を振り上げた男二人は同時に剣を振り下ろし、剣が一方通行に触れようとした

次の瞬間、

「ダメEEEEEEEEEEEE！！！！」

打ち止めの叫びに触発されるかのように突如空から雷が処刑台の前に落ち、電撃と風の衝撃波が辺り一面に広がった。処刑台の上のいた土御門と一方通行は衝撃に耐えることが出来たが、剣を振り下ろしていた二人は完全に隙を突かれ、耐える間もなく処刑台から吹き飛ばされた。

「なんだ今のは！？」

「あいつがやったのか！？」

被害が及んだのは処台の上だけではなかった。処刑台の目の前に落ちた雷は必然的に

「間違いない！！超能力だ！！」

「バカな奴はレベル4のハズだ！！それに奴はただのクローンだろ！？」

「『^{レベルガン}超電磁砲』の遺伝子を使っているんだ…突然変異と言う可能性もある…」

「なんにしろ…奴はレベル5と同等の力を持っている！」

「やつを打ちとれ！！野放しにすればいずれ我々の脅威になりかねん！！」

~~~~~

敵の標的が次第に打ち止めに向く中、当麻は立ち上がった。

「当麻？」

「…全員！！打ち止めを援護しろ！！」

当麻が叫ぶと広場で戦っていた仲間達が一斉に当麻の方を向いた。

<sup>ラスト オーダー</sup>  
「打ち止めを！？」

「あの子をかつ！？」

~~~~~

「ちょっと打ち止め！！今は！？」
ラスト オーダー

「えっ！？何が！？」

「……………なんでもないわ…行くわよ！！（まだ自分でも気付いてないのね…）」

敵を吹き飛ばしながら進むオリアナの後に続き打ち止めも走り出した。

オリアナも打ち止めも互いに協力し合いながら戦場を駆け抜けていたが、

オリアナがふと横から打ち止めに斬りかかってくる一人の男を見つけた。

しかし、打ち止めはその男が死角に入っているのか気付いている様子はなく、

気付いたオリアナは反射的に叫んだ。

「打ち止め！！危ない！！！」

オリアナの声に反応し即座に横を向こうとしたが、打ち止めが振り向こうとしたところにはすべてが終わっていた。

振り向いた先に合った物は敵の姿ではなく、敵を倒すスタイルとアニューゼであった。

「あなた達…」

「リーダー命令だよ…」

「援護します！どうぞ先へ！！！」

スタイル、アニューゼに続いて次々と当麻の命令を受けた仲間達が打ち止め立ちの前に迫る敵を薙ぎ払い、処刑台までの道を切り開いていった。

彼らの援護も受けて先ほどよりも進みやすくなったが、その安心感を容易に破壊する男が再び目の前に立ちふさがった。

「危ない！！打ち止め！！アックアだ！！」

5メートルを超すメイスを持った『後方のアックア』が打ち止めの進路を塞ぐべく再び現れ、そのメイスを打ち止め目掛け振り下ろしたがメイスはゴキンツ！と鈍い音と共にその動きを止めた。メイスの止めたのは人物は暴力的とまで思わせる強大なアックアの力を「アスカロン」と書かれた剣一本で受け止めていた。

「こいつはやらせねえぞ……」

「仕上……」

「さつきみたいには……いかねえぞ！！」

浜面は上着のポケット乱暴に札を取り出し、アスカロンに張り付けるとアックアだけでなく浜面を巻き込んで爆発が起こった。

「はまづら……！！」

「何をボサツとしてるの！？先を急ぐわよ！！」

~~~~~

「まったく、しつこいねエ」

無数の白いギロチンが打ち止めに向かって放たれ、誰かがテッラだあ！と叫んだがその声をかき消すように電撃の壁が現れ、ギロチン

を跳ね返した。

「お姉さま!!」

「ほらっサッサと行く!!もうそろそろ準備が出来る頃よ!!」

「準備!?!」

「しくじるんじゃないわよ!!」

~~~~~

打ち止めが通るであろう広場の奥ではとある仕掛けの準備を着々と進めていた。

「建宮!準備は!?!」

進路を確保するため敵を薙ぎ払いながら、神裂は尋ねた。

「大丈夫!いつでも行けますよ!!女教皇!!」
プリエステス

「よし!!なら打ち止めが来るまでここを死守します!!」

「了解!!」

~~~~~

「ねえオリアナ!さっき言ってた準備って!?!」

「分かんないわ!!けど、みんなあんたの為に道を作ってる!!だから

あんたはそれに答えないといけない！もし倒れでもしたら、生きてても息の根を止めるからね！！」

「…よく分かんないけど！私がここに来た理由は最初から一つだけ！！！！」

それぞれの思いと覚悟を背負い打ち止めは戦場を進む。  
たった一人の家族を助けるため、

~~~~~

「来ました！今です建宮！！」

「了解！！行くぞ天草式！！！！」

神裂の合図と共に建宮ら数人の天草式がそれぞれの武器を地面に突き刺した。

すると、突然地面が盛り上がったかと思うと、まるで粘土のような軟らかな地面が処刑台目指し一直線に伸びて行った。

「なんだあれは！？」「何かの魔術だ！！」

周りの魔術師が混乱するなか、軟らかくなった地面は一步通行のい
る処刑台まで届くと、先ほどの軟らかさとは一転し元の地面の堅さ
に戻り、打ち止めと一方通行を繋ぐ橋へと変わった。

「すごいっ！！何あれ！？」

「天草式よ！！…あれの準備してたのね…行きなさい打ち止め！！」

それだけ言つとオリアナは打ち止めから離れ、橋を死守すべく他の仲間達と共に守りに回った。

「行けエエ！！打ち止め！！」

「俺達が橋を守る！！」

「一方通行を救ええ！！！！」

突然目の前に現れた道に打ち止めは少し驚いたが、覚悟を決め天草式の作った橋に飛び乗った。

「みんな！！ありがとう！！」

天草式やアニニューゼ部隊、すべての上条勢力の力によって作られた橋を打ち止めはひたすらまっすぐに進んだ。敵の攻撃も来ることもなく打ち止めはついに一方通行まであと数十メートルの所まで来て打ち止めの顔にも笑顔が浮かんだ、だが、突然の天草式によって作られた橋がドオン！！音をたて突然崩れだした。

「なんだ！？」

「あれを見ろっ！！」

誰かが指をさした先には二本の警棒に『アンチスキル警備員』の装備で体を固めた黄泉川愛穂の姿があった。

「なっ！？黄泉川！！そこどいてよ！！」

「どけるか！！私は『アンチスキル警備員』の隊長じゃん！！！！」

希望の橋（後書き）

此処までです。

ここだけの話し今自分の中では新しい話の構想が浮かんでいてそれを書きたい気持ちが次第に大きくなっています。

だから、コレを何とか終わらせようという気持ちが大きかったですがラストを決めることで要約スツキリしました。

このままラストに向けて一気に突っ走るつもりです。

避けては通れない（前書き）

やはり、ラストを決めたのは大きかったです。

今までよりも悩まなくなっただけ、書く速度が早くなりました。
そんな訳で早速29話行きます

避けては通れない

「『警備員』の隊長！黄泉川だ！！」

「まずいぞ！橋が崩れる！！」

「何とかしろオオ！！ラスト オーダー打ち止めアア！！」

周りから様々な声が聞こえてくるが、ラスト オーダー打ち止めはそれに耳を傾ける暇はなかった。

彼女の視線はすでに黄泉川に向けられそれを外すほどの余裕は無くなっていた。

「黄泉川っ！！」

「ここを通りたきゃ！私を倒していくじゃん！！それがお前達の選んだ道じゃん！！」

「出来ないよっ！！そんなの！！」

「出来なきゃ！！アクセラレータ一方通行が死ぬだけじゃん！！」

「いやだよっ！黄泉川！！」

「嫌な事なんてこれからいくらでも起こるじゃん！！私は容赦しないじゃん！！」

崩れ始める橋の上で二人の距離はドンドンと近づいていき、いよいよ目の前にまで迫った打ち止めを見て黄泉川は警棒を振り上げた。

「ラスト オーダー打ち止め！！お前を！！敵と見なすっ！！！！」

警棒を振り下ろす黄泉川を見て、覚悟を決めた打ち止めは恐らく最後であろう

インサイドエレクトロ

『体内電気』を発動させすべての力を一つの拳に乗せた。

ハードデビルング

能力で強化しているとは言え『発条包帯』で身体能力を強化してい

る黄泉川と打ち止めとの間には大した差はない。
ラスト オーダー
だが、黄泉川には絶対的に勝っている、ラスト オーダー打ち止めとは比べ物にはならない経験の差があった。強敵と戦ってきた黄泉川にとって打ち止めの放った拳など簡単に避けられるものであったが、それをさせなかったのは一瞬頭によぎった、たった二つの記憶

学園都市最強の彼が涙を流しながら語った一つの台詞、

『俺は生きたい！…今になって命が惜しい！！』

学園都市で平穏な日々を送っていたころ目の前の少女が言った他愛もない台詞、

『ワイー！今日はミサカの好きなハンバーグだ！ってミサカはミサカは喜んでみたり！！』

自分の教え子が言った命乞いと母になった事のない自分がかつて味わった母親のような

記憶、たった二つの記憶が目の前に迫る打ち止めから黄泉川の眼を逸らせさせ力の籠った警棒から力を奪った。

「うわわアアアアアアアア！！！！！！」

泣き声にも叫び声にもとれる声を出しながら放った拳は力を失った

警棒が打ち止めに届くよりも先に黄泉川の顔へと届いた。

ドゴォォン！と打ち止めの拳は黄泉川を横へと吹き飛ばした。

「黄泉川隊長！！」「隊長がやられた！！」

黄泉川が目の前でやられるのを見ていた土御門は額から汗を垂らしながら呟く。

「お前も人の子だ…黄泉川」

~~~~~

黄泉川を倒し崩れる橋を遮る物は無くなった。<sup>ラスト オーダー</sup>打ち止めは崩れる橋を的確に進みすべてが崩れ落ちる前に処刑台へと辿り着いた。

<sup>ラスト オーダー</sup>「打ち止め！！」

処刑台に辿り着くと同時に<sup>アクセラレータ</sup>一方通行は無意識に彼女の名前を呼んでいた。

呼ばれた当の本人も<sup>アクセラレータ</sup>一方通行の顔を見るなり、ニコツと笑顔になった。

「もう大丈夫！！」

一方通行の側に行った<sup>ラスト オーダー</sup>打ち止めはすぐ後ろに回り、彼を繋いでいる鎖に手を伸ばした。

「こんな鎖焼き切って…」

「させるか!!」

突然、話に割り込んだかと思うと土御門は小さな筒から打ち止め、  
一方通行がある場所に向かって、数ミリほどしかない正四角形の紙  
をいくつもばら撒いた。

それと同時に彼らを囲むように4つの筒が四角形を描き現れ出した。

「俺がなんの準備もしていないとでも思ってたか!？」

処刑台を見つめる者達のほとんどが何が起きているのか分かってい  
ない様子だったが、  
土御門から陰陽道を教えられ、おそらくこの場で2番目に陰陽道に  
詳しい浜面仕上が慌てて叫んだ。

「あれは…赤ノ式か!？まずい!!  
打ち止めアア!!  
一方通行をつ  
れてすぐそこから離れるオオオ!!」

浜面からの忠告を受けすぐに打ち止めは鎖を外そうとしたが、土御  
門はそれを邪魔することなく、バツッと処刑台から飛び降りた。

「逃げる時間も与えん!!」

逃げる土御門が右手を振ると、一方通行達を囲んでいた4つの包み  
が輝き出した。

その眩しいまでの光を見て打ち止めはすぐに、ここを吹き飛ばす準  
備が出来たことを悟った。

「終わりだアア!!」

土御門の叫びで、もう今すぐにも自分達を殺すことが出来るのだと分かり打ち止めはどうすればいいのかとパニックに陥ったが、

ラスト オーダー  
「打ち止め!!」

不意に目の前の<sup>アクセラレータ</sup>一方通行が名を呼んだ。

「俺に!!」

<sup>アクセラレータ</sup>一方通行が何かを叫んだが、彼らを包んだ光によってそれらは打ち消され彼の言葉は広場には届かなかった。彼らを包んだ光は急に現れたかと思うと突然爆発を起こして処刑台を消し去った。

~~~~~

「そんな!!」
^{ラスト オーダー}
「打ち止め!!」^{アクセラレータ}一方通行!!」

仲間達が絶望に包まれると同時に敵の学園都市とローマ正教達は歓喜が沸いた。

「やったか!？」^{アクセラレータ}「一方通行は能力を使えん!!生き残れる訳がない!!」

戦場にいるほとんど者が戦闘を止め処刑台を見つめいたが、

「おい！なんだアレ！？」

誰かが指さすとその先にはつい先ほど爆発が起こった処刑台を包む煙が妙な動きをし始めた。煙はまるで風船を膨らます様に、その中央が広がっていき明らかに誰かが力を加えているように見えた。そして、誰がやっているのかこの場にいるすべての者がすぐに答えを導き出した。

「まったく！！昔からおめエは！！！！」

爆煙の中から突如声が聞こえた。途轍もない爆発の中、まるで兄が妹を叱るような声が響いた。

「俺の言うこともろくに聞かねエで！！無茶ばかりしやがってエエ！！！！」

叫びに反応するかのように爆煙は突如バンツ！！と綺麗に吹き飛ばされ、

中から一方通行を彼に後ろから抱きついた打ち止めが現れた。それと同時に今度は上条勢力から歓喜が沸いた。

「よっしやああああ！！！！」

「一方通行アア！！！！」

「よくやったアア！！打ち止めアア！！！！」

避けては通れない（後書き）

本日はここまで、ここも one piece の中じゃお気に入りです。

おじいちゃんの苦悩とそのあと助かった喜び、一度にいろいろな気持ちになる回でした。でもやっぱり書いていると黄泉川がすごく可愛そうになってきました。

私は結構黄泉川好きなので出番は増やしたいと持っていました、このような感じになるとは、自分で書いてなんてなんですが…がんばれ黄泉川（笑）

迎える最終局面（前書き）

30話ですよ30話まさかここまで長くなるとは自分でもビックリです。

タイトル通りの「最終局面」突入です。

ちなみに原作はここらへんから、もう涙なしでは私は見れません
そんなこんなで怒濤のクライマックスへの第一歩30話行きます！！

迎える最終局面

「バカなっ!!」「なぜだ!? 反射が生きてるぞ!!」
「チョーカーには能力に回せるほどのエネルギーは無いはずだろ!」
「？」

先ほど土御門が使った罫は能力を使って弾いた、それは誰が見ても明らかなのだが、なぜ能力を使えるのか学園都市側の者は理解できず上条勢力の者たちもまったく分かっていなかったが、みなそんなことは気にも止めずただ仲間の無事を喜んでいた。

「よし!! 充電完了だア! 打ち止めもういいぞ!!」
「分かった!!」

一方通行は言われ打ち止めは背中から前に回していた手を放した。

「まさか!? 打ち止めの能力で充電を!?!」 「あの土壇場でか!」
「？」

ドサツ! と地面に下りると一方通行と打ち止めは背中を向かい合わせた。

「まったく… まさかお前に助けられ日が来るとわな… ありがとう… 打ち止め…」
「フツみんなが手伝ってくれたからだよ…」

二人とも背を合わせ、顔には薄らと笑みを浮かべていた。が

「奴らを逃がすなアア!!」 「一方通行は超能力者だ!!強いぞ!!」

処刑台の前で構えたい兵士達が一斉に襲いかかって来た。

「行くぞ!打ち止め!!蹴散らすぞ!!」
「うん!!」

一方通行が右足を地面に叩きつけると、突然地面が盛り上がりさらに辺り一面に衝撃波を飛ばし、さらにそこに怯んだ敵を打ち止めが電撃を浴びせ倒していった。

「へっ…俺のいない間に強くなったな…」
「いつかあなたよりも強くなっちゃうかも?ってミサカはミサカは調子に乗ってみる!」

迫りくる兵士達を物ともせず二人はどんどん仲間達の元に近づいて行った。

「二人とも気をつけろ!!ヴェントだアア!!」

声につられて二人が振り向くと持っているハンマーを乱暴に振り回し襲いかかってくるヴェントの姿があった。

「うわっ!またあいつだ!!」
「しょうがねエなア!!今は俺が守ろう!!!!」

一方通行は打ち止めの前に出てヴェントと向かい合った。ヴェントは気にせずハンマーを振り、無数の風の刃が二人に向かって放ち、ビュゴオオ!!と地面を削りながら一方通行に迫ったが、そのすべ

ては一方通行に触れた途端、軌道を変えまったく別の方向へと飛んで行った。

「ヘッ…当麻以外にあの一方通行とあゝも息が合うとは…」

「ボケつとすんな！！二人の道を作れエエエエ！！」

~~~~~

一方通行を開放しほとんどの上条勢力の仲間達が安心し力を抜いてしまっている中、「聖人」神裂火織はその場の空気を返るべく叫んだ。

「無理に相手をする必要はありません！！撤退しましょう！！」

神裂の言葉に緊張感を取り戻した仲間達は逃げる事に対する意識を漸く持ち始めた。

「ほらっさっさと撤退の準備をしろ！！」

「殿は私達「天草式」が努めます！！さあ早く！！」

広場にいる上条勢力の中で一番先頭に立っている「天草式」のリーダー神裂火織と建宮斎字が指揮をとり仲間達を逃がし始めたが

「その必要はねえ！神裂！！」

彼らのリーダー上条当麻が突如一番後ろにいる「天草式」の前に立った。

「殿は俺がやる…」

「何言ってるんだ！？そんな体で！？」

「力の使いすぎです！これ以上の無理はいけません！！」

突然の当麻の言葉に「天草式」は驚き、当麻を戦わせまいと前に立つとしたが

当麻はバツと手を横に出しそれを制した

「いいか、みんな…これは…最後の命令だ！！」

そう言った瞬間、撤退を始めている者、撤退の為に敵を倒している者達は時間が止まったかのように動くのを止め、背を向ける当麻に視線を移した。

「なっ何言ってるんだよ！？」

「最後ってどういう意味だよ！？」

「一緒に帰るんだろ！？」

後ろから聞こえる、仲間達の質問攻めを無視し当麻は命令を続けた。

「俺はここに残る！！お前らは全員！！生きて無事にここから逃げろ！！！」

~~~~~

「あのバカっ！何を！？」

「待て…御坂」

当麻の元に行こうとする御坂の肩を浜面が掴んだ。

「なっ！？放して！ほつといたらあいつ何をするか！！」

「あいつはすでに覚悟は出来てる！！それを無駄にする気か！？」

「だからって！！あいつが死んじやってもいいの！？」

「言い訳ねえだろ！！！」

暴れる御坂を押さえながら浜面は大声で叫んだ。

ビクツと体を震わした御坂は振り返りそこで初めて下唇を噛み締め、涙を堪える浜面の顔を見た。

「浜…面…？」

「あいつは…もう決めてたんだ…」

「えっ！？」

「これが当麻の最後の戦いだ…」

~~~~~

「お前を置いて行くななんて出来る訳ねえだろ！！！」

「一緒帰ろう！！当麻アア！！！」

振り向かない当麻にひたすら声をぶつけ続けると、漸く当麻が仲間の方を首に向けたが

「リーダー命令が聞けねエのか！？さっさと行けエ！！！」

当麻アア！と呼ぶ声が何度も聞こえてきたが、先頭に立つ当麻の前に『神の右席』の3人が襲いかかって来た。一番初めに近づいてきたアックアは「聖人」の力を乗せたメイスを振り下ろし、当麻はそれを剣で受け止めた。ドゴオオオン！！と今までにないほどの激しい音と衝撃波が辺りを襲った。

「まさかお前とこうして剣を交える日が来るとわな…」

「吾輩はいつかこうなるだろうと思っていた…だが残念だ」

二人の会話を遮るように横からテッラのギロチンが襲いかかり、当麻はアックアを剣で横に払い左手の『竜王の鱗<sup>ドラゴンシールド</sup>』でそれを防ぎ、後ろ下がって距離を取ったが、すぐにヴェントが近づいてきた。当麻はヴェントのハンマーが自分に届くよりも前に剣を振り、生み出した衝撃波でヴェントが突っ込んでくることを阻止した。

「もう終わりにしようぜ…土御門」

当麻は処刑台の下にいるサングラスをかけた元クラスメイトに向かって話しかける。

「上条当麻…」

「決着をつけようぜ…学園都市…！」

## 迎える最終局面（後書き）

「打ち止めを背負ってれば常に充電できんじゃね？」と言うネタを何かサイトで見て、使ってみようと思いました。

実際に出来るかどうかは知りません。

ただ自分で読んでいると当麻があまりダメージを受けているような感じがせず

これで諦めるのか…自分で書いておきながら、ちょっと疑問を持っています。

あと折角いろいろキャラが出たのにあまり活躍させていないキャラもいるので

ここからはクライマックスなのでいろいろ出番を増やしたいです。

ああそれと多分この話し原作がまだあれなので中途半端になっちゃうと思いますけど、どうか御両所下さい。ではまた今度

## 行間二（前書き）

題名の通りの行間です。  
簡単な言つとただの過去編です。



## 行間二

数年前の記憶…

「ねえ！！いいじゃん！！」

「アホ！！ガキが酒飲もうなんて100年早ーよ！」

「ブー！！ケチィ！！」

打ち止め、一方通行の二人がなにやらもめている所に当麻は出くわした。

「なにしてんだ？お前ら…」

「ねえ聞いてよ！この人、自分は未成年のくせにお酒飲んでるのに…私には飲ませてくれないの！！」

「ガキが酒飲もうなんて200年早ーよ」

「なんか増えてるし！？」

二人のやり取りに当麻はハハッと笑いながら二人の近くに座った。

「でも打ち止め…なんで酒が飲みたいんだ？」

「だってお酒飲めば兄弟になれるんでしょ！？」

「……………」

「あれっ？違った…」

「いやっ間違っただけ…どこで知ったんだ？そんなこと…」  
「えーっとねーこの前この人が見せてくれた映画で言っていたよ」

当麻は即座に元凶であろう一方通行の方を向いた。

「お前一体なにを見せたんだ？」

「ああ？これだよ『新・仁義なき戦い 南の帝王死す』」

「ガキになんつーもん見せてんだ！？」

「ああ！？別にいいだろ！映画くらい」

「いや！酒よりも教えちゃいけないことがてんこ盛りだろうがぁ！  
！」

当麻は暫く若手芸人のようなテンションでツツコンだが、その後にはポツリと呟く。

「兄弟か…」

当麻は何やらしんみりした顔をし、酒瓶を持って打ち止めが持っていた盃を手を取った。

「ほらっ…飲め打ち止め」

「ワイッ！！やったアー！！」

「おいおいっ！」

当麻は盃にトクトクと酒を注いでいった。

「いいじゃねえか…これで俺達は兄弟だ」

「フッ」

「ワイッ！！いただきまーす！！」

3人は同時に飲み始めたが

「ブウウウ！！」

突然、打ち止めは口いっぱい含んだ酒を吐き出した。

「まずい」

「だからガキには無理なんだよ」

「ハッハッハッ！！まあもっと大人になったら一緒に飲もうな……」

## 行間二（後書き）

今回はギャグ回のような感じですよ。

ただ自分が思いついた話なのでそこまで重要じゃありません  
だけど今後こういった話を作っていきます。

## 兄弟（前書き）

この前書いた行間2がなぜかアクセス数が今まで話を抜いて第1位になった

なぜだかまったく分かりません…

そして、ここからはもう私は無理です…

涙なしではこの原作は見れません…

書きたいように書きたくなかった

そんな複雑な気持ちを胸に…絶望の32話…行きます。

## 兄弟

「やつらを逃がすな!!」「一人でも多く討ち取れエエ!!」

上条勢力が逃げ始めるとともに学園都市、ローマ正教からの追撃も始まり背を向ける

上条勢力に攻撃を仕掛けようとしたが

「テムエらの相手は俺一人だ!!」

剣を勢いよく振り下ろすと凄まじい爆風に敵の叫び声が広場に響いた。

「奴らよりも先に上条当麻だ!!」「奴は手負いだ!!」

~~~~~

「黄泉川さん!!しっかり!!」

「うつ!!くう!!鉄装?」

「そうです!ほらしっかり!!」

黄泉川は同僚の鉄装の肩を借りて立ち上がり、状況を理解できないまま広場を見た。

「何があつたじゃん?」

「えっと…さつき黄泉川さんを殴り飛ばした子が一方通行を助けた」
アクセラレータ

したんです!!」
「そうか…」

黄泉川は何とか一方通行と打ち止めの姿を確認しようとしたが、見つけられず
その代わりに上条勢力の先頭に立って戦うリーダー上条当麻の姿を見つめた。

「もう無茶苦茶ですよ…」
「やっぱりとんでもない奴じゃん…にしても鉄装…よくお前が無事だったじゃん？」
「えっ!?!いや、正直怖くて何も出来ませんでした…」
「フッ…まっ命があるだけマシじゃん」

あははと苦笑いをする同僚を見ると、突然二人の隣りに先ほどまで処刑台にいた土御門が現れた。

「土御門…」
「どうやら…決着^{けり}をつけるつもりらしい…」
「そうか……」

~~~~~

「落ちつけよ!五和!!」  
「嫌ですっ!!当麻さんが残るなら私も残ります!!!!」

暴れる五和を3人がかりで押さえつけ、引っ張っていこうとするが

五和は槍を地面に刺してそれを掴みその場から一切動こうとはしなかった。

「リーダー命令だ！」

「従うんだよ！！」

「離してください！！！」

「五和！！！」

神裂は五和の名前を呼んだかと思うと突然刀の柄を五和の腹にドスンっ！と打ち込むと、

五和は電池が切れた玩具のように動かなくなった。

「ブリエステス  
女教皇！」

「こうでもしなきゃ大人しくしないでしょう？五和を連れて行きなさい！！」

「あっはい！！！」

神裂は振り返り戦っている当麻の方を見つめた。

「ブリエステス  
今、私達に出来ることは一人でも多く生き延びる事です……」  
「女教皇……」

神裂は再び仲間達の方を見つめ、涙を溜める仲間達に向かって叫んだ。

「涙は拭いなさい！！泣くのは戦闘が終わった後です！！」

「……はいっ！！」「……」

神裂は剣を構えながら仲間と同じように目に溜まった涙を拭いた。そして彼女はもう振り向かない。



~~~~~  
~~~~~

「ほらっ！あんた達も急ぎなさい！！」

敵を振り切り仲間に合流した一方通行と打ち止めの前にオリアナが  
現れ二人を先導した。アクセラレータ ラストオーダー

「オリアナ！！」

「お前か…」

「挨拶は後！！急ぐわよ…」

ドゴオオオン！と凄まじい爆発音と衝撃波が響き、敵がすごい勢いで吹き飛ばされていった。

3人は揃って当麻の方を向くと、

「あなた達は狙われるわ…一人でも多く生き残るのがあの子の唯一の救いよ」

「当麻…」

一方通行は当麻を見つめながら呟くと、傍らにいた打ち止めが一方通行の服を掴んでクイクイツと引っ張った。アクセラレータ ラストオーダー アクセ

「ねえ行かないと…あの人の覚悟が…」

「分かってる…無駄にはしねエ…」

打ち止めの手を放すと一方通行は少し前に出た。ラスト オーダー アクセラレータ

「邪魔だ！！どけエエエ！！！」

後ろに迫っていた敵を一気に吹き飛ばすと、あまりにも派手だった  
為か

アクセラレータ

当麻は一方通行の存在に気付いて、首だけを一方通行の方に向けた。

アクセラレータ

当麻がこちらを見たのを確認した一方通行は手を地面につけ頭を下  
げた

「別に礼はいらねえよ……だけど一つだけ聞かせてくれ一方通行」  
アクセラレータ

「……はあ……はあ……なんだ？」

「あの日……俺と兄弟になって……お前は幸せだったか？」

「っ！？……当たり前だッ！！！」

「そうかッ……」

そう言うとき当麻はこの戦争の中で一番の笑顔になった。

~~~~~

「行けエ！！一方通行アア！！みんなア！！！」

もう一度当麻は剣を振り下ろし敵を吹き飛ばしたが、敵が飛ばされていくなか一つの炎が当麻に向かってきた。当麻はそれを剣で消し去ると当麻の力に耐えていた『神の右席』の他に4人の能力者が現れた。

「レベル5か……」

先ほど炎を飛ばした男が全身に炎を纏って当麻の前に立った。

「はじめまして上条当麻…お会いできて光栄だ」

「死に際に立ち会えたのが嬉しんだろ？」

まるでからか様な事を言ってきた超能力者を睨みつけていると

「それだけの傷を負っていながらそこまで戦えるとは！…素晴らしい根性だ！！敵ながらあつ晴れだ！！」

と何やら暑苦しい男、第7位が声をかけてきた。

「7位か…」

「別にあんたの命なんて興味ないけど…」

今度は右目がなく左腕から眩い閃光のアームが飛び出し、不気味な笑みを浮かべる麦野沈利が話しかけてきた。

「あんたが死んで世界がどうなるかは興味があるわ…」

「まったくいい性格してるぜ…浜面が苦手な訳だ」

「お前の相手もしてみたいが…」

今度はまだ話していない男が話に割って入った。

「でもあっちの方が面白そうだ…」

そう言っただけで自分の背中から光の羽根の出すと垣根帝督は当麻を飛び越え撤退を始める上条勢力の元へと飛んで行った。

「なっ！？行かせるかつ！！」

当麻が剣を使い衝撃波で叩き落とそうとすると、『神の右席』が一斉に飛びかかって来た。

「仲間の心配ばかりはしてられんだろ？」

「ちィー！！」

~~~~~

「おらァー！！どうした！？かかってこねエのか！？」

当麻を飛び越して上条勢力を追った垣根帝督は撤退を始めている無抵抗な者達の背中に向かって容赦なく攻撃して来た。

「『ダークマター未元物質』だ！！」

「下手に応戦するなァー！！最低限の応戦だけでいい！！」

皆、当麻の命令に従い逃げることに専念していたが、最低限の応戦だけで止められる訳もなく次々に垣根の攻撃に倒れていった。

「なんだよ…この程度か？」

倒した敵を踏みつけながらつまらなさそうに垣根は呟いた。

「全員逃げてばっかで、戦いやしねエ…所詮は上条勢力は負け犬の集まりか…」

そう呟きながらも垣根は攻撃を休めず、その光の翼によって次々に上条勢力を倒していった。

「あいつッ！」

「下手に相手をしてる場合じゃないわよ！！今は逃げないと！！」  
「分かつてる！！」

振り向き時間を潰す一方通行をオリアナが叱り、渋々一方通行も再び走り出そうとしたが

「まあ…リーダーがリーダーじゃ仕方がねエか…あんな負け犬じゃ苦勞もするな…」

垣根がそう言った瞬間、一方通行は立ち止り、拳を強く握りながら振り向いた。

「取り消せエ…今の言葉…」

振り向いた一方通行に気付いたオリアナは手を掴んで引つ張ろうとしたが

「ちょっとそんなことしてる場合じゃ！！」

「あの野郎…当麻をバカにしゃがった！」

一方通行は掴んだ手を振りほどき垣根の前の立った。

「何か間違った事を言ったか？あれだけの力を持っていながらお前の祖父アレイスターにも挑まず、奴の思いがままに生きて…戦わずして逃げた…あいつはただの負け犬だ！！！！」

垣根は逃げる上条勢力に向かって聞こえるように挑発し、何人かの足を止めさせた。

「あいつ！！好き勝手に言いやがって！！」

「止める御坂！！お前までのせられてどうする！？」

今に垣根に飛びかかりそんな御坂を押さえながら浜面は叫んだ。

「のるな一方通行！！逃げるんだ！！！」  
アクセラレータ

御坂以外にも怒りをぶつけそうな者は何人がいたが浜面の声でなんとか正気を取り戻した。しかし

「テメエにあいつの何が分かる！？あいつは居場所のねエ俺達に生き場所をくれたんだ！！」

「ハッ！！化け物どうし偽りの家族ごっこで楽しんでたか？」

「黙れエ！！！」

「そうやって仲間を頼ったあげく、それが自分の首を絞め！そしてその足手まといを守って死ぬ！！随分と空虚な人生だ！！」

「テメエなんかに……分かってたまるかアア！！！！（俺を救ってくれた親友<sup>タチ</sup>をバカにすんじゃないエ！！！！）」

アクセラレータ  
一方通行は地面を力強く踏んで能力によって岩を垣根向かって投げつけた。

垣根はそれを羽根で防ぎ、反撃とばかりに羽根を無数に飛ばした。普通なら垣根の羽根は一方通行に当たることなどなかったが、しかし今回は一方通行の反射の壁をすり抜ける様に羽根が彼の身を襲った。

「グアアア！！！！」

「一方通行の反射の壁を!？」  
「破った!？」

吹き飛ばされる一方通行を見て誰も驚き啞然とした。  
垣根はゆっくりと倒れた一方通行に近づいて来た。

「忘れたか？俺はお前が無意識に反射を働かせない物質を作り出せる…」

一方通行はかなりダメージを受けたが即座に立ち上がり、口の周りの血を拭った。

「ああ!! 早く逃げないと…ウッ!!」  
「打ち止め!! 無茶はダメよ! あんたもう限界よ!!」

膝から力が抜けた様に地面に膝をついた打ち止めにオリアナは手を貸そうと近づいた。

「あの時はすぐに解析されたが、また同じような物質…いや根本的には違うが反射をすり抜ける物質をまた新たに作ればいいだけのことだ」

「だったら何だ!?! もう一度計算し直せば!」  
「そんな時間は与えねえよ…」

垣根は突然、一方通行とは違う場所に飛び、その右腕には背中からでる翼と同じ光を纏っていた。一方通行にはすぐに垣根の狙いを悟った。

「止めるオオオ!!!!」

垣根の右腕は一方通行にではなく、彼のすぐ近くで膝をついて動けなくなっていた打ち止めを狙って振り下ろされた。今の打ち止めは避ける力も反撃する力もない垣根の攻撃が当たることは目に見えていた。打ち止め突然のことに目をつむり垣根の拳が自分を襲うのを覚悟したが、いつまでたっても拳は打ち止めに届かなかった。そして、拳の代わりに何か生温かいドロツとした液体が打ち止めの顔にポタツと落ちた。何が起きたか分からない打ち止めは恐る恐る目を開けた。そこにあつた光景は迫りくる垣根の姿ではなく、先ほど助けた彼女の兄が自分の前に立ち、垣根の拳に腹を貫かれゴフツ！と血を吐く姿であつた。

「えっ!?!」



## 兄弟（後書き）

今回は此処までです。

でも、もう話は頭の中で完成してるので  
すぐに続きをのせると思います。

でも、ここから先、俺は涙を止められません  
ホント尾田さんは凄い…

でもアクセラレータってこんな単純にのっちゃうのかな？

まあそんなこんなで長かったこのシリーズも、もうすぐ終わりです。  
少なくとももう10話も使いません。

ではまた後ほど

## ありがとう（前書き）

もうここですか：まあいろんな感想はあとがきに書くとして  
今回ののは難しかったです。やっぱり原作が最高すぎですよね。

自分で考えた訳でもないのに：泣けてきました。

でも私は原作をじっくり読みながらだったので感動しまくりでしたが  
今日初めてこれを読んだ人が泣くかと言うと正直ないと思います。

でも勘違いしないでください！それは原作が悪いんじゃないくて

私の表現力がないだけです！！（威張れることじゃありませんが）

とにかく原作の方をa one pieceの方ですよ。読んで下  
さい泣きますから

と、長々とすいません。そんなこんなで3話行きます

ありがとう

「ゴフッ！！」

一方通行の口からドバツと血が噴き出し、打ち止めの顔にかかった。  
しかし、打ち止めは目の前の出来ごとに全く理解出来なかった。いや、すぐに何が起こったのか見当がついたが打ち止めはそれを考えないようにしたが

「一方通行がやられたアア！！！！」

誰かが叫んだ言葉を耳にして目の前で起こった事を漸く理解した。

「ガハアアッ！！！！」

「まだ息があるみたいだな……」

一方通行を貫いた右腕引き抜き、その手先ほどと同じ『末元物質』  
で出来た光を纏い、もう一度、一方通行に振り下ろそうとした。

「させるかアア！！！！」

『速記原典』を乱暴に破り氷の槍を垣根に浴びせながらオリアナは垣根の前に出た。

「『追跡封じ』か……邪魔を……」

「これ以上はやらせないよ！！！」

垣根は光る羽根で氷の槍を弾き、今度はオリアナに攻撃をしようと腕を振ろうとした瞬間、

「伏せる！！オリアナ！！！」

後ろから聞こえた声にオリアナは反射的に伏せるとオリアナの後ろから大剣アスカロンを持った浜面と磁力を操り作った砂鉄の剣を持った御坂が垣根に斬りかかった。

「チツ！『超電磁砲』の御坂美琴に『2番隊隊長』の浜面か……」  
クセラレータ

方通行はもう手遅れだと分からねえのか？」

「クソッ！！油断した！！」

「なんてことに！！！」

~~~~~

「黄泉川さんッ！？」

鉄装の肩を借りていた黄泉川は突然鉄装の肩から離れ落ちていた警棒を拾い広場に向かって走り出した。普通なら広場の戦いに加わろうとしたと思うだろうが、隣りにいた土御門はそういった雰囲気とは全く違うものを感じ

「何をする気だ！？黄泉川アア！！！！」

走る黄泉川の頭と左腕を掴んで抵抗出来ないようにガシャン！！と地面に叩きつけた。

「はア！はア！…土御門ッ！！そうやって私を押さえとくじゃん！

「じゃなきゃ私は！！…垣根の奴を殺しちゃう！！！」
「このツ！？バカが！！！」

~~~~~

垣根の攻撃から一方通行達を守ろうと彼らの近くにいた者達も垣根  
に向かった。攻撃を受けた一方通行はドサツと打ち止めに倒れこみ、  
打ち止めも彼を受け止めた。

「はあ…はあ…ごめんなア…打ち止め…」

あまりの力のない声に打ち止めは背中に戻した手に力を込めた。  
そして、その手に夥しいほどの血がべつとりと付いていることに気  
付いた。

「はっ！速く手当を！！！」  
「…ちゃんと助けてもらえなくてよオ…」

先ほどの言葉の続きか、一方通行は打ち止めの言葉を遮るように語  
り出した。

「なっ！？何を言って！？誰か！！誰か手当を！！！」

打ち止めの言葉に答えるようにすぐに近くにいた誰かが叫んだ。

「おい！！誰か！！回復魔術を出来る奴は！！？」  
「もうみんな、力を使いきっちゃってる！まともなもんを使える奴

はいねえぞ!!」

「何でもいいからやるんだよ!! 最低限の応急処置を!……」

「無駄だア!!」

慌てる周りの会話を遮り、アクセラレータ一方通行は続ける。

「自分の命の終わりくらい分かる……内臓をやられちゃったんだ……もうもたねエ!……だから聞け……打ち止め」

「なっ!何を言ってるの!?あなたは死なないって!!核を撃つても死なないって!!あなた言っただじゃない!!」

「……ああ……当麻との一件とお前みたいな世話の焼ける妹がいなきや俺は生きようと思わなかった……」

ゆっくりと語りながら彼は思い出していく。

「ふゝこええー」「まったくこんなとこ歩くなツちゅーの」

「やべっ!目があった!」「バカ野郎!殺されるぞ!」

「まったく……よくあんな化け物が生まれたもんだ」

「……誰もそれを望まねエんだア……仕方ねエ……」

「なあ芳川……」

「ん？何？」

「無敵になったら……俺は何か変わるのか？」

「……さあね……それはあなた次第よ」

「……そうだ……おめエ……いつか芳川の奴にあつたらよろしく言つとい  
てくれ……」

何だか……死ぬと分かつたら……あんな奴でも懐かしい……」

「………！！！」

声も出さずプルプルと震える打ち止めを力を入らない腕で抱きしめ  
ながら彼は続けた。

「心残りがあるとすれば……ラストオーダー打ち止め……お前の未来を見られないこと  
だ……」

「………！？」

「きつとこれから色々つらいことが起きる……でもお前なら大丈夫だ  
……俺の妹だ……」

けど……だからって俺の人生に悔いはねエ……」

「ウソッ！！ウソだよ！！」

「はぁ……はぁ……ウソじゃねエ……」

一方通行は下を向く顔をゆっくり上げ自分の周りにいる仲間達を見渡した。

「俺が欲しかったのは…どうやら“無敵の力”でも“誰かを認めさせる力”でもなかった

……“俺が生まれてもよかったのか”…欲しかったのはその答えだ

……

もう大声も出ねエ…お前…これから俺が言うことは皆に伝えてくれ…」

---

---

---

「俺みてエなクソツたれな悪党が今まで立ち上がっていた方がおかしかったンだよ!!」

どオ考えたって場違いだろうオがよ!!ヒーローなかなれる訳がねエだろ!!」

「ヒーローなんか必要ねえだろ……」

「善人?悪人?ふざけるんじゃねえ。そんな位置に立っていないきや、誰も助けちゃいけないのか!!」

「その子を守りたかったんなら胸を張って守れよ!!今この時、守りたいって思える事を誇りに思えよ!!」

「傲慢だろうが何だろうが、お前自身が胸を張れるものを自分で選



んでみるよ!!」

かつて友に言われたことを思い出し一方通行はニヤリと笑みを浮かべ、その後、ポタポタと何滴も涙が頬を伝わった。

「当麻……みんな……それに打ち止め……」

一方通行が当麻の名前を呼ぶと同時に、聞こえないはずの当麻も一方通行の方を見た。

「今日までこんな俺を…」

「ガアア!!」 「なんだよ? その程度かア? 退屈な実験だなア……」

ただの人殺しの俺を…

『この…化物!!』

化け物の俺を……

『必ず助けるから諦めんな!!』  
『私達がついてます!! 頑張つて!!』  
『待つてろよ!! すぐ助けてやる!!』  
『そんなしけた顔してないで!! 1位らしく構えてなさい!』

!!

……愛してくれて……ありがとう!!!」

すべての願い、思い、感謝の言葉を出した後、一方通行は涙が溢れる中、口をモゴモゴと動かした後、何か満足したように力を抜き打ち止めの肩からズルツと落ち地面に倒れた。そして、彼の顔は敵を倒した時に見せる邪悪な笑顔とは明らかに違う、本物の笑顔によって安らかに眠るような顔で倒れていた。

## ありがとう（後書き）

えゝすいませんでした。

本当はすごく感動するはずなのですが、私の表現力ではこれが精一杯です。

でもアクセラレータがホントに望んでいる物はこれなんだと思います。

あと、途中で過去の思い出っぱいものも入れたんですが分かりにくくなったかもしれません、どうもすいません。

戦いを描くよりも死を文章で表現すると言うのは難しいです。

やっぱりそういうのを表現できるのはプロとか熟練者だけですねもつと過去の入れ方を分かりやすく出来たら良くなったと思いますが私ではこれくらいしか出来ません。

でも書いている時はアクセラレータの死に際の顔が浮かんできて泣きそうになりました。

是非とも「とある」の方では幸せになってもらいたいです。

### 行間三（前書き）

今回も過去編です

まあただ書いてたら予想以上に長かったの  
でただ行間にしただけです。

### 行間三

「当麻！こつちだ！」

石だらけのまだ開発されていない道を歩いていると、道から少し外れた所にある川から当麻のよく知る声が聞こえてきた。

「ここによく、母さんとお前と来たもんだ」

「へエー」

「どうだ？何か思い出すか？」

「……いや……何にも」

「そうか……」

当麻の前の男性は少し寂しそうな顔をしたが、すぐに笑顔になり当麻の方を見た。

「せっかくいろんな所に連れてきて貰ったのにゴメン」

「何気にするな……父さんもお前と色々話せてうれしい！」

笑顔になる父を見て、つられるように当麻も笑顔になった。

「ねえ父さん……俺ってどんな子だった？」

「んー？そうだなあ……今のお前と変わらない気がするが」

「……そっか」

なにか満足したように当麻は近くに適当に転がっていた石を拾って川に向かって力強く投げつけた。

「なあ当麻……」

「なに？」

「別に無理にお前になる必要はないんだぞ……お前はそのままでもいいんだ」

「……知ってるよ！……今もそうやって生きてる」

「……そうか！」

それから暫くの間二人は色々と言葉を話していた。と言っても思ひ出を語るのは父の方であり当麻はそれを聞いて、質問をする。ただそれを繰り返していた。

「そろそろ帰るか……母さんも待ってる」

「ああ……」

時間が経って日も沈みかけたころ、二人は先ほど通った道をゆっくり歩いていった。

「そう言えば、ここも懐かしいな」

「何が？」

「昔、ここの帰り道になあ……お前に誕生日プレゼントは何がいいかって尋ねたことがあるんだ……」

「へえーでっ？」

「いやーお前の欲しかった物に……父さんも母さんも困ってたなあ」

「んっ？何頼んだんだ？」

「いやーまいったよ」

「だから何頼んだんだよ！？」

「それはな………」

### 行間三（後書き）

まあこの話の意味は次の話で分かります。

さすがに次回は明日とは行かないと思うので

少しお待ちください。

そして次回は『上条当麻死す』です

えっ？ネタばれ？いや今さらネタばれもないでしょ（笑）

上条当麻死す（前書き）

題名通りです。

あと長いです。

とりあえず3.5話行きます



## 上条当麻死す

「ウソだろ！？」

アクセラレータ  
「一方通行アア！！！」

周りでは何人もの叫び声が響いたが、それらすべては打ち止めにま  
ったく届いていなかった。

アクセラレータ  
何も聞こえない、ただ目の前で倒れている一方通行だけをしか目に  
入らない打ち止めは完全に思考が停止している状態だったが、そん  
な状態であっても彼女の心は洪水のように押し寄せる。悲しみがど  
ンドン支配していった。何の意識もせず涙は溢れたすが、子供の様  
な泣き声は一切出さず、ただ顔を上に向け目はほとんど白目を向い  
ている状態で痙攣したかのようにガタガタと震えだした。

「打ち止め！！（まずい！精神が崩壊した！命が危ない！！）」

真っ先に打ち止めの異変に気付いたオリアナだったが

「デメエの番だ！！！」

駆け寄る間もないまま垣根が再び打ち止めの息の根を止めるため羽  
根を広げ近づいてきた。

「こいつの命はやらねえ！！！」

垣根と打ち止めの間に入りアスカロンを振るって垣根を吹き飛ばし  
た。

「浜面隊長！！！！」

「オリアナアア！！打ち止めを連れて行け！！」  
「分かった！！」

オリアナはすぐさま打ち止めを担いでその場から全速力で離れて行った。

「その命こそ生きる一方通行の“意思”だ！！<sup>アクセラレータ</sup>一方通行に代わって俺達が必ず守りぬく！！死なせたら『上条勢力』の恥だと思え！！」

「「「「ウオオオオオ！！！！」」」」

~~~~~

「やれやれ、そんなに邪魔されたら…余計に殺したくなっちまうじゃねエか…」

垣根が不気味な笑みを浮かべていると

「オイッ垣根！！後ろだアア！！！！」
「何！？」

垣根が振り向くと右手を振りかぶり、目に涙を溜めながら垣根を睨みつける当麻がまじかに迫り、射程に入ると共に右手を垣根に叩きこんだ。

「グアアアアアアアアアアアア！！！！！！」

垣根の体はどんな力を与えればそうなるのかと疑うほど地面に叩きつけられ、垣根を中心に隕石が落ちた様な跡が出来た。

「こッ…の…化け物オオオ!!!」

垣根は『ダークマター未元物質』の羽根を一点に固め当麻に放ったが当麻がそれを右手で受け止めて消し去った。

「なっ!?!」

「……………」

当麻は無言のままもう一度右手を振るい垣根に叩きつけるた。

「グアアアア!!!クソがアアア!!!」

ボゴゴオオン!と垣根は当麻の力によって地面にめり込むような状態で気を失った。

垣根に一撃を喰らわせた後、当麻は再び振り返り後ろにいる『神の右席』と『超能力者』達と向かい合い。

「ウオオオオオオオオオ!!!」

当麻は両手の拳を握りしめて天を仰ぎながら叫び出した。

「当麻の奴…キレてる!!!」

「やべえぞ!!!みんな逃げろオオオ!!!」

慌ててその場から離れる御坂と浜面に少し遅れて他の者達も逃げ始めた。

当麻の右腕から先ほど以上大量の黒い塊吹き出し当麻の体を包んで

いった。

「何なんだよ！？浜面！！！」

「あれに近づいちゃいけねえ！！！」

当麻を包む黒い塊は当麻の全身を包んでからもその大きくを増していき、僅か数秒で全長10mほど球体になった。

「当麻はあれでフィアンマを倒したんだ」

~~~~~

「まずいわね……」

「ああ」

「ちよつと先輩方……なんですか？あれ……」

「話す暇があつたら逃げた方がいいわよ」

「あれが出た以上……我々に出来る事はない」

アックア、ヴェントが退くのを見てテッラも訳が分からないまま当麻から距離を取った。

~~~~~

「あれがアックアの言ってたやつか……全軍退却だ！！！」

土御門が命令を出したのはつい先ほどのことだったが、広場で前列で戦っていた兵士達の中には得体の知れない物体の登場で弱腰になり逃げだす者もいた。

「黄泉川さん！！しっかりして下さい！！」

ぐったりとうつ伏せに倒れる黄泉川に鉄装が声をかけたが黄泉川は返事をしなかった。

「黄泉川っ！！ちっ！！おいお前！！黄泉川を連れて下がれ！！」

「はっはい！！」

明らかに年下の土御門に怒鳴なれて戸惑いながらも黄泉川を背負い、後退した

「さて…これを使い切れるかどうかで勝敗が決まるな…」

~~~~~

当麻を包んだ黒い球体は巨大化が止まると、突然グニャグニャと粘土の様に形を変え始めた。

「一体あれは何なんだ！？」

「形が変わるぞ！！」

『全軍に通達！！』『神の右席』と『超能力者』以外の者は全員退却

「撤退命令!？」

[illegible]

「ドゴン?」

G Y Y Y Y Y Y Y ! ! G A A A A A A A A A ! ! ! !

!

[illegible]

「何なんですか？…先輩、あれ？」

「あれが上条当麻の最強の戦闘形態：イマジンプレイカー 幻想殺し：Ver バージョン 『漆黒の竜王』ドラ」

「世界中の魔術師と超能力者を集めても勝つことの出来ない絶対無敵の存在よ…」

少し離れた所からドラゴンの誕生を見ていた『神の右席』は何もせず成り行きを見守っていた。

暫くするとドラゴンが一步、また一步と前に進み始めた。

「たっ大砲の準備！！」「進行を阻止しろオオ！！」

後ろで怯えていた兵士たちは漸く自分のやるべきことに気付き、可能な大砲すべてをドラゴンに向けた。

「撃てエエ！！！」

合図と同時にドカンッ！ドカンッ！と一斉にドラゴンに向かって大砲が放たれた。

巨大なドラゴンを当てること決して難しくはなく、砲弾は一発も外れずドラゴンに当たった。いや、正確に言つと当たるはずだった。しかし砲弾はドラゴンに当たることなく、すべて跡形もなく消えてなくなった。

「なっ！？」

動きを見せなかったドラゴンは突然翼をバサツと広げ、爆風のような風を辺り一面に広げた。次にしたことは実に単純であった、ただ

単に右手を振り上げて地面を掃うように叩きつけた。誰もが凄まじい衝撃が起これると思ったが、周りの兵士達に巨大な腕を振ることによって起これる風圧だけだった。しかし、そんな風圧も忘れるような事が目の前で起きていた。先ほどドラゴンが手を叩きつけた地面は綺麗になくなってた。綺麗とは言葉の通りである、地面には亀裂やヒビといったモノは一切なく、まるでアイスクリームをスプーンですくったかのようにドラゴンの手の跡がくつきりと残っていた。そして、ドラゴンは少し離れた所にいる魔術師や兵士達目がけ、ズシンッ！ズシンッ！と足音を立て歩き出した。

「まずいぞ！！奴に触れるなアア！！」「消えてなくなるぞ！！！」

見かけは鈍く動いているように見えるが、その一歩は人間よりも大きいのでドラゴンはあつという間に逃げる兵に追いつき、その手を叩きつけようとした。しかし、突然ドラゴンの上にドラゴンと同じ位の大きさの水の球体が現れ、ドラゴンに向かって落ちた。

「なっ何だ！？」

「早く逃げる！！」

「アックア様！！」

「この程度で抑えられるものではない！！早く撤退しろ！！」

何十トンもの水で抑えつられ、普通なら身動き一つできないはずだが、ドラゴンは水の球体を乗せながらゆっくりと立ち上がり

「GGGGYAAAAA！！！！」

腹の底まで響きそうな雄叫びを上げると水は突然空間移動でもしたかのようにシュン！と消えてなくなった。



「やはりダメか…」

目の前にビルのように聳えるドラゴンにメイスを向けながら呟くと

「助太刀するぞ…！」

ドラゴンの横から超能力者達が襲いかかった。

「行くぞ！すごいパンチ…！」

「消し飛ばエエ…！」

「燃えつきろ…！」

『原子崩し』のビーム、『発火能力』の何千度にも及ぶ炎、『最高の原石』の攻撃、どれも普通の人間が喰らえばひとたまりもないものだが、その全てがドラゴンの体に触れた途端消えてしまった。

「なっ…!?」

「バカな…！」

「足元を狙いな…！」

立ち並ぶ超能力者達を飛び越えながら『前方のヴェント』がハンマーを振り、ドラゴンの立つ地面に穴をあけた。ドラゴンは片足だけ落とし穴にはまったようになりバランスを崩し片足をついた。

「コイツには魔術だろうが超能力だろうが何も通じない…！出来ることは一度に消しきれないくらいのでかい攻撃をするか、奴が「消滅」の力を発揮していない足元を狙って動きを鈍らせる！その二つしか選択肢はない…！」

片足をついたドラゴンは何事もなかったかのように立ち上がり、目



暗く奇妙な部屋の中を中央にある赤い液体に満たされる円筒目指し  
上条当麻はゆつくりと歩いていった。

広大なその部屋の四方の壁は機械に埋め尽くされ、そこから伸びる  
数万ものコードやチューブが床を這い中央にある円筒に繋がっていた。

「久しいな…上条当麻」

円筒の中で逆さま浮かび、男にも女にも見え、大人にも子供にも見え、聖人にも囚人にも見える人間が最初に声をかけた。

「ああ…」

「そんなに簡単に入られても困るのだから」

「だったら結界なり、バリアなり張れ…」

「君にはそんな物なんの意味もないだろう？」

「少しは入りずらくなる…」

当麻は円筒の前に来るとそのままコードはチューブが這う床に座り込んだ。

「なんの用かね？」

「ちよつとした挨拶周り…かな…」

「挨拶？なんのだね？」

「…無駄な会話はよそうぜ…お前ほどの男が知らんわけじゃないだろう？俺の右手のことだ」

「そろそろ君の手に負えなくなってきたか？…」

「ああ…そろそろ切り離そうかと思ってる」

「では誰かにそれを？」

「さあな…なんにせよ…もうこいつは「人間」に扱うのは無理だ」

「ならば君がその体を変えればいい…「聖人」…いや「天使」ぐら  
いになればあと数年はその右手の所有者でいられる」

「そう…それを聞きに来たんだ…この手がなくなれば、もうお前  
と話す機会もないだろう…だから聞いておきたいんだ…風斬やロシ  
アでの「天使」…それに神裂やアツクアの「聖人」、

なんでああいう特殊体質の奴らが生まれるんだ？」

「君は何も知らされていないのか？」

「エイワスのことか？ダメだ…どうやら、もう俺には興味がないら  
しい」

「そうか」

アレイスターはフツと笑みをもらした。

「こっちはわざわざ、お前の計画に必要なこいつのことを教えたん  
だ…その分の代金くらい払ってもらうぜ」

「フツ…まあいい…しかし、それについて語るとなると時間がか  
かるな」

「別にいいさ…」

「それに半分以上は憶測も入っている」

「エイワスから聞けなかったものすべてをお前から聞けるとは思っ  
てないさ」

「そうだな…ではまず昔の話からしよう…遙か昔のことだ…  
…」

広場ではドラゴンがその無敵の力をふるいローマ正教と学園都市を  
防戦一方に送り込んでいた。

「くそっ！逃げろ！！」「撤退だ！撤退！！」

勝てないと分かり逃げ出す兵にドラゴンがまたその腕をぶつけるた  
め振り上げたが、  
その腕は振り下ろされることなく、手を上げたままドラゴンは動か  
なくなつた。

「おい！どうしたんだ！？」「分らん…急に動きが…」

ドラゴンは石像のように動かなくなつたかと思うと突然振り上げた  
腕にピキッと亀裂が走り、やがてそれが体中を巡っていきボロボロ  
と崩れだした。

「崩れるぞ！！」「離れるオオ！！」

ほんの数秒後にはドラゴンの体はバラバラに砕け、ゴロゴロと岩の  
ように転がっていたドラゴンの黒い体の一部はまるで砂のように消  
え去つた。

「時間切れのようだな！！」

突然土御門が声を上げ一体誰に向かって言っているのか、周りの兵  
達は理解できなかったが

すぐに土御門が喋りかけてた人物、上条当麻の姿がドラゴンの消え  
た場所から表れた。

当麻は肩で息をしながら、先ほどよりボロボロになつた体を必死に

倒れまいと耐えていた。

「やはり人間に扱える物ではないらしいな」

「はぁ…はぁ……………」

「持ち堪えられるか、賭けだったが…これで終わりだ!!」

「はぁ…はぁ……………だよ」

「なに？」

「俺じゃねえんだよ…アレイスターが待っている奴はな…」

当麻は目の前に何千何百という敵を目の前にしながらも顔に薄らと笑みを浮かべ語りだす。

「どれだけお前達が隠そうと、偽ろうといずれ誰もが知ることになるんだ…」

お前らそれを恐れているんだろ？アレイスターがいずれ証明する…

この世界の真実に」

「上条…貴様!!」

今まで以上に険しい顔をし上条当麻を睨みつけるが、当麻の顔は変わらない。

「さて…最後の仕事だ」

そついうと当麻の右腕は今までの黒い物と違う、七色の光が当麻の右腕を包んだ。

「何をする気だ!!上条当麻!!」

イマジンブレイカー

「俺は…残りの力の全てを使って右手を封印する」

「なっ!?!」

「こんなことをしても無駄なことは分かってる…だが下手に誰かに

やるわけにはいかねエ…この右腕は…いずれその時が来るまで眠つてもらう…アレイスターの『神殺し』を行うまでな」

「なっ！？貴様アア！！」

「きつと、その時に現れるだろう…この世界に向かい合い、この世界のすべて背負って戦う奴がな…どれだけお前らが俺達を滅ぼそうと、俺達の“火”が消えることはねえんだよ」

~~~~~

（ここまでだな…）

このまま何もせず、ただ黙って死のう。そう思って瞳を閉じようとする

「「「当麻アア！！」」」

後ろから大勢の当麻を呼ぶ声が聞こえた。思わず振り向くとその先にあつたのは何千人もの涙を浮かべる仲間達の顔だった。仲間を見渡した後、当麻は倒れる一方通行に視線を移した。

アクセラレータ

（一方通行…ごめんな、ちゃんと助けてやれなくて…けど安心しろ、俺もすぐ行く）

助けられなかった友を見つめた後、当麻のもとに行こうとする仲間を抑える浜面を見つめた。

（浜面…お前は認めないだろうがお前には俺や一方通行以上にリ―

ダーの器がある…みんなをしつかりまとめてくれ)

次に当麻が見つめたのは泣きながらこちらに向かって何か叫ぶ御坂であつた。

(御坂…お前とは何度も喧嘩した思い出ばつのだが、色々と力になつてくれた…ありがとう…感謝してる)

次に御坂、浜面から少し離れたところで目に涙を溜める神裂を見つめた。

(神裂…これからみんなの心はバラバラになつちまうかもしれねえ…そんな時こそお前の力がある…頼むぞ、みんなを繋ぎ止めてくれ)

次に煙草を吸いながら黙つてこちらを見つめるステイルを見つめた。

(ステイル…お前とはいろいろあつたが、インデックスのことだつたらお前はこの世界の誰よりも信頼できる…インデックスのことを頼んだぞ)

次にステイルの隣で涙を耐えるアニエーゼを見つめた。

(アニエーゼ…色々迷惑をかけたが最後までついてきてくれて、ありがとう…お前らアニエーゼ部隊と騒いだりすんのは結構楽しかったぜ)

次に気を失い仲間に加がれているシェリーを見つめた。

(シェリー…お前はすぐに熱くなるのがお前の悪いところだ。でも、それはお前が誰よりも優しい証拠だ…きつとその優しさがみんなの

為に必要な時が来る、だからあんまり無茶すんなよ)

次はこの場には見えない眼鏡の少女を思い出した。

(風斬：分かつてる思うがお前には途轍もない大きな力がある、けどそれを怖がる必要はねえ…昔、インデックスを救った時のあの優しさと勇気があれば大丈夫だ…自分に自信を持て)

次に仲間たちから少し離れた所にいる金髪の男を見つめた。

(オツレルス：お前みたいな有能な奴がこんな無能なリーダーの下で働いて色々大変だっただろう…ありがとう、最後まで付き合ってくれて)

最後にここからは見えないが一人のシスターを思い出し、心のなかでゆっくりと語った。

(インデックス：結局俺は最後までお前との思い出を取り戻すことが出来なかったよ…でもこれだけは言える…お前との出会いがこの結果を招いたとしても、俺は後悔なんてしてない…お前と出会ったからこそ、俺はこの魔術の世界を知ることが出来たんだ…お前と出会ったから、こんなにたくさんの仲間が出来たんだ…ありがとう)

そして、当麻は仲間たちすべてを見渡した。

(ありがとう…みんな…みんなは俺に全てをくれた…でも、ゴメン…まだやり残したことがあるって言うのに…俺はそれをみんなに押しつけちまうらしい…)

すべての感謝と後悔を心に刻みながら、当麻は走馬灯の様に家族の

ことを思い出した。

「いやーお前の欲しがった物に…父さんも母さんも困ってなあ〜」

「んッ？何頼んだんだ？」

「いや〜まいったよ」

「だから何頼んだんだよ！？」

「それはな……………兄弟だ」

「ええ！？なんでそんなもんを？」

「いや〜ほらっお前にはあんまり友達がいなかったから…兄弟がいれば寂しくないって」

残された僅かな時間の中で思い出した家族の思い出はそれだけだったが、当麻は満足した様に笑顔になった。

（父さん、母さん…見てくれよ…俺の願いは、叶った……みんな俺の兄弟姉妹だ…）

当麻は誰にも聞こえないくらい小さな声でポツリ呟く。

「まったく…俺は幸せ者だ…」

上条当麻死す（後書き）

いやゝ長かった。一方通行よりも長くなるなんて途中できろつかと思いましたが、一気に行きました。

でもこれでもかなりはぶきました。もし戦いをしっかり書いたらどうなっていたか分かりません。

また見直して書き直すと思います。

それから当麻が土御門に言ったことは別に複線張ってませんから変な勘違いしないで下さいね。

あーそれと黒い竜王の姿は『遊戯王』のレットアイズブラックドラゴンで

イメージしてください。竜の姿を説明するのは長くなりそうだったので

省きました。

とりあえず今回はこの辺で…

戦争の終わり（前書き）

もうあと数話で終わります。

何度も言いますがそんな皆さんがビックリするような
終わり方はしませんから、それは御両所下さい。

戦争はここで終わりますが、あと2、3話続きます。
では36話いきます

戦争の終わり

依然、立ち続ける上条当麻を見て、兵士達は何かをする前に攻撃をしようと残った大砲を構えたが

「止める!!」

アックアがメイスを振った衝撃で起こった風がそれを妨げた。

「アックア様!？」

「もう、その必要はない」

メイスを構えたまま当麻を見つめるアックアの横をヴェントが一步前に出てポツリと呟いた。

「まったく…幸せそうな顔で死にやがって…」

ヴェントの言葉に兵達はもう一度、笑って目を瞑る当麻を見た。

「しっ死んでる!？」「立ったまま!？」

~~~~~

港に泊まっている船に向かう群衆に混ざり、オリアナは打ち止めを右手に抱えながら走る。

「しっかりしなさい！打ち止め！！あんたはこれから一方通行と当麻の分も…強く生きなきゃいけないのよ！！」

「オリアナ！！こつちだ！！打ち止めを乗せろ！！！！」

近くの船の船員の指示に従って船に乗り込もうとすると、突然上から無数の光の羽が降り注いだ。

「なっ何だ！？」

「見る！！」

羽が来た方を見ると、空に体中がボロボロをした垣根帝督が宙に浮いていた。

「たくっ…最高にムカついたぜ…絶対にそいつは殺す！！…」

「なっ！？」

「垣根だ！！」

「やろう！！くたばってなかったのか！？」

ボロボロの垣根はオリアナの前に降りると、冷たく言い放った。

「おい『追跡封じ』そいつを置いてけ…そうすりゃお前は見逃してやるよ…」

「できない相談ね…」

オリアナは打ち止めを抱える手に力を込めた。

「私はこの子を…命に代えても守る…そう依頼主と契約したのよ！！」

「なら頼まねえよ…」

垣根がバサツと羽を広げ、オリアナは左手で『速記原典』を構えたが、

しかし、それを庇うように数人の隊長達がオリアナの前に出てきた。

「あなた達…」

「速く行け…オリアナ」

アスカロンを肩に担ぎながら浜面が垣根から視線を外さずに言った。

「その子は絶対に死なせてはいけません！」

鞘から七天七刀を抜きながら神裂が言った。

「当麻が信じ、一方通行が守った命よ…私達が次に時代に送ってやる義務がある！」

砂鉄で剣を作りながら御坂が言った。彼らだけでないステイル、アニエーゼ、オツレルスも武器を構え垣根に向けていた。

辛いはずはなかった、今すぐにも泣き崩れ動けなくなってもおかしくなかったが、皆の目には悲しみの色は残っていない、

それぞれの覚悟と信念を持って後ろの少女を守るため、戦うことを決意したのだった。

「お前らともあろう者が随分大層なことじゃねえか…上条勢力!!」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「垣根に続けエエ!!」「一人とたりと逃がすなアア!!」

先ほどまで静まり返っていた広場は垣根の攻撃に乘せられ一気に戦闘の空気へと変わってしまった。

「黄泉川さん!しっかり!!」

「あ...あ?...鉄装?」

「あ!よかった!!」

「どうなった?...戦闘は?」

「それが...落ち着いたかと思ったら、また!」

「っ!?!上条当麻は!?!」

「...死にました」

黄泉川は戦場を見つめ、戦場は上条当麻、一方通行が生きていた頃と何一つ変わらないことに疑問をもった。

(目的は達したというのに...士気が下がらない!?)

黄泉川と鉄装が困惑していると、黄泉川達の横を怪我人に肩を貸しながら後退する兵士が横切った。

「しっかりしろ!もうすぐ手当が...」

「なにをしている!?!」

「いや!けが人を!!」

「捨て置けエ!今は奴らを打ち取るのが先決だ!!」

肩を貸していた男は上司に言われるがまま怪我人を見捨て戦場へと戻って行った。

「ひどい...こんなの」

「もうこれは正義でも何でもないじゃん...」

「だめですよ...このままじゃ...!!」

鉄装は黄泉川を置いて、突然戦場へと駆け出した。

「なっ！？待つじゃん！！鉄装！！」

~~~~~

「逃がすなアア！！」「一人でも多く打ち取れエエ」

港には垣根に続くように超能力者や魔術師達が押し寄せていた。

「ホラどうしたアア！？かかってきやがれエエ！！」

垣根の攻撃が次々と襲いかかる中、アックアがメイスを振り衝撃波を生み出しながら加勢に現れた。

「くそっ！」

「厄介な奴が！！」

アックアはちょうど浜面とステイルの前に現れると語りかけた。

「どうやら、お前達を皆殺しにするしか…この戦闘を止めるすべがないようであるな」

「「チイ！！」」

隊長達は目の前に現れる『神の右席』や『超能力者』を相手に、その周りの一般兵は一般兵同士に戦闘を繰り広げていると

「そこまでだアア……！！！！」

急に戦場の先頭で戦う垣根の前に現れた女『警備員』が叫んだ。

「なんだ？『警備員』？」

「あいつは……黄泉川の所の……」

突然現れた女の声に浜面とステイル、さらに辺りで戦う兵達も戦うのを止めた。

「もう止めましょう！！これ以上戦うのは！！命がもつたいない！！」（兵士一人一人に帰りを待つ家族がいるのに！！！！）

鉄装叫ぶ場所から離れた所にいる黄泉川は啞然としながら呟いた。

「あのバカ何を！？」

彼女の様なまともに人と戦えない人物がこのような戦場に現れること事態おかしい、

そんなこと黄泉川だけでなく当の本人も分かっていた。

しかし、それでも彼女は続けた。

「もう目的は果たしたのに……！！！！戦意のない敵を追いかけ……！！止められる戦いに欲をかい……！！！！今、手当をすれば助かる兵士を見捨てて……！！！！」

その上にまだ犠牲者を増やすなんて、今から倒れていく兵士達は……！！！！まるでバカみたいじゃないですか……！！！！」

「……………ああ？なんなんだデメエは！？」

垣根はイラつきながらそう言うと、その手に『未元物質』を纏った。

「まずい！！逃げる鉄装！！」

遠くから黄泉川の声が聞こえたが鉄装はその場から動くことができなかった。

「数秒無駄にした…まったく、くだらねえ事で俺の手を煩わせるな！！！！」

垣根はめんどくさそうに『未元物質』纏った右手を目の前で叫んだ女目がけ振り下ろした。

「うああああ！！！！！！（ダメだ！死ぬ！！でも私は言ったんだ！！言いたいことを！！くいはない！！！！）」

最早逃げられないと悟った鉄装は覚悟を決め、垣根の攻撃を涙と叫び声を出しながら見ていたが、垣根の攻撃はガキンツと音を立て、何かに遮られるように止まった。何が起こった分らない鉄装はただ自分の目の前の攻撃を止めた何かを持っている人物を見つめた。その人物は剣を持っていた、そして老人であった、そして女であった、そして王冠を冠っていた。

「よくやったぞ…学園都市の女戦士…今お前が止めた『勇気ある数秒』は良くか悪くか  
世界の運命を大きく変えた！！」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「ッ!？」

鉄装と垣根の間に割り込んだ人物の正体をすぐに見抜いたヴェントはすぐにハンマーを構えたが

「動くな…ヴェント」

突然、後ろから首に剣をあてられた。ヴェントはゆっくり振り返り、後ろにいた人物の名前を言う。

「『第2王女』 キャーリサ」

~~~~~

ヴェントとは反対の位置にいたテッラもヴェントのように攻撃しようとしたが

「お前も…何もせぬ方が身のためなるぞ…」

後ろから何やらおかしいな日本語が聞こえてきた。テッラは振り向かずに喋り出す。

「お…っと…これはこれはローラ…スチュアート…表舞台に出てくるなんて珍しい」

~~~~~

二人の『神の右席』が動きを封じられたのを確認していると

「貴様も何もするな、ウィリアム…いやアックア」

後ろから、聞き慣れた男の声が聞こえてきた。

ナイトリーダー
「騎士団長…」

~~~~~

「なっ！？どうして!?!」「イギリスの女王…エリザード!?!」

名前を呼ばれたエリザードは剣で受け止めていた垣根の攻撃を払い、喋り出した。

「この戦争を…終わらせに来た!」

突然のイギリスの介入に周りの兵士達が戸惑っていると

「女王陛下!?!」

エリザードから少し離れた所にいた神裂が近づいてきた。

「神裂…これ以上応戦するな、大人しく手を引け…」

~~~~~

「アックア様!!どちらへ!？」

しばらく黙ってことの成行きを見守っているアックアであったが、急に戦場に背を向け歩き出した。

「手を引いてくれるか？」

騎士団長の言葉にアックアは顔も見ずに答える。

「上条当麻と戦うことには承諾したが…イギリス清教と戦うことには承諾はしていないのである」

「……………すまない」

~~~~~

「これ以上欲しても、双方被害は無益に拡大する一方だ…!!!!まだ暴れたりない奴がいるなら…」

そう言うのと体を鎧で固めた何百もの騎士やキャーリサ、ローラース  
チュアート、騎士団長がエリザードの周りを固めた。

「来い！！我々が相手になってやる！！」

エリザードの言葉に周りがドヨッ！とたじろんだ。

暫く続いた沈黙によって戦う意思がないのを悟ったエリザードはそ  
のまま続けた。

「全員：この場は私の顔を立てて貰う…」

ここで漸く一区切りがついたのか、辺りでは怪我人に手を貸すもの  
や緊張が解け座り込む者が次々に出てきたが、エリザードはその緊  
張を解くことなく続けた。

「上条当麻、一方通行の弔いは我々に任せて貰う…戦いの映像は世  
界に発信されていたんだ…！！これ以上そいつらの死を晒すような  
マネはさせない！！」

「なっ何を！」

不意に誰かがエリザードの提案にケチをつけた。

「二人の死体を晒してこそ！我々の勝利が…！！」

「構わん！！」

急に土御門が会話に割って入った。

「土御門様！！」

「エリザードお前なら…いい…責任は俺が取る…！！」

「…すまん、助かる」

エリザードは頭を下げながら礼を述べ、  
それを見た後土御門はすべての広場に届くように叫んだ。

「負傷者の手当てをしろ！！……………戦争は終わりだ！！」

「かくして…第三次世界大戦以来、最大の戦争はここに幕を閉じ  
歴史に深く刻まれる。」



## 戦争の終わり（後書き）

展開が早い感じもありますが、下手に続けもなのでいつもの通り省いたところもあります。

個人的にはエリザードとかキャラクターと言った面々をかつこ良い登場が出来て

満足しています。

あと誰にしようか迷いましたが、あの名言は鉄装に言わせることにしました。

あれだけ登場が少なかったのに、なんだか全部持っていかれた気もしますが、

でも、ぴったりの役だと思いました。

ではまたいろいろ書きなおすと思いますが

今日はこの辺で

## 残された者達（前書き）

どうも久しぶりです。

今回はいろいろなキャラを出しました。

まあ細かいことはあとがきにのせますので、  
とりあえず37話行きます。

## 残された者達

第七学区にある「とある学校」これといった強い能力者もすぐ頭の学生もいない普通の学校の廊下を吹寄制理は歩いていていた。戦いが終わり2週間も経つが学校は未だに始らず、学園都市に存在するすべての学校は仕事におわれた教師以外、生徒などは誰一人としていなかった。学生達の騒ぎ声がない、不気味だがどこか寂しさがある廊下を彼女は黙々と歩き続けた。目指す場所はかつてある人物と共に学んだ教室だ。教室のドアの前についた吹寄は昔のように教室のドアを開けて中に入った。中にはやはり誰もいなく、空の席が並んでいるだけだった。教室に入ると吹寄は教室の窓側の列の後ろから2番目の机の前に来ると、先ほど何気なく取った道に咲いていた花を机の上に置いた。

「まったく…貴様という奴は本当に人騒がせな奴だ…」

誰もいない机に向かって吹寄は少し笑みをもらしながら愚痴を零した。

暫く、昔の事を思い出し感傷にひたっていると、後ろからドアを開ける音が聞こえた。

ビクッ！と驚き、後ろ振り向くとドアの所に長い黒髪の少女が立っていた。

「姫神…さん？」

「吹寄さん！？」

「どうしてここに！？」

「吹寄さんこそ…」

「姫ちゃん！どうしたん！？」

姫神の後ろから下手な関西弁を口にする男がヒョコツと顔を出した。

「青髪!!」

「吹寄!! なんでお前が!？」

せつかく懐かしい友達との再開だったがあまりにも突然すぎて3人は暫く無言でいたが、姫神が吹寄の後ろにある机に一本に花が置いてあるのを見ると、フツと笑いながら言った。

「ああ…私達と同じね」

「えっ!？」

「なんや…吹寄もか」

吹寄がふと二人の手に目をやると、姫神は何かの紙で包んだ3本の花を青髪は吹寄のように一本の花を持っていた。

「家におつてもなんか落ち着かんぞ」

「私も、何となくここに…そしたら校門で青髪君に」  
「……そう」

姫神と青髪は机の前に来ると持っていた花を置いた。

「本当は…ちゃんとお墓参りもしたいんだけど…」

「死体は仲間が持ってたみたいやからな」どこにあるやら…」  
「まっ…場所が分かったら行ってやればいいわよ…」

また、暫くの間沈黙が続き、耐えられなくなった吹寄が口を開いた。

「ホントッ! あいつは何をやってたんだか…」

「昔っから好き勝手やってたからな」学校卒業するやいなや、学園都市から消えるわ…しまいにやとんでもない大組織のリーダーになるわ…」

「ホントに…ただでさえ遠くに行ったというのに…もっと遠い所に行ってしまうなんて…貴様という奴はどれだけ変われば気が済むんだ？」

「……きつと、違う」

姫神は愚痴を述べる二人の間に割って入った。二人はえっ！？という顔をした。

「彼は…何も変わってなんていない…昔と変わらず。ただ誰かの笑顔を守るために…いつも無茶をする」

「フツ…確かに…自分のことは手を抜くくせに」

「いざとなったら…相手が誰だろうとお構いなし…」

そこまで言うところ人は突然プツ！と吹き出してしまった。暫く笑っていた3人はその後「とある友人」の思い出を語り合った。

~~~~~

2、3時間ほど話していただろうか、3人は一先ず職員室に向かうことにした。

「小萌先生と会うのも久しぶりやな」

「先生…大丈夫かな…」

「上条のことをすごく可愛がっていたからね…」

昔の担任との再会に不安と楽しみな気持ちを持ちつつ、廊下を歩いていると

「あれゝ君たちは…小萌先生なのこの」

後ろから声をかけた人物は後ろに数人の「警備員」を率いて、自身も「警備員」の装備を固める、彼らもよく知る人物であった。

「『黄泉川先生！！』」

黄泉川は、よっ！と右手を上げかるく挨拶をした。

「小萌先生に会いに来たじゃん？」

「はっはい！」

「あの先生は？」

「黄泉川先生ゝ！！」

また後ろから今度はよく知る担任の声が聞こえた。
その後続くように3人の声が聞こえたのか他の先生達も廊下に出
てきた。

「『小萌先生！！』」

未だにその姿を変えない担任に安心と違和感を抱きながら、3人は
小萌先生の名前を呼んだ。

「わゝ吹寄ちゃんに姫神ちゃんに青髪ちゃん！！久しぶりですゝ」
「こっちも久しぶりじゃん…小萌先生」

「黄泉川先生！！もう、いつ帰って来てくれるかと思いましたよ」
「ごめんじゃん…いろいろ仕事が片付かなくて…」

「こっちですよー！！最近はこちら辺も物騒になって、昼間でもスキルアウトがうるつくようになってるんですよ！！だから早く先生に帰って来てもらわないと…」

「それがそうもいかないじゃん…上条当麻が死んで変わったのはここだけじゃないじゃん…今じゃ学園都市のあちこちで領土争いが始まって「警備員」は24時間警備体制…」

今だって仕事の合間に来てるじゃん」

黄泉川は疲れた顔をしながら説明していると、

「黄泉川！！」

先生達の人混みをかき分け黄泉川もよく知る人物が叫んだ。

「誰？」

「芳川先生よ…私たちが卒業する年にこの学校に来た…」

「姬さんは文系だからあまり面識ないやろうけど…って！？」

芳川は突然走りだすと、

「どのツラさげて帰ってきたアアア！！！」

右手を振りかぶり勢いをつけて拳を黄泉川に叩きつけた。

近くにいた小萌先生はキャア！と悲鳴をあげ、他の先生達も啞然とし何もできなかった。

「黄泉川隊長！！」

「いいじゃん！！…知り合いじゃん…」

持っていた銃を構えようとしていた部下を制し、殴られた頬をすりながら芳川と向かい合った。芳川は息を荒げ、目に涙を溜めながら黄泉川の胸倉をつかんだ。

「あなた…あの戦争の現場にいて…!!あの子達の目の前にいて…!!…!!どうして一方通行を見殺しにしたの!？」

もう一度、殴りかかろうとする芳川を漸く我に返った教師達が後ろから抑えた込んだ。

しかし、それでも尚黄泉川に殴りかかろうする芳川に小萌先生が両手を広げながら間に入ってそれを阻止した。

「落ち着いて下さい!!芳川先生!!！」

「はあ…はあ…小萌先生…」

「手の届く距離で二人を救えなかった黄泉川先生が!!…一番辛いに決まってるじゃないですか!!！」

このまま殴れば小萌を殴ることになると思った芳川は拳の力を抜いたが、それでも黄泉川を睨むことは止めなかった。

「はあ…はあ…違うわ!!…一番辛いのは打ち止めよ!!！」

「……………!？」

「どれだけあの子が一方通行のことを慕ってたか!!！」

「芳川先生…」

「あなただって悔しくないの!?!これじゃ上条君だって報われやしない!!！」

「ッ!!！」

「じゃ先生そろそろ…」

「ふあっ…ふあゝい」

「もう…そんな泣かないで下さいよ…」

「うゝ手のかかった子ほどいなくなれば寂しいのですよ」

「ははっ…ホント…先生が担任でいてくれて、良かったです…」

「……………」

「あっ！小萌先生…！」

小萌先生は目に涙を溜め、走り出しどこかへ行ってしまった。
暫し沈黙が続いくなか、不意に吹寄が黄泉川に尋ねた。

「黄泉川先生…これから学園都市はどうなるんですか？」

「もうこれは学園都市だけの問題じゃないじゃん…今、世界中で上条当麻が守っていた所が襲われだしてるじゃん」

黄泉川の言葉にその場にいた者達すべてが息をのんだ。ただ一人、
芳川相変わらず息を荒げたままだったが、先ほどより落ちついた様子で語りだした。

「……………ここから先…打ち止めが何になるうと……………私はあの子の味方よ…あの子の気持ちを考えると胸が張り裂けそうよ…」

芳川はゆつくり廊下の窓のもとに行き、外を見つめながら呟いた。

「打ち止め…負けるんじゃないわよ…」

~~~~~

イギリス本島から数十キロ離れた、数十キロ？ほどの面積しかない小さな島。

ただの草原だけが広がる島に何十万もの人達が押し寄せ、草原を埋め尽くしていた。

勿論、すべての人が島に入れる訳もなく、入れなかった者達は皆島の周りをぐるり囲む、船の上で島に入れるのを待っていた。訪れる者達はみなどこかを怪我をしており、中にはまだ手当を受けていない者もいたがそれでも彼らは待ち続ける。島の中央にある2つの石で出来た墓を訪れるために。

「悪いなオルソラ…お前も辛いはずなのに」

「いいえ…私くしは戦争でお役に立てませんでした。これくらいは当然でございます」

怪我人の治療のために島とイギリス本土を何度も行き来するオルソラに浜面が声をかける。

「いい加減、あなた様も休んだらどうですか？戻って来てからというものともに休んでいらつしやらないでしょう？」

「…ああ…だが辛いのはみんな同じだ…それにとっても休める気分じ

やない…心が…落ち着かない」

「そうでございますか…取りあえず薬が無くなったのでイギリスに行つてまいります…」

「ああ…そうだ、本土に行つたら五和の奴も見てやつてくれ…仲間からの手当てもまだ受けてないらしい」

「分かりました」

では、と頭を下げオルソラは島を往復する船へと向かった。

浜面は再び島に溢れかえる怪我人を見てため息をついた。一番深刻なことは怪我をしていることなく、みなから全く生氣を感じないことだった。

「まったく…どうすればいいのか…」

「あんた休まなくていいの？」

悩む浜面に同じ隊長の御坂が話しかけた。彼女もまた頭や腕、足に包帯を巻いていた。

「お前の方こそ休んでなくていいのか？」

「無理よ…なんだか…落ち着かない」

「……俺もだ」

たつたそれだけの会話をした後、二人は黙つたまま島を埋め尽くす怪我人達に目をやった。すると

「お前ら、いい加減休んだらどうだ？」

浜面は本日3回目、御坂は2回目となる同じ台詞が聞こえた。

「女王陛下！」

騎士団長と数名の騎士達を連れて、エリザードは浜面達に近づいてきた。

「本当にありがとうございました…なんと礼を言ったらいいか」

「つまらんことを言うな！…彼が我々の恩人であることに変わりはない…何より世界中がなんと言おうと、彼は尊敬に値する人物だ」

笑ってそう語る彼女に心から感謝していると、

「そういえば、これを預かってました」

エリザードの後ろにいた騎士団長がポケットから一輪の花、正確には造花を取り出した。

「どうしたんだ？それ…」

「ウィリア…いえ…アックアからです」

「あいつが…」

「上条当麻の墓にと…渡されました」

そう言うのと騎士団長は墓の前に行き、花を置くと日本人のように両手を合わせた。

当麻のことを思ってる事であろうが、あまりに似合わない格好の騎士団長をエリザードは思わず笑ってしまった。

「フツ……なんやかんや言っても、あいつは上条当麻を憎むことは出来なかったんだろう」

一通りの用がすんだのか、エリザードは真剣な顔で浜面と御坂を見つめた。

「お前達休むつもりがないなら…このままイギリスに戻って貰おう」  
「何か…用ですか？」

「…これから事について話し合いだ」

~~~~~

「さて…皆疲れてる中悪いが…色々話しあわないといけないことがある」

イギリスのバッキンガム宮殿内、かつて『ブリテン・ザ・ハロウィン』の時に「王室派」「騎士派」「清教徒」それに当麻とで最初に会議を開いた部屋に

上条勢力の隊長達、（風斬を除く）とエリザード女王、第2王女キヤリサ、騎士団長が集まっていた。

部屋には皆が座れるだけのソファもあったが、座っているのは御坂、神裂、アニエーゼ、他の者達はみな壁やソファに寄りかかっていた。

「上条当麻が死んで2週間…この間に世界中の至る所でその領土争いが起きてる」

神裂、アニエーゼが座るソファの向かいに座るキヤリサがエリザードに続くように語った。

「最近ではイギリス近海でも見慣れない船が来る始末です」

エリザードの後ろに立つ騎士団長はここ最近緊張続きのなか、疲れた様子だった。

「ローマ正教、学園都市も今回の戦いで友好関係を結んだかと思えば、今ローマ正教では反学園都市の運動が強くなって暴動が起き始めている」

エリザードの言葉に反応したのはソファアの上に体育座りでいるローマ正教者のアーエーゼであった。

「何ですか？勝利を収めたというのに…」

「上条当麻が最後に言った言葉だ。『神殺し』…お前達この言葉に聞き覚えは？」

エリザードは隊長達を見渡したが誰も反応がなかった。誰も知らない事を悟った浜面が最初に答えた。

「さっぱりだ…」

「そうか……あの発言が世界に大きな衝撃を与えた…何せ世界最強の男が神の存在を認めたのだから、おまけに学園都市の目的も『神殺し』ときた」

「各国で起きる上条当麻と関わりがあつた所が襲われている問題に学園都市に対するデモ活動…」

「いろいろ問題は山積みだが、まず決めることは…上条勢力の次期リーダーについてだ」

エリザードの言葉に全員がピクツと反応した。

「今あちこちで起こっている混乱を抑えるためにも…一刻も早く上条勢力の立て直しが必要だ…」

「より影響のある人物を選ばなくてはならない…だが元はお前らが作り上げた組織…我々が横から口出しする権利はない」

「よって…誰か推薦する者はいないか？」

突然の提案に誰も答えないまま沈黙が続いたが、

「もう…潮時なのかも…」

浜面が言った言葉に全員の視線が壁に寄りかかる浜面の方に向いた。

「どういう意味だ！？浜面！！」

「解散…ってことだよ…」

浜面の言葉を聞いた途端、御坂が浜面に詰め寄った。

「御坂！！」

神裂が止めると言う前に御坂は浜面の胸倉を掴んで壁にドン！と押しつけた。

「あんた本気で言ってるの！？」

「…だつたらなんだよ？」

「あんたツ！…あんたが誰だか分かってるの！？あんたは浜面仕上！！『2番隊隊長』なのよ！当麻と一方通行と一緒に上条勢力を作りだした男の一人でしょ！？」

みんな、あんたの実力を認めてる！！自分がみんなを率いようとは思わないの！？」

「今更俺に何がきんだよ？…『聖母のピアス』も壊されて魔術もまともに使えない…俺は元の無能力者に戻っちまったんだよ」

浜面のやる気を感じない顔に能力をまったく使わずにただの拳を叩きこんだ。

さすがに危ないと思ったのか、神裂は御坂を浜面から無理やり引き離れた。

「あんた…今まで当麻の何を見てきたの！？あいつが今までそんな事で投げ出した事だあった！？」

「落ち着きなさい！！御坂美琴！！それに女王陛下も今はそのような話をする時では…」

御坂を抑えながらエリザードの方を見た、当麻が死んで2週間たったがその傷が癒えるにはあまりに短すぎた。だが、

「遅いくらいだ！いつまでも悲しんでいる訳にいかない…ただ悲しんでいるだけなど、それこそあいつの死に泥を塗るようなものだ！
！」

多少苛立ったような顔をして怒鳴るエリザードに一同はビクッと驚いた。

「だが…私としても、上条勢力の古株でもある浜面…お前にとっ
てるんだが…」

「……………ガラじゃありませんよ…」

浜面は殴られた頬を擦りながら、それだけ言って部屋の出口に歩き出した。

「浜面仕上！！どこへ！！」

「帰る…」

ドアを開けて部屋から出た後、浜面はみんなの顔を見ずに呟く。

「悪い……みんな……でもゴメン、今の俺には何も守れる気がしねえんだよ……」

残された者達（後書き）

今回は戦争に関係なかった人達も出してみました。

ただ、冷静でないとは言え：芳川こんな口調になるのかな？

まあ今さらそこを気にしても感じますが、

げんになんも考えずにだしたキャラとかありますし…

そんなこんなで長かったこの話もうすぐ終わり

おそらく次回でぐらいで…

もし続くとしたら、one pieceの続き次第ですかね

考えがまとまって自分で書いた伏線が回収できたらにします。

でも…正直ないと思います。すいません

それと何！度！も！いいますが！！

そんな凄い終わり方しないんで期待しないで下さい。

ではまた

歩みだす友達（前書き）

ついに来ました最終回…

書きたいことは後書きにのせるので

そんなわけで38話と言つ名の最終話行きます！…！…！

歩みだす友達

バッキンガム宮殿から出た浜面は暫くの間トボトボと歩いていると小さな公園に着いた。

公園に入ると手頃なベンチを探して座ると浜面は携帯を取り出してある人に電話を掛けた。

電話は数回のコール音がした後、浜面のよく知る声が聞こえた。

『もしもし…はまづらっ!?!』

「ああ滝壺…俺だ…」

「良かった…こっちに帰ってるって聞いてたけど、連絡がないから…」

「ああ…ゴメンな…連絡ぐらいしたかったんだけど…色々と…ゴタゴタしててな」

『そう…はまづら、大丈夫?』

「あーまあ大した怪我はしてねえよ…」

「そうじゃなくて…かみじょうとアクセラレータのこと」

「ああ…それ…?」

今までしっかりと考えなかったせい、滝壺の声に安心したからか浜面は今までため込んだ感情がここにきて溢れだし、涙が止めどなく流れた。

『はまづら?』

「クソッ!…俺は…なんも変わっちゃいいねエ!!恩人も友達も救ねえなんて!!」

電話越しに聞こえる浜面の声に滝壺は浜面の想いをすべて感じたかのように優しく語りかける。

『……はまづら…早く帰ってきて…会いたい』
「ああ…俺もだ」

涙を拭った後、浜面は立ち上がった。

「でもゴメン…まだやる事があるんだ」
『やる事?…危ない事?』
「まあ…ちよつと厄介な事だが、死にやしねえよ」
『……分かった、待ってる』

浜面は少し名残惜しそうに電話を切ると、再び歩き出した。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

イギリス、ロンドンから少し離れた自然に囲まれたとある病院、ロンドン内にある普通の病院とは違い主に魔術を使うことが目的で建設されたその病院から少し離れた森に浜面は訪れていた。

「よお…大丈夫か?」

浜面が話しかけたのは辺りの木がボロボロに斬り倒され、その上に座る木よりもボロボロなオリアナであった。

「いい加減疲れたわ…」  
「そうか…ほれッ差し入れ…」

浜面はオリアナに向かって水の入ったペットボトルを投げつけた。  
オリアナは受け取ると特にお礼も言わず、蓋を開けてガボガボ飲み始めた。

「休んでねえのか？」

「休めないわよ…ほっておいたら、あの子ホントに死ぬわよ…今は少し休憩中みたいだけど…」

オリアナが喋っていると突如森の奥からドゴォォン！！と鈍い音が響いてきた。

「また始まったわ…」

立ち上がり再び森の奥に行こうとするオリアナの肩を掴み、浜面は言う。

「俺が行く…」

~~~~~

浜面が暫く歩いていると急に木がない広い所に出た。
だがよく見ると木は立っていないだけでほとんどが倒されており、中には根っこを引きちぎった様に倒れている物もあった。そして、その中心には一人の少女がいた。

ラスト オーダー
「打ち止め…」

打ち止めは手足を地面につけ四つん這いのような状態で座り込んでいた。

「はぁ… もう止める…ラスト オーダー 打ち止め」

ラスト オーダー
打ち止めは顔を地面に向けたまま浜面をまったく見ようとしなかった。

一見眠っているようにも見えるが、浜面が近づこうとするとその口を開いた。

「ほっておいでッ！！！」

「…………… そうはいかねえ… これ以上自分を傷つけるお前をほっとく訳にはいかねえ…」

「私の体なんだから！！どうしよう私の勝手でしょ！？」

「だったら一方通行の体もあいつのもんだ、あいつがどう使って死のうがあいつの勝手だろ…」

「うるさい！！！」

今まで浜面を見ようとしなかった打ち止めは立ちあがると浜面を睨みつけた。ラスト オーダー

「それ以上喋ったら…！！！」

「殺すか？やってみろ…こっちも手負いだが口ばっかのガキにやられるほど落ちぶれちゃいねえよ」

バツ！と浜面が言葉が終わると同時に打ち止めは走り出し、ラスト オーダー

浜面に殴りかかったが浜面はそれをかわすと打ち止めの手と襟を掴んで背負い投げのように地面に叩きつけた。ラスト オーダー

「ガハッ！！！」

「ふう……やれやれだ」

倒れている打ち止めの隣に座り、ため息をついていると突然、^{ラスト}打ち止めが浜面の腕に噛みついてきた。

「痛ツイデデデデデデ……！！！！この……痛いつての……！！どこのシスターだ……！！」

デメエは……！！」

噛みつく打ち止めをぶん殴り腕から離れたところを肩を掴んでドンっ！と地面に叩きつけた。

「もう何も見えないのか……お前は……！！」

「アグッ……ウグッ……！！」

抑えられた打ち止めはそれでも尚動ける足を使って浜面に蹴りを入れた。

「どんな壁をも越えられると思った自信……疑うことのなかった自分の強さ……！それらを無情に打ち砕く手も足も出ない敵の数々……！！道標だった兄……！！無くしたものは確かに多い……！！」

現実を突き付ける浜面の言葉を聞きたくないのか打ち止めは蹴るのをやめ手に耳をあてた、だが浜面は手を強引に抑えつけて、さらに聞こえるように叫んだ。

「辛いだろう！苦しいだろう！打ち止め……！！だが今はそれを押し殺せ……！！失ったものばかり数えるな……！！無いものはない……！！」

浜面がそこまで言うのと打ち止めは悔しそくに抵抗を止めた。

「良く考える！！お前にまだ残っているものはなんだ！？」

ラスト オーダー
打ち止めは暫く黙りこんでいたが、突然何かを思い出したかのようにポロポロと涙を流し告げる。

「はあ……はあ………家族が^{みんな}いるよ！！！」

それを聞いて険しい浜面の顔に漸く笑みがこぼれた。

「そうだろ……」

「私……私……約束したんだ……芳川とか小萌、それに黄泉川にも……いつか……みんなで帰るって……」

「そうか」

ラスト オーダー
浜面が打ち止めの上から退くと打ち止めは上半身だけを起こして、体育座りになって泣き始めた。もう大丈夫であろうと悟った浜面はラスト オーダー
打ち止めから離れ森から出て行こうとしたが、

「何時から見えた？」

浜面が睨んだ先には腕を組んでニヤニヤしながら木に寄りかかる御坂の姿があった。

「最初から」

「………なんか恥ずかしいですけど……」

「あつそつ……でもさっきのちよつとはかつこ良かったわよ」

少し嫌味に感じた浜面はそのまま御坂を無視して行こうとしたが、

「でッ… あんたはこれからどうするの？」
「見守るだけだ… 当麻と一方通行に代わってな」

~~~~~

数日後・・・

「ええい！！まったく次から次へと！！」  
「来ましたか…」

怒鳴っていた男が入った部屋は薄暗く中央には12人分の椅子が円卓を取り囲んでおり、入ってきた男によって12の椅子はすべて埋まった。椅子に座るのは学園都市統括理事会の12人の権力者達である。

「まあ今回の議題は… 分かっていると思いますが… ことです」

一人の男が目の前にある機会をいじると円卓に設置されたスピーカーから声が聞こえてきた。

『あーあーテストス！… オイ！これちゃんと録音出来てんのか？』  
『はい出来ていますよってミサカは若干ウンザリしつつ答えます』  
『仕方ねーだろ！新型なんだから！… っとまあそれはいいとしてあーえーっとなんだっけ？』

『あんた何回聞けば気がすむの！？学園都市統括理事会！！』  
『あーそうそれ… そのみなさん！私達上条勢力』2番隊隊長『浜

面仕上と

『3番隊隊長』御坂美琴は今から1週間後に学園都市に行くんで、邪魔すんなよ！…まあどうしてもやりたいって言っならせめて民間人は避難させとくように…だが邪魔しないと言っなら別に俺たちは何もしない…以上！…』

再生が終わるとスピーカーからガーガッー！とノイズが鳴った後、ブツンツという音とともに電源が切れた。

「というメッセージが…」

「ええい！！こんなにも早く攻めてくるとは！！」

「どうします…？」

「すぐに軍隊の準備に取り掛からないと…」

明らかに戦う意思を見せる者達に一人の老人が話に割って入った。

「何もしないと言っているのですから、こちらは何もしなければいいでしょう？」

「信用できるか…！」

「下手に入れば我々を襲いやすくなるんですよ！？」

怒鳴る自分よりも若い者達に老人、親船はただ笑って答える。

「私は覚悟は出来てますよ…あの子達が私に復讐に来るというなら…私は抗いしません」

「…いい加減諦めましょうよ…我々が手を出した相手が何だったのか知らなかった訳ではないでしょう？」

「クツ！？」

親船の言葉を肯定するように貝積が続けて語る。

「彼らも戦う気があるなら民間人を避難させると言っただけで済むんですよ……」

「たったそれだけの事で奴等を信じろ！？」

「だったらどうします？ 戦いますか？ ……あの二人と……」

「そっそれは！」

「今は軍隊も疲弊しきつてます……おまけに垣根、麦野は治療中となつた今……あの二人とやりあえる者は誰もいませんよ……まさか数名の大能力者だけで『上条勢力』の主力の2人とやり合えるんです？」

たたみかける様に貝積が他のメンバーを見渡しながら続いた。

「親船さんに賛成です……奴らとしてもこちらとは戦いたくはないはず……なら手を出さなければいい……」

「もし奴らが私達に襲いかかったら！？」

「だからいい加減諦めて下さい……上条当麻に手を出した時点で我々は後に引くことは出来ないんだ……！！」

~~~~~

「と言う事で学園都市に行く」

「なっ！？」

浜面の言葉に驚いたのは上条勢力の隊長達、彼らの仲間とリーダーが眠る島へと訪れていた。

「本気で言ってるのか！？」

「危険すぎます!!」

仲間たちの慌てる姿に戸惑いながらも浜面、御坂は

「確かに危険かもしれない…けどそれが…ラストオーダー打ち止めの為にもそれがいいと思ったんだ」

「でも危険です!! あなたと御坂に打ち止めだけで学園都市に行くなんて!!」

「もう危険だからなんて事で立ち止まる訳にはいかないでしょ…」

浜面、御坂は彼らの目の前にある墓を見つめると他の仲間たちもそれに知られるように墓石を見つめた。

「もうお前らだって立ち止まる訳じゃねえだろ？」

仲間を見つめる浜面はすでに気づいていた。皆の眼にはすでに己の進むべき道を決めていたことに。

「……………ええ、私たち天草式とアニメーゼ部隊は世界中に存在する我々『上条勢力』に関わりのある土地や仲間を救う為に活動しようと思っています」

「私は私で…いろいろ調べる必要があるからな」

アニメーゼの肩に手を置きながら告げる神裂につづいてシェリーが眠たそうに頭をかいて答えた。

「いつまでも止まってる訳には行かない…それぞれやるべき事をやるんだ…またいつの日か戦う時が来るまで…」

そう言いながら浜面がバツと右手を前に出した。それを見た仲間た

ちもそれぞれ手を出し7人の手が一つに重なった。

「そう言う訳で…みんな、まあ風斬の奴はいねえがあいつにも伝わるだろう……」

次会う時まで…死ぬなよ」

浜面の言葉に全員そろって「オウッ！」と答えた後、彼らはバラバラに歩き始める。またいつか再び会える事を信じ

~~~~~

あの島正確には彼らと同じ次元にない陽炎の世界を風斬氷華は歩いていた。

仲間達と共にそこにいなかった少女はただ歩き続けていた。

（皆も歩き出したんだ…私も進まなきゃ…）

歩きながら彼女はとある少年との会話を思い出していた。

『アレイスターの話じゃ…どうやらこの世界と別世界…科学的にいえば別次元に天使の住む世界あるらしい…ただアレイスターもどうすればその世界に行けるかまでは分からなかった…ただ俺が考えるに、お前が言う陽炎の世界ってのはこの世界と間違いなく繋がって

る。けどこの次元にあるものじゃい…だからおそらく、その世界は天使の世界にも繋がってるはずだ…もしかしたらお前なら行けるかもしれないぞ…』

---

（もし天使の世界があつて…その世界に行けることが出来たら、きっと私は今以上に強くなれる）

当麻の話が事実なら風斬も天使のいる世界に行けるはずである、ロシアで現れたミーシャと同様彼女も科学世界における天使であるのだから

だが、彼女はそこへの行き方は知らない、まったく言っていないほど見当もつかない

だが彼女は思う。もし自分が天使と同等の力を手に入れば私もその天使の世界に行けるのではないかと、そして、その世界にいければこの世界とは全く違う『法則』にであるはずだと。それこそが彼女が求める力であると、彼女は確信していた。

（上条さん…いいえ、ホントはもっと友達みたいに当麻って呼びたかった…）

だから…当麻、私は強くなる…こんな私を必要としてくれる皆の為に…）

~~~~~  
~~~~~

島から戻ったステイルとはある協会も訪れていた。そこには銀髪碧眼の一人のシスターが目の中の十字架に向かいながら祈りを捧げていた。

「行ってきたよ…みんな、それぞれやることが決まったらしい」  
「……………そう」

少女は祈りの手を解くと目の前の十字架と見つめた。

「本当に行くつもりかい？」  
「うん…当麻が言った『神殺し』その言葉の意味は私には分からない…ううん、今の私じゃ分からない…もっと新しい法則を手に入れる為に私は世界中の魔道書を探しに行く…」

ステイルからインデックスの顔を見ることは出来なかった。だが、それでも彼には彼女の顔が決意に満ちていることが分かった。

「だから私は行く…たとえイギリスから、世界中から追われることになっても…」

自分の決意を伝えた後、インデックスはステイルの方を見て尋ねてきた。

「あなたは私について来てくれるって言った…でも私の話を聞いてどう？……………それでも私について来てくれる？」

真っすぐに自分を見つめるインデックスにステイルは吸っていた煙草を携帯灰皿に入れ、目の前のシスターを見つめ、決意と共に言う。



「ついて行くよ…今度は、地獄の底まで」

~~~~~

「ただいま」

「おかえりかな？…オッレルス」

とある家に向かい入れる相棒シルビアに会うなり、オッレルスは告げた。

「ごめん…また旅に出るよ」

「はあ？せつかく帰ってきたのにもう行くのか？」

「まあね…ちよつとやる事ができて…」

オッレルスと長い付き合いである相棒シルビアはそれだけでオッレルスが何をしたいかを何となく悟る事が出来た。

「今回は…ちよつとがんばってみるよ」

「でっ？具体的になにをするんだ？」

「んゝ魔人にでもなるうかなゝ」

「なっ！？…………この前、自分でチャンスを棒に振つといてよく言うわ」

「大丈夫、今度は…何があってもやるよ…………たとえ、目の前に死ぬ人間が現れても…」

「…お前！？」

「もっ…友達が死んじゃうのはイヤだな」

~~~~~

「はぁ…まったく疲れたのでございますよ…」

イギリス図書館で大量の本を持って、行ったり来たりを繰り返すオルソラは本を広げるシェリーの向かいに座りながらポロリと愚痴をこぼす。

「わざわざ悪いね…」

「いえ…私も暇ですから別に構いませんが…一体何を御調べに？」  
「簡単に言えば新しい『ゴーレム』の作り方さ…」

オルソラはなぜ？と疑問に思った顔をした。シェリーはすでにゴーレムを作り出すことができる。その完成度も並みの魔術師じゃ作れないほどの出来である。

「あのゴーレムじゃまだまだ力不足だ…」

「はぁ…そうなのですか？私には十分お強いと思いますけど」

「……あれで終わる訳にはいかないんだよ…」

「えっ？」

「エリスは誰にも負けないって、リーダーの前で宣言しちゃったんだよ」

~~~~~

「俺達もそろそろ行くか」

「ええ……」

「うん」

「オリアナ、ルートはお前に任せるぞ」

「任せといて……ものを運ばせたら私の右に出るものはいないわ」

浜面、御坂、ラストオーダー打ち止め、オリアナはイギリスの空港で自分達の乗る飛行機を待ちながら、彼らは準備をしていた。

「取りあえず韓国まで行ったら、そこからは色々乗り継ぎで行くわよ」

「学園都市に入るルートは？」

「もう決まってるわ……」

「おい打ち止め！ラストオーダー聞いての通り韓国からはまともな買い物は出来ないと思うから必要な物を整理しておけよ」

「大丈夫！！ちゃんとおやつは持ってるから！！」

「……何しにいくと思ってるんだ！？お前は！！」

リュックの中をガサゴソとあさるラストオーダー打ち止めをほおって御坂は浜面に尋ねた。

「ねえ……なんで打ち止めを学園都市に連れて行くこうなんて思ったの？」

「まあ……まずあいつの願いを叶えるためかな」

「願い？」

「ああ……あいつの家族でもある芳川や小萌先生に会えばあいつの精神的に落ち着くと思うし……」

浜面の言葉に御坂はロビーの大きな窓から飛行機を興味津津に見つ

ラスト オーダー
める打ち止めを見て首を傾げた。

「なんか、もう十分安定してると思うけど…」

「あれは半分ぐらいは嘘だ！俺達で癒えてない心の傷があんな子供に簡単に消せるわけないだろ」

それに、と付け加えながら浜面はロビーに並ぶ椅子に腰かけた。

「お前も見ただろ？あいつの力！あいつはレベル5になる器だ…だつたらそれにあつた環境がいる」

「そういえば芳川さんって一方通行の能力開発にも関わってたって言ってたわね…」

「ああ…それと、俺もあの人に用がある…」
「用？」

「ああ、もう一回だけ追いかけてみようと思うんだよ…昔、学園都市に來た時に描いた夢を…」

「あんた…まさか…」

「俺には新しい力がある…」

「……………また滝壺を待たせるつもり？」

「……………大丈夫…あいつも来るから…」

ええッ！！つとロビーに響くように御坂は叫んだ。彼女はおそらく知らないであろうが、滝壺という少女は御坂以上に頑固なのである。

「ほらッ！あんた達！飛行機來たわよ！！」

「分かった！…ラストオーダー打ち止め！！」

は〜い！と3人に聞こえるように返事をする。近くの置いてあったリュックを背負うその前にリュックの中をあさって一つの電極のついたとあるチャージャーを取り出すと、

それを首に巻き付けた。

「いってきます…」

ラストオーダー

打ち止めは誰に向けるわけでもなく、ただポツリと呟くと彼女を待つ仲間の元に走り出した。

こうして残された者達はそれぞれの道を歩き出す。彼らはいっまでも立ち止まっている訳にはいかない。

戦いはまだ……………始まったばかりだ

歩みだす友達（後書き）

長かった、ついに終わった。

長かったこの作品もついに終わりました。

書いていくうちには不安でしたが、読んでくれる皆さんがとても暖かく
すぐくやりやすい環境でした。こうして完結出来たのも応援してく
れた皆さんの

おかげです。どうもありがとうございました。

内容に関しては一応みんなのこれからを書けたので良かった思いま
す。

何度も言いますがこの続きは書きません。

もしも、これからの one piece を見て思いつくなら書きま
すが

正直もうないと思います。

後、この話の中で何か分からないことがあれば感想の所に書いてく
ださい。

できる限りの回答はしようと思います。

では、最後に大好きなジャンプっぽく

『御愛読ありがとうございました!!!!』

次回のマルコの作品に御期待下さい!!!!!!』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9170/>

上条当麻VSローマ正教 & 学園都市

2011年1月14日11時59分発行